女鑑

第拾參年第九號

明治三拾六年三月一日發行

口繪

英國アーネスト、ジャット名畫
共立女子職業學校職員及卒業生
吉野山の名跡
清國杭州風景
光の女王カーマン・セラ孃

重要目次

妻君の養成　社説
日本の婦人に就て　下田次郎
玉の輿記　須藤鳴門
家庭割烹　間野知十
大阪博覽會見物　水主菖眼
姉悼（小說）　齋藤朱影



女鑑 第拾柒年 第九號 目次

口繪

英國アーネスト、グリフトの名畫

共立女子職業學校職員及卒業生

吉野山の名跡

清國杭州風景

光の女王カーマンセラ孃

社說……一

妻君の養成……

論說……五

二重橋御門前の所感……山田倉太郎

日本の婦人に就て……文學士下田次郎

史談……一三

遊女龜菊……文學士小林雨塔

玉輿記……須藤鳴門

學藝……二三

通俗土佐日記……兒玉彌三郎

和歌評釋小倉の色紙……中川愛氷

家政學大要講義……磯部武者五郎

家庭……三二

女子服裝改良に就ての希望……佐伯氏談

家事衛生一夕話……吉村量

挿花の話……小畑いく子

裁縫……おや子

家庭割烹……岡野知十

雜錄……四八

古美術品展覽會……………………………………記者
日高見の國……………………文學士濱田紅於
躑躅と杜鵑……………………………清水橘村
雨の笠置山……………………………松原隱士
大阪博覽會見物……………………………水主青眼
小説……………………………………………七三
姫椿……………………………………………齋藤素影
文林……………………………………………八〇
和歌……………………………………………久我建通外
新体詩……………………………………………橘村生
教の庭……………………………………………八三
早苗多（歌）……………………………………横田秋子外
池亭に蛙を聽く（文）………………………山口琴子外
彙報……………………………………………九五

○數十件

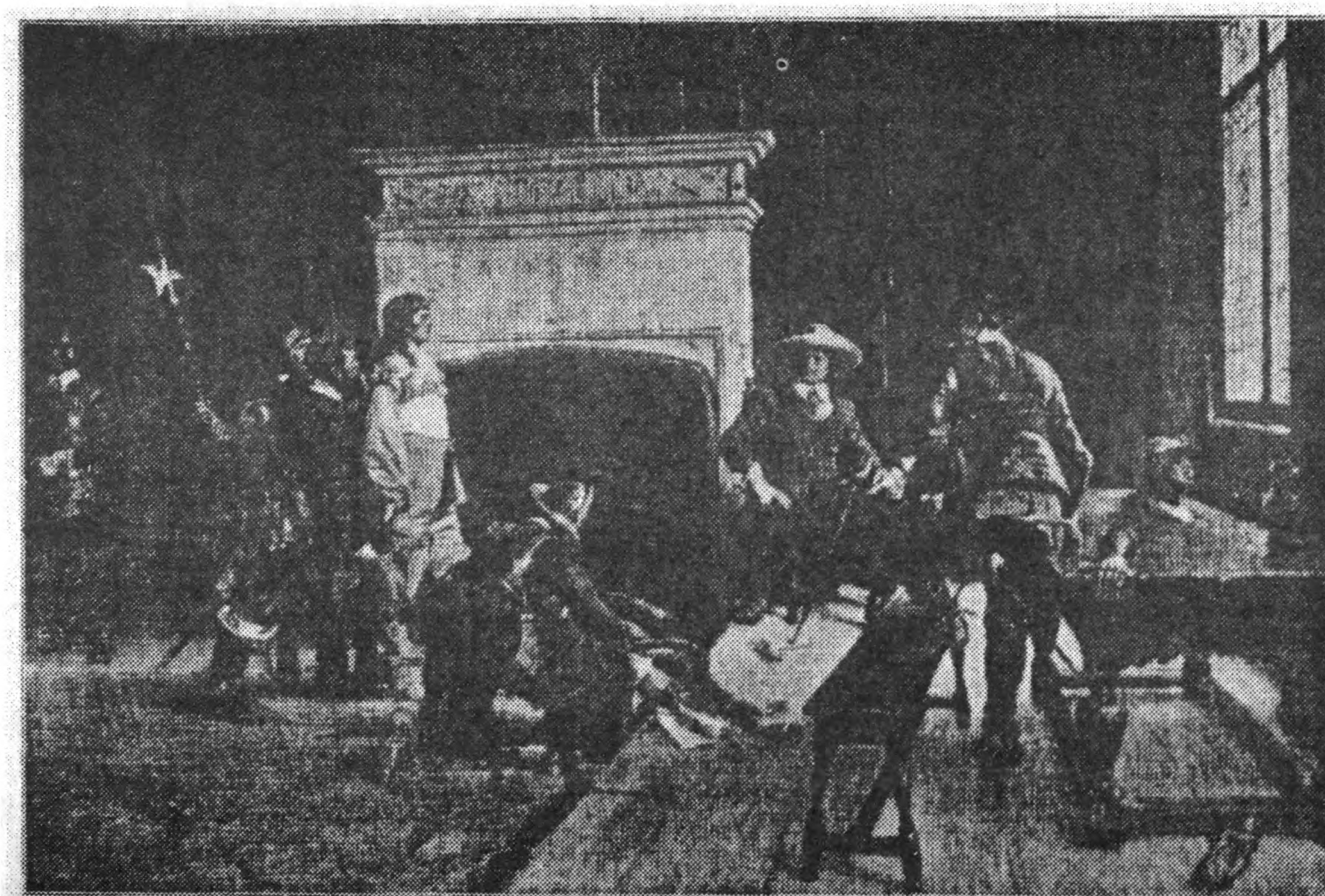
定價
一册　金拾錢
六册三ヶ月分　前金五拾七錢
十二册半年分　前金壹圓拾錢
廿四册一年分　前金貳圓拾錢
全國無還送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行　金三拾錢
半頁　金八圓
一頁　金拾貳圓
表紙一頁　金拾六圓
（色刷は特に御相談に應ず）

明治三十六年四月三十日印刷
明治三十六年五月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊素一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地
印刷人　並木頁雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



英國アーネスト、クロフトの名圖

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

坪内文學博士校閲

通俗世界文學

第一編 繁野天來氏著 ミルトン 失樂園物語

第二編 杉谷代水氏著 沙翁物語 マクベス外二編

毎編頗美本泰西名畫數葉入 每篇紙數百五十頁

全部五拾篇毎月發行

六冊 金壹圓拾四錢 十一冊 金貳圓廿二錢

廿五冊 金四圓六拾錢 五十冊 金九圓

郵税一冊ニ付金四錢ツヽ、毎月一回發行

▲世界文學は古今の傑作を網羅し

▲血あり肉ある原作の全影を邦文をもて最も巧に縮寫せるものは本書也

▲文學研究者の好階梯、一般國民の最上の讀物

通俗文學

第一編 饗庭篁村、幸田露伴、關根正直、藤岡作太郎、芳賀矢一、尾崎紅葉諸先生校訂

芭蕉翁繪詞傳 附 句集 蝶夢作露伴氏校訂

第二編 近松淨瑠璃三種 近松作篁村氏校訂

◉三編 雨月物語 五冊 芳賀氏校訂

◉四編 娘節用 紅葉氏校訂 （近刊）

家庭娛樂の源泉！紳士淑女愛好の逸品！旅行の伴侶！裝釘寸珍優雅美本！收むる所詩歌小説戯曲史傳紀行隨筆雜論等凡て世に得易からざる珍本稀籍を網羅す。定價上製金廿八錢並製金廿錢宛郵税各四錢ツヽ、（毎月二冊宛發行 毎編紙數二百頁）

校訂者は當代の第一流！文學的無二の珍寶！倶樂部又は圖書館の備品！室内最上の裝飾品！

最廉價なる文學の讀物！ 全部百冊 ◎△△△△△△

東京神田 合資會社 富山房

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

●再版發賣廣告

●樞密院副議長　東久世通禧伯題字
●華族女學校學監下田歌子女史序文

東京帝國大學醫科大學卒業　秋山七朗先生著

再版

女子敎育　家庭敎養法

全一册

◎製本菊版　大本
◎四號活字鮮明刷
◎正價金五拾錢

女子敎育は今日の一大問題にして、家庭に學校に其書甚だ少しとせず、然かも專攻學家の手に成り生理に照し衛生に基き學理の上より家庭に於ける敎養の方法を詳說したるものや即ち少し、殊に難を姙娠の前に起し分娩 保育より敎育、性行に迄り家庭を通じて必要なる敎養の方法を詳說したるものに至て本書に於て始めて之を見る、是れ本書に題して女子敎育家庭敎養法と謂ふ所以にして、試に其目次の一班を擧げんか第一章に姙娠を說き姙娠の徵候・精神の衛養、身體の攝養、乳房の準備を詳說し、第二章に分娩に入り產前產後に付て產室、出產用具、出產、產褥中の用意を說き、第三章の生兒の保育には母乳、乳母、獸乳より入浴及胎髮、臍帶及衣服、啼音睡眠及外出、乳齒、離乳、種痘、保姆、疾病、健康、醫師藥用、服製、玩具及遊戲、第四章の敎育には體育智育德育に付き身體の發達保護、衣服飲食、智力の發達、視官、聽官、觸官、嗅官、味官、筋肉官、記臆想像、概念、斷定、推理、性情、情慾、色慾、慾望、情愛、情操、推考意思、摸範、敎訓、習慣を分說し第五章には放縱、傲慢、沈鬱、過敏、怯懦、刻薄、輕躁、懶惰、嫉忌、好奇等の各性行に付矯弊の方法を詳說し、凡そ女子敎育に於て最も必要至重女子の知らざる可からざる家庭の敎養法は擧て漏すなく生理的に心理的に衛生的に學理の定則より詳說細述したるものなり、是豈に生花の書を讀み點茶の書を讀むと其必要同日の論ならむや、苟も母たり女子たる者の座右に必ず缺く可からざる大好書也、賢母たらんとする淑女請ふ必ず一本を購讀する所あれ

東京市麴町區飯田町四丁目三十番地

發行所（電話番町四八二番）自治館

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

天靈泉を降して病者を救ふ

▲病は醫者に非ざれば全快せずと思ふ事勿れ弊堂販賣の靈鑛泉は醫者の藥にまさる大効あり

世の病者諸君に謹告す今日世に跋扈する賣藥の數は實に六万餘種なり而かも此六万有餘の賣藥を以てして僅々四百四病を治する事能はず殆ど無効に等しき者なり又現今醫者の或る部分を見るに所謂仁術てふ美名の下に不當の利益を貪り可憐不幸の病者の膏血を吸收す亦殆ど仁術の賊たるやの感あり諸君は右等賣藥と醫者の爲に年々巨多の金錢を徒費し不經濟不衛生をなしつゝあり速に猛省一番し鑛泉治療を實行あれ

▲藪醫者は靈泉の効顯大なるを妬み病者の服用を沮めども政府が免稅せし良藥故必ず服せよ

天下靈泉にまさる良藥無し

病者 安心

官山 藥山

靈鑛泉

◎政府免稅醫藥之大王◎

効能は無量廣大病として一々全治せざる事無し是以て他藥の如く効能を掲書載せず

誓つて全治すば試みに五瓶服用せく長年難儀する病人是迄醫師に懸つて効無ち平癒『故に輕症は勿論諸病一度之に觸るい時は忽合せられし神聖の天賴なれば⟨に⟩して有らゆる藥の原素を調此靈泉は平凡の藥さ異なり天然

●内外應用

三日分金十五錢　七日分金卅五錢

◎効驗不思議難病即治◎

見本入用は金一圓送れ二週分發送

照會郵劵封入

全國各地特約店有尙廣く募集す

總本舖　東京日本橋區蠣殼町二ノ三　宮本龍眼堂

代理店　同　日本橋區上横町三番地　安川晃榮堂

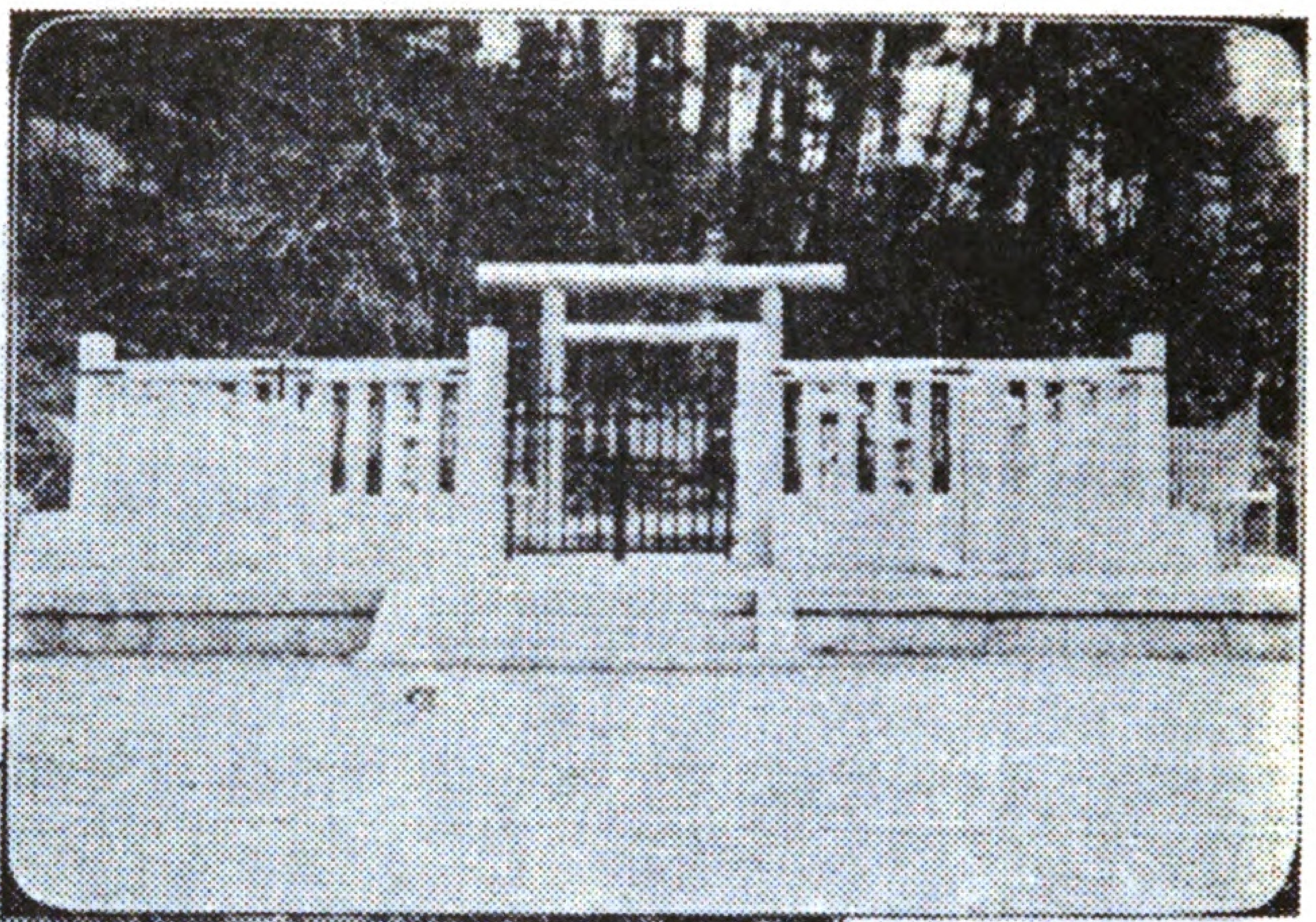
同　深川區佐賀町二の十一　福田彥兵衛

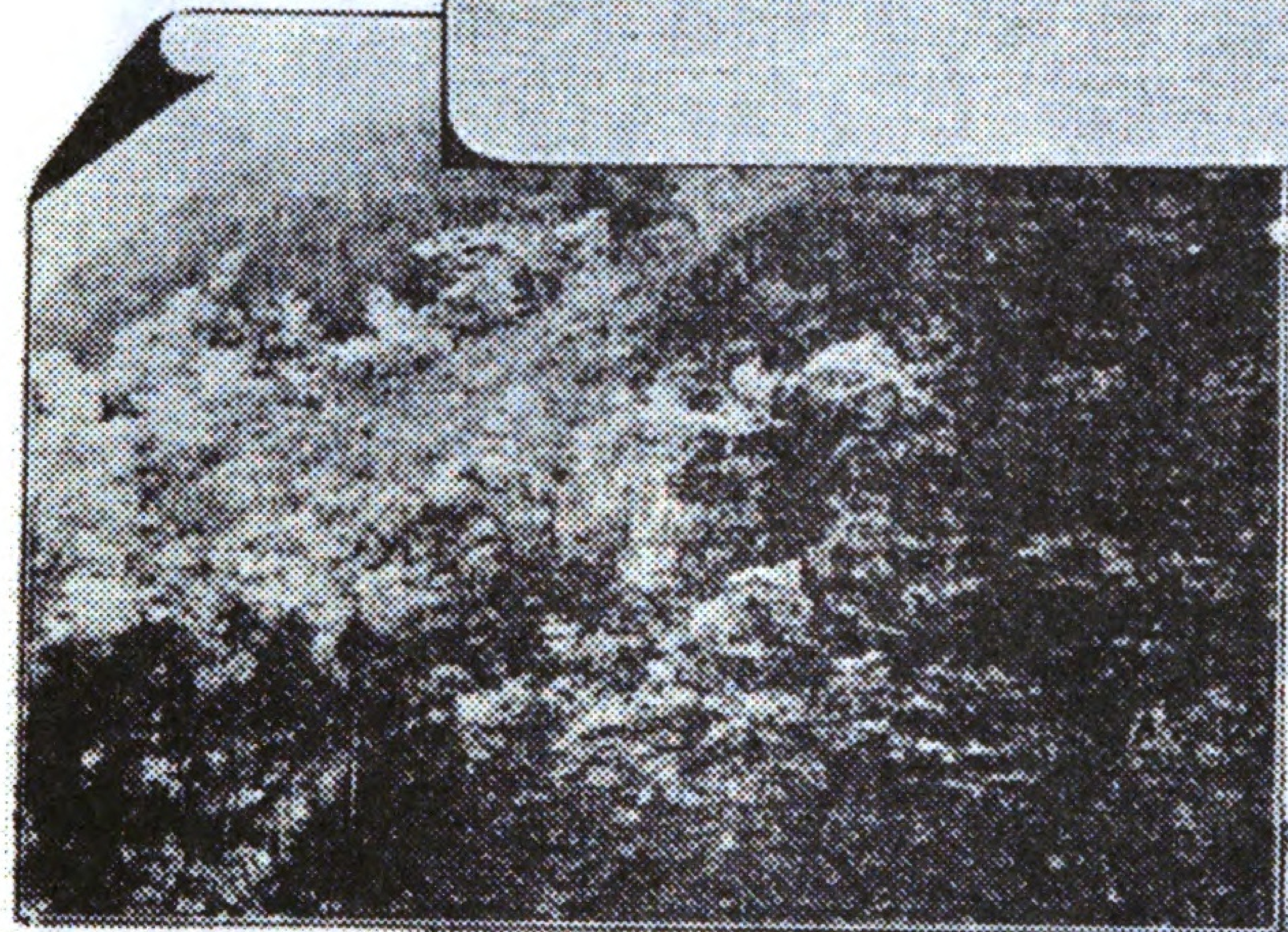
(取次)　東京日本橋横山町 佐野大和堂　●同神田花房町 山崎帶園堂　●同京橋區松屋町一 中山濟生堂　●同京橋銀座一 佐々木支兵衛　●同淺草並木町 遠山源左衛門　●横濱伊勢崎町 安川支店　●長崎縣平戶 卜部舒夫　●常陸石岡本町 塚本茂之助　●武州入間川 小田酒店　●長崎市西中町 今宮衛生館　●同京橋銀座三 松澤八右衛門　●同神田鍛治町 大木合名會社　●同日本橋小舟町 安川支店　●東京下谷池の端 守田治兵衛

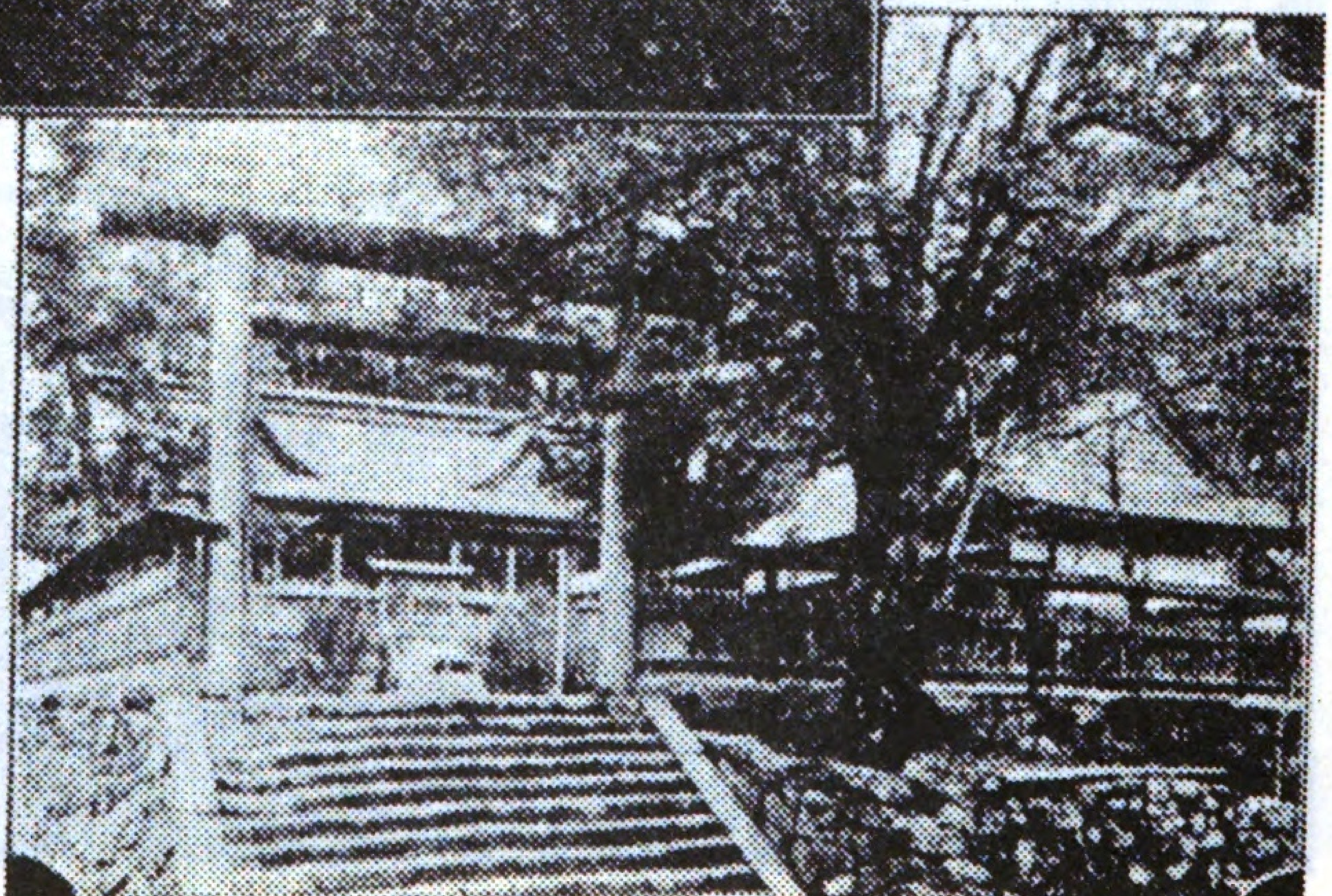


共立女子職業學校職員及卒業生

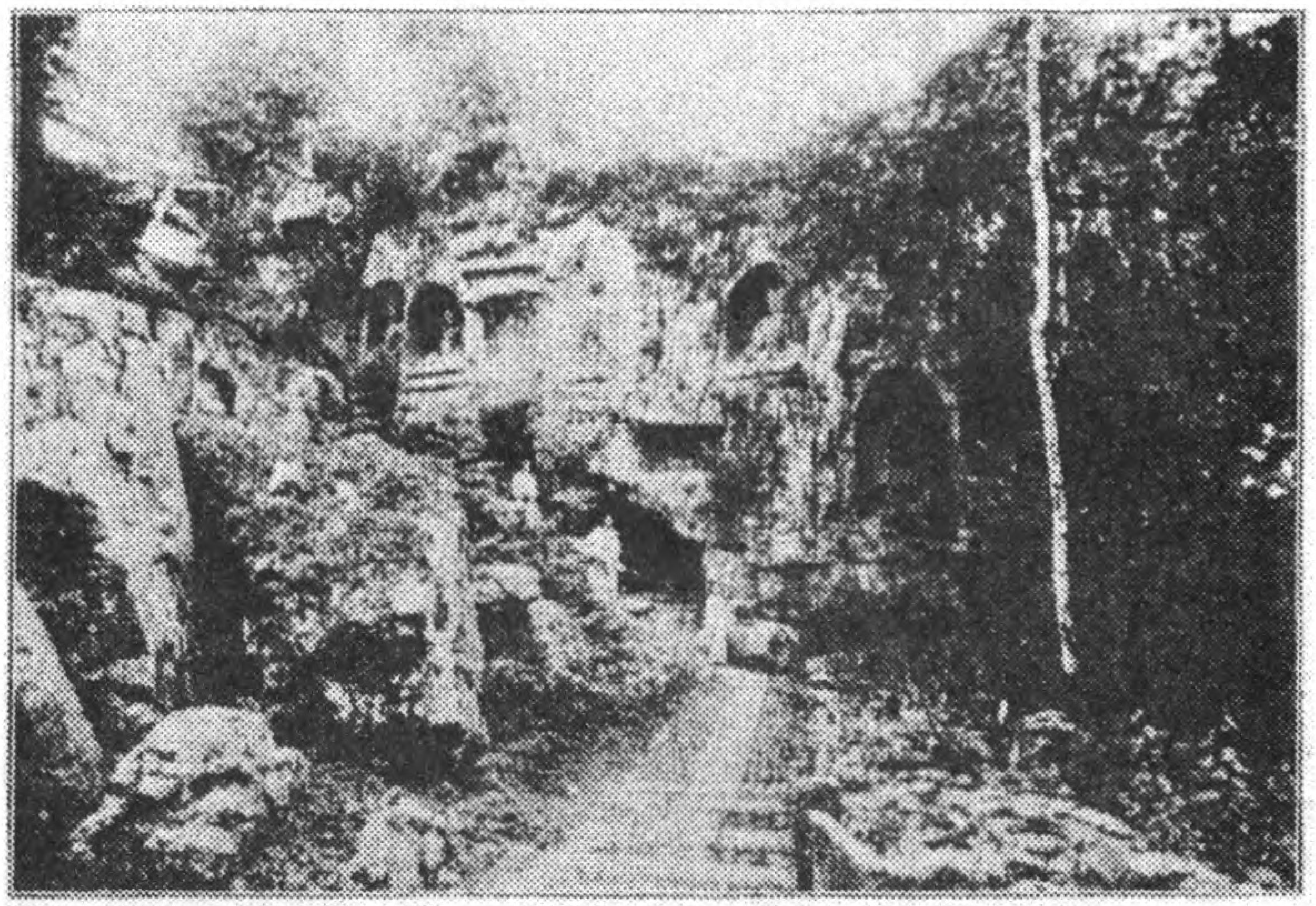
吉野山の名跡


後醍醐帝御陵

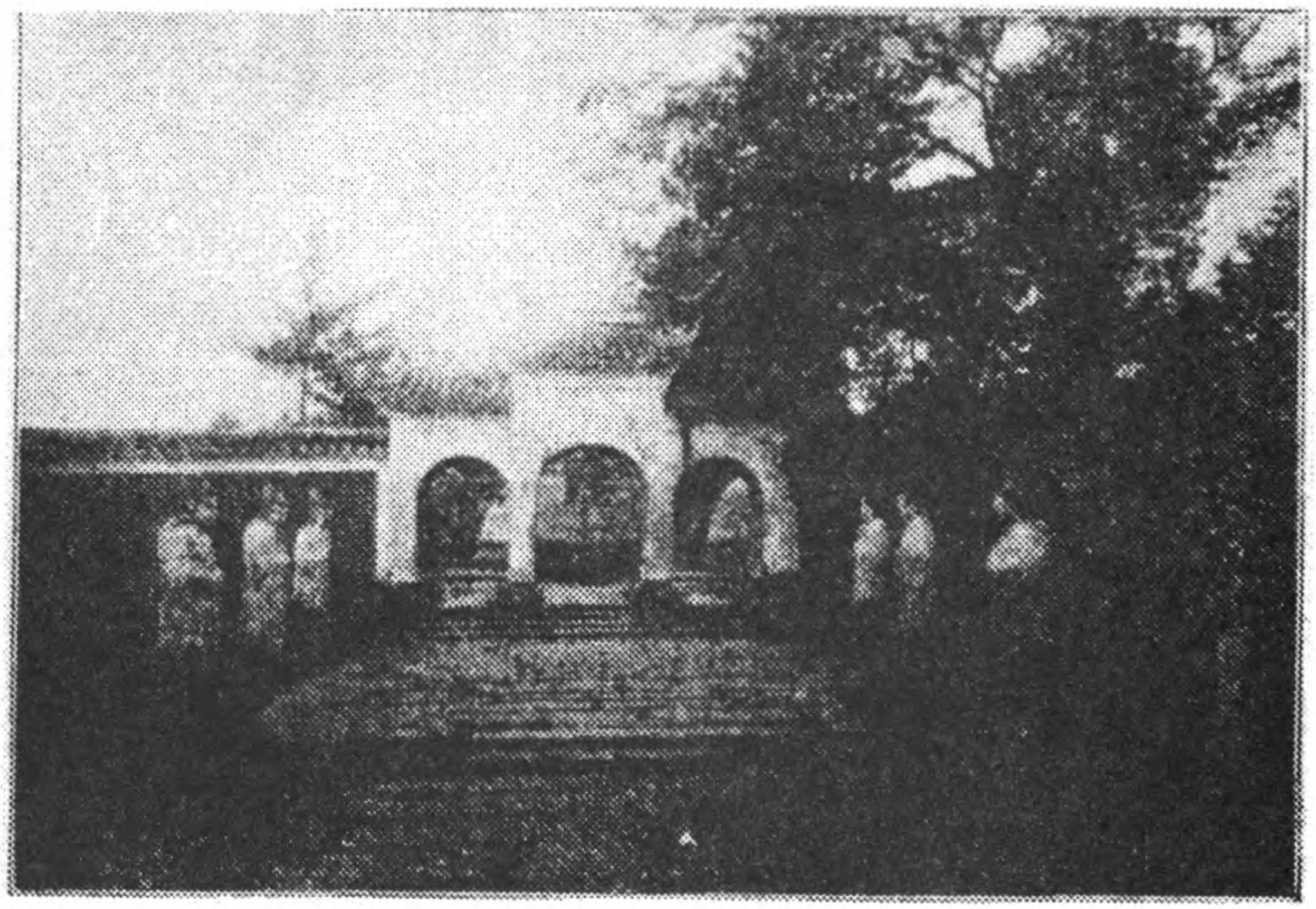

上の千本櫻


山口神社

清國杭州風景



靈院の洞



鄂王墓



カアマンセラ孃（雜錄參看）

女鑑　第十三年第九號

妻君の養成

青眼子稿

（私立東京高等女學校の開校に就て）

徒らに廣大なる校名を假りて、故らに學科を高尙にし、家庭と遠ざかり、親と遠ざかり、夫と遠ざかり、子と遠ざかるに至らしむるは、女學校が女生徒を敎ふる所以の道にあらず。

女の意義は何處までも女ならざるを得ず。女にして女らしからずして、却つて男らしきは、女に於て何の取るところかあるや。取るところなき者は、世に於て殆んど無用のものならざるを得ず。夫れ家庭に遠ざかり、親に遠ざかり、夫に遠ざかり、子と遠ざかれる女子は、女にして女らしからざるものならずや。則ち女としては、取るところなきものなり。世には殆んど

無用のものなり。然らば則ち斯の如き女子を教養する學校は、縱ひ其の校名は廣大なるも、其の學科は高尚なるも、眞成なる女子を養成するものにあらずして、變成男子を生出するものなりといふものあるも、恐らくは辨疏の辭に窮せざるを得ざるべし。

女子の世界は家庭なり。而して家庭を組織するものは、親子なり。兄妹なり。夫妻なり。女子にして、親子の緣薄く、兄妹の間疎にして、夫妻の關係又淺きものは、其の世界以外に孤立せるものにして寔に不幸の人たらざるを得ざるなり。故に女子は如何にしても、家庭のものたらしめざるべからず。而して家庭のものたらしめむには、必ずや妻たらしめざるべからず。女子の本分は人の妻たるにありて、家庭の基は實に妻にあればなり。

棚橋絢子女史は、その監理せる私立東京高等女學校の開校式に於て演べて云はく、本校の目的は、たゞ「妻たる人」を作るにありと。その語や甚だ簡單なり。其意や甚だ平凡なり。然れども此の簡單なる語句の中には、高遠なる旨趣の含蓄せるを見ずや、此の平凡なる意義の中には、深長なる意味の存在せるを認めずや。蓋し女子の目的は、妻たるにありて、妻としての務は、

夫に事へて貞實に、舅姑に對して孝養の道を盡すに在るは云ふまでもなく、家事を治め、家計を理め、家庭を和らぐるに在るなり。而して是等の務は凡ての女子が、當らざるべからざるところ、而も容易に之を全うし難きところのものなり。この全うし難きところのものを敎へて、女性の本分を完全ならしむるは、棚橋女史が女子養成の旨義にして、則ち私立東京高等女學校の目的なるべし。果して然らば、予輩は女子敎育の眞成なる意義よりして、此校の發達を希うて、多くの希望を其の將來に屬せざるを得ざるなり。女史の經驗と、熱心と德操とは世間の重視するところ、誰れかまた其の將來の成功を疑はんや。

校名の廣大なるものは別に之れあらん。學科の高尙なるものは別に之れあらん。校舍の巍々たるものは別に之れあらん。結構の整備せるものは別に之れあらんも、善く實踐躬行の道を敎へ、女らしき女を養成して、善良なる妻君を作る學校とては、猶は未だ其の類多からざるの感なき能はず。或者は泰西の新智識を注入して、有爲活潑なる女子を養成せんといひ、或者は我國從來の德性を涵養して、貞淑穩和なる婦人を育成せんといふ。而て其の弊の生ずるところ一

は突飛となり、一は因循となりて、其趣は相異れりと雖も、其中を得ざるや則ち相同じ。是時に當りて、女史が斷乎として『妻君』なる二字を標榜とし、女子敎育界に立つ所以のもの、豈に偶然ならむや。蓋し時弊に視て以て、深く思を致せるに因るなるべし。

然りと雖も『妻君』なる語をして、世の翩々たる者の口より出でしめば、讀みてたゞ字の如きのみ。誰れか又た其間に高遠なる旨趣と、深長たる意義の存在せるを思はむや。妻として、母として、完全なる經歷を有すること女史の如く、多年女子敎育に經驗ありて熱心なること女史の如く、品性高くして、德操の正確なること女史の如くにして、始めて此語を標榜して世に立つを得べし、而して世人もまた始めて滿足を表すべきのみ。

顧に三輪田眞佐子女史の三輪田女學校に於ける、その旨義とするところ殆んど同一なるなからんや。兩女史の女子敎育に於ける、其の所見を同うし、其の經驗を同うし、且つ其の品性と德操と熱心とに於ても粗々相似たり。今は兩女史皇城の南北に分れて、共に女子敎育の任務に當り、眞成なる女性の發育を謀らんとす、我國の女子敎育之れよりして、整然として緒に就き、靡然として正に記するを得ん歟。是れ豈に妙齡女子と、其の親たる人の幸福のみならむや。

論說

二重橋御門前の所感（つゞき）

興風女學校長　山田倉太郎

時勢に變遷あり、彼の後醍醐帝の御時を見ずや、綱維世に彝倫なく父子の親なく、君臣の義なく、綱維壞敗し去り世は全く逆賊の世となりぬ、高時一たび鞭を揚げて呼號すれば、百萬の兵其の指揮に從ひ、尊氏起つて叛旗を飜へせば、從ふもの雲霞の如くなりて、恐れ多くも陛下には、

さして行く笠置の山を出でしより
　天がしたにはかくれがもなし

と詠じ玉ひしが如く、六十余州玉體を安んじまゐらする所なきに至りたりき、是の時に當りて陛下を負ひ奉りて、君臣の大義を示したりしは誰ぞ、即ち河内金剛山の下なる楠多聞兵衞正成にあらずや、是所謂赤毛布にして、決して朝歌夜飮の都人士にはあらざりしなり、降りて室町幕政の末世は應仁以來の兵亂打ちつゞきて、恐れ多くも御所は全く壞敗に歸して艸茫々たり、公卿は皆諸邦に逃散して、自ら身を措かん所を知らず、恐こくも陛下には鞍馬山後の幽谷なる貴船神社の拜殿に破簾を垂れて籠らせ給ひ、御臺盤所も具らせ給はざりしに、當時餅屋某といふもの朝な〳〵餅を御食に献進せしもて、僅に御饑を忍ばせ給ひきといふ、是の時に當り、いたく慷慨して御内勅を請ひ奉り

之を遙に尾州なる織田信長に達せしものは、所謂江州の赤毛布立入宗繼にはあらざりしが、又織田公といへとも、決して都人士にはあらざりしなり、即ち大内を經營し奉り、百官百司の歸京を促して終に我が日本帝國の基礎を已に摧けたるより推し固め、陛下に對し奉りて、克く大忠なりしものは皆是赤毛布にして都人士にはあらざりしなり。嗚呼古より都を開化して、亦自ら都を破れる者は都人士なり、一旦事あるに當りて、義勇公に奉ずるものは實に赤毛布に多かりしなり、是れ果して何等の理勢ぞや。

抑も國家の隆替は、綱維の張ると弛ぶとに在り、綱とは何ぞ三綱是れなり、君臣義父子親夫婦順をいふ、維とは何ぞ四維是れなり、禮義廉耻をいふ、是漢學者流の口吻の如しと雖、決して然らず、「我か臣民克く忠に克く孝に」との敎育勅語を拜讀して、聖意の程を味ふべし。

明治昭代の今日あるは、維新の際天下の志士、綱維を張ることに務めたればなり、然るに僅に三十余年にして、すでにこの風俗の頽敗を見る、綱維果して張れりとなすか、在上の君子肉食の者鄙なりとの嘲りを免がるゝを得べきか、抑も又敎育の任にあるもの其の責に與らずとなすか、猛省せずして可ならんや。

今學生々徒の唱歌をきくに

君が代は千代に八千代にさゞれ石の
いははとなりて苔のむすまで

と敎師果して如何なる心を以て、之を生徒に歌はしむるぞ、生徒果して如何なる心を以て之を歌ぞ、君が代の千代を祝せんには、恐れ多くも明治二十三年十月下し賜へる敎育勅語の御趣旨を奉體せざるべからず、是れ毎朝必ず謹嚴奉讀すべき寶典な

り、一日も其の實行を怠るべからざるものなり、然るに今の教師學生近く自身に關係せる『我が臣民克く忠に克く孝に』との聖意を奉せず、君父を疎かにし、禮義を蔑ろにし、君父に縁遠き宗教を論じ、哲學を議するもの多きが如きは是れ果して何の心ぞや、

宗教も哲學も敢て無用と謂ふには非ず、然れど一般普通書生には益なくして害あらん、所謂智者過レ之愚者不レ及の深意思ふべし、

又少年書生の歌ふ所の彼の『嗚呼正成よ正成よ』とは如何に余は楠公をば一の歷史談として讀み去るを惡む者なり、楠公の如き小楠公の如きは所謂克く忠に克く孝なりし人にして、其の內室の如きば殊に克く其の子弟を教育せる賢婦人なり、實に敬崇して模範とすべき人格なり、君が代の八千代を祝せば、人々父たる者は楠公の如く、母たるものはその夫人の如く、子たるものは小楠公の如くあらんと心懸けざるべからず、果して此の如くならば、私德善に公德美にして、世に內亂あることなく、元弘當時の如く、再び楠公を出すこともなかるべし、豈慶たからずや、生徒諸子教師諸君、果して如何なる心を以て歌はしむるぞ歌ふぞ、今風俗頽敗の中『嗚呼正成よ』との歌を聞けば、亦大いに感慨に堪へざるなり。

方今の趨勢科學教育は進めり、而して教義教育は大いに衰へたり、此の如くにして荏苒經過せば、趨勢のいたる所或は恐るべき變遷に遭遇せんか、余は杞憂に堪へざるなり、故に余は世間幾多名士の風俗改良其の他種々の方法を講せらるゝに反し、先づ德義扶植の要を主張し、特に子弟教育に關して、世の人士に左の希望を囑せざるを得ず、

諸學校長は

學問の多少に拘はらず、世故に經歷し、其他に德望ある人、

幹事は
學問ありて事務に敏活なる人、

教師は
君臣父子の情の離れざる様禮義のしめくゝりを教ふるを先とする心得ある人、

生徒には
實學を主とし言語を寡くせしめ、丁寧なる言語を遣はしむること、

如是にして一村は一村、一町は一町、又一區一郡所謂市町村制風に固め行かば、終には『克く忠に克く孝に之を中外に施して悖らず』との聖意にも副ひ奉り『君が代は千代に八千代に』の歌意をも實行するに近からんか。

要するに政治家教育家共に皆人情の趨勢に注意して、天の未だ陰雨せざるに迨むで程能く禮義のしめくゝりをなさゞるべからず、抑も人情の通弊は浮くにあり、浮けば則ち散ず、散ずれば則ち輕し、輕ければ則ち薄し、薄ければ則ち終に本心を喪ふに至るべし、墮落何ぞ學生に限らん、故に孟子は言へり『學は其の放心を收むるに在るのみ』と、孔子も『博く文を學んで之を約するに禮を以てす』と曰へり、方今博く文を學ぶは固より大いに善し、たゞ禮義のしめくゝりなきをば大弊とす、禮義とし言へば徒らに頭を下げ、辭儀することゝ謂はんか、是れ枝葉なり、小節なり、須らく禮義は根本ならざるべからず、大節ならざるべからず、何をか根本大節といふ忠孝の旨を心得ることと是れなり、之を中外に施して悖らざらんことを要す〻是れなり、是れ所謂眞の禮義なり、之を知らば頭も下ぐべき時には下ぐべく、辭義も自ら程よく出で

來べし、街も根本大節を知らざる以上は、豈趨勢の終に底止するあらんや、是れ余が特に二重橋御門前の所感を説く所以なり、世の父兄以つて如何とす、在上の君子又以つて如何とかする、語に曰く「君子の徳は風小人の徳は艸、艸之に風を、尙ふれば必ず偃す」と希くは朝野の人士大いに猛省せらるゝ所あらんことを。　（完）

日本の婦人に就て

女子高等師範學校教授文學士　下田次郎君賊説

本日此日本女學校に於て、第二回卒業授與式が擧げられまして、其盛んなる式に列し、且つ皆さんに御話することを得るのは、私の甚だ光榮とする所であります、唯今も校長さんから御訓諭があッたやうに、此卒業と云ふことは、將來の進路に向ッて、階段を一つ履みかけたことに過ぎないのであッて、是からが大事なのであります、それで今日の卒業を以て決して滿足することは出來ないのみならず、是より得た所のものを基礎として更に將來に向ッて勇進せねばならぬ、それに付ては校長さん初め唯今根本先生から有益なる御話がありましたから、殊更に私が改めて申上げることはありませぬ、併ながら茲に出た以上は何か又私の考へる所を御話しなくてはならぬ。

それで一體日本は名物に富んで居る國である、先づ申すも畏いことであるが、上には萬世一系の皇室を戴き代々其御仁政に浴し、其民　昔から忠良な臣民として皇室に仕へて今日に至ッて居るのは萬國に其例無く、實に世界に誇稱するに足ることである、日本の國體の萬國に秀て居ることは無論

であるが、尙は此外に名物が澤山ある、例へば日本の風景の如き非常に優れて居る、外國に行ッて向ふの景色と比べて見ると初めて日本の景色の宜いと云ふことが分る、是も日本の名物である、それから地震、是も日本の名物である、近い頃歸ッた私には此地震のあることが屢々ヒヤ〳〵する感じを起さすのである、併し日本の最も名物である所の一つは日本の女である、日本の女は實に日本の名物たるのみならず、又世界の名物である、なぜ世界の名物であるか、第一に日本の婦人は愛嬌がある、西洋の婦人は賢いけれども、兎角愛嬌に乏しい、日本の婦人は常に笑を傾けて非常に愛らしい所がある、其他日本の婦人は一樣に髮が黑いとか或は衣服が珍しいとかいふことがある、例へば脊中に負うて居る帶であるが、アレは西洋人には非常に珍らしい、彼等は日本の女の脊中に負うて居るのは何かと屢々問ふのである、それから歩き方に於ても內輪に歩いて居る、是も西洋に無い珍しいことであるし、又途中で行遇つた時に話なぞをして分れると四五間はチヨコ〳〵と走る、其他お辭儀の仕方など〻云ふものは總て西洋人には珍らしい、西洋人の芝居に於て屢々斯る日本の女の特色が演せらる〻のである、又自分が初めて外國から橫濱に着いた時に最も面白く珍らしく感じたのは此婦人である、日和下駄を穿いて足袋も無く妙な髷を結ふた女が羽織を着て歩くのや、子守りが一種の風をして子を負うて居るのやなどが最も目に着いたのである。

それで昨年の十月亞米利加の紐育に居つた時に女子展覽會と云ふ會があつて世界の十數箇國の女が出て各々其國の服裝をなし、其國の住居が出來て其中に居つて色々な品物を賣り音樂を奏して居つ

た、其中で最も衆人の目を惹いたのは日本の女である、日本の女の室は他の國の女の室の二倍を取つて居つて、其女の頭には一パイ簪を差してお姫樣のやうな風をして琴の前に坐つて居るのがあるし、其外色々な手細工などをして居つたのもある、又千九百年の巴里の博覽會に於ても、世界一週と云ふ見世物が出來て、各國の婦人が其國の建築に摸したものゝ中に居ッて、其本國に於ける模樣を現して居ッたが、コヽでも日本の女は最も人の目を惹いたものである。

要するに日本の女は今日世界の名物である、併ながら我々は斯る意味に於て日本の女が名高いのを喜ぶべきであるか、西洋人が唯外觀に依ッて日本の女をソヤし立てるのを以て日本の婦人は名譽とすべきであるか、日本の婦人は外形は如何にも珍らしいであらう、世界の注意を惹くであらう、併ながら日本の婦人の最も誇り且つ名物たる所以は其服裝や髮や形や風俗にあるのではなくして、實に其性質にあるのである、然らば日本の婦人の性質はドンなものであるか、思ふに日本の婦人ぐらゐ良くマメ〲しく立働き、身を忘れて人の爲に盡す女は、世界廣しと雖も、日本の外には無いのである、それで西洋の家庭に入つて見ると案外に女は働かぬ、日本の女なら直ぐすると云ふやうなことでもしないで、人にさせると云ふことが屢々あるのである、此點に於て日本の男子は最も幸福なものである、世界に於て其夫の世話を良くする女で、日本の婦人ぐらゐ能く行渡ッて居るものがあるであらうか、併し女が良くして呉れると云ふのを勿論のことゝして、男子が之をコキ使ふと云ふのは甚だ誤ッた考へである、男子は之に對して十分な同情を持ッて、其弱さを助けて勦らねばな

らぬのである、是が即ち男子の任務であッて、又義侠的な者として男子は少くも是だけのことはせねばならぬのである、今日の多くの男子が唯女をイヂめ、矢鱈に服從さするのを以てエラいと考へて居るのは實に男らしからぬ男と言はねばならぬ、それはさうとして兎に角女が良く男子の爲に盡すと云ふことは事實である。

それから日本の女は勇氣に富んで居る、昔から日本の女が勇氣を示した例は少くない、外國に初めて遠征を企てた方は誰であるか、婦人である、神功皇后其方である、其他楠正成の母の如き、或は近くは會津城陷落の際の會津婦人の如き、簪其他の貴金屬を集めて彈丸と爲し、或は殉死し、或は指を嚙んで其血を以て歌を書くと云ふやうな、實に雄々しい氣性があつて、男子も耻づるやうな立派なことを、澤山やつて居るのである、此事は外國にも知れて居ることであつて、或る人は日本人は實に勇悍である、此性質は獨り男子のみに限らず、同じ度に於て女子も持つて居る、西洋では漸く百年ぐらゐ前から女子に其例を見るのに日本では昔から斯る勇氣を示した女の例が少くないと言つて居る。

又文學に於ても古代最も著しいものは婦人の手に成つたのである、即ち紫式部、清少納言と初め日本の文學史上に重要な位置を占めて居る婦人が澤山ある、又日本の婦人は、頗る忍耐が強くて能く艱難に耐へ、殊に寡婦の如きは自分の子女を教養するが爲に一生の快樂を犧牲とし、數十年の間も非常な不自由をして、雄々しくも我が子を養ひ育てゝ行つた例は乏しくないのである、西洋にも斯る例が無いではないが、非常に稀で珍らしいから、チヨツとあるとソヤシ立てる。(未完)



遊女龜菊（つゞき）

文學士　小林雨塔

（二）公卿武士と遊女白拍子

遊女、白拍子の起原は略前に述ぶるが如し、今は彼等は當時の社會よりいかに遇せられしか、彼等は上王公より月卿雲客下源平武士の間に伍していかに侍せられしかを見んとす。

余は當時の史を見て、遊女の輩の萬乘の天子の謁を賜り、或は禁闕後宮に出入し、竹園の諸親王の寵を蒙りしものありしに驚くものなり、亭子の帝（宇多帝）かつて河尻に幸して、皇子達上達部殿上人の數多侍ふ間に遊女しろと云ふを召され、歌よましめられし事あり、あるは鳥養の院におはして、この邊の遊女を集め御遊ありし事もあり、陽成の皇子元良親王はうかれめこきと云ふを寵せられ

ひとつのみよにすみ竈にくゆる木の
　絶えぬ思ひを知人のなき

いとへともうき世中に炭かまの
　くゆる煙を待よしも哉

の御詠あり、遊女返しには、

木々を君が住家にこりくへて
　たえし煙の空に立つ名は

とある、其情景想ひ見るべし、卿相雲客の彼の輩に戯るゝは常の事なり、一條帝の長保年中東三條住吉社天王寺に行啓ありし時大相國道長之に扈從して、江口の遊女小觀音を寵す、後入道して南都七大寺に詣で、歸洛の際河尻を經しに、小觀音其宿所に參入す、相國之を聞きて面を赭うし、衣を脱して與へ返し遣れりてふ笑話も傳はれり、後一條帝長元四年九月上東門院住吉石清水に詣でられし時江口、天の河などの地にて遊女を召し物賜ひ、人々衣を脱して纏頭せり、此の行宇治大相國賴通中君を賞せしとぞ、又延久五年二月後三條帝の天王寺に詣でられし時遊女、狛犬犢等舟を並べて來り、帝祿など賜りけるとぞ、此れ今人の畏れ思ふ所なりと雖當時の上下見て怪まず、又一世の風尚なり、此の外二條關白教道と小野宮大臣實資共に一遊女香爐を爭ひしは後代の話柄となり、下りて崇徳の比に及び母后待賢門院今樣を好まれ、遊女かね後宮に出入して歌曲を上りしこと見えたり、加之中古八十島祭神事江口の遊女參入して纏頭せられ、祿を賜る事例となり居れり、又當時卿相雲客の輩閑暇あれば洛より江口神崎に來り、長者の家に就きて遊宴亂舞するは常なりしが如し、されば卿相より黎庶に至るまで牀第を接し慈愛を施さゞるものなく又遊女の中人の妻妾となりて、身を沒するまで寵せられしも少なからず世の賢人君子と雖此の行を免かれず、人心を擾蕩する事蓋し甚しかりしなり、之を以て卿相雲客の爲に學びし源平の武士等又此の遊蕩を免かれず、大相國淸盛政柄を執るに及びては、祇王、佛を愛して其暴横の狀を後世に傳へらる、淸盛の子宗盛も亦遠江池田の宿の熊野を寵し、其痴態謠曲熊野之を今に傳ふにあらずや、淸盛の敵手となり

て、尾張内海に長田庄司が兇刃に斃れし左馬頭義朝は平治の戰亂れて東に走るの道其嘗て愛せる遊女を頼みて美濃青墓の長者の家に宿し、且つ江口の遊女に生ませし一女ありしを、鎌田正清に殺さしめし事載せて平治物語にあり、平重衡の千手に於ける轉た項羽が虞姫の跡を忍ばしめ源義經の靜に於ける、吉野の雪路に貞烈の跡を止めたりき、源右大將頼朝の建久の初四年上洛するや遠江橋本の宿に在りイ遊女を召して馬鞍等を與へ、四年富士野に狩せし時遊女群參せしに藝能の者を撰びて侍せしむ、里見冠者義成實に遊女別當となりぬ、此の他當時源平の武士東西諸所の遊女を愛して弓馬狩獵の外一番の侍會に人生の快樂を求めんとせしは當時の世態なり、曾我祐成の大磯の虎に於ける、千歳の後に至るまで傳へて美談とす、徒らに彼等のうき川竹の流れの身の故を以て之を罵り盡くさすんば幸なり、

大江明衡遊女の態を叙して曰く彼等慣る丶所は河上遊蕩の業にして傳ふる所は坂下無面の風なり晝は簦を荷ふて身を上下の倫に任せ、夜は舷を叩て心を往還の客に懸く、抑も淫奔徵嬖の行、偃仰養風の態、琴絃麥齒の德、獸飛虎歩の用具らざるなしと此の醜汚の狀を思ふもの誰れか唾棄せざらん、されど曾我物語の作者は手越の少將をして語らしめて曰く、たま〳〵人身をうけながら、ことにわれらは罪深かき身なり、其の故は、只一生の間人を誑らかさんと思ふばかりなれば、心を行きの人に懸け、身を上下のともがらに任かせ、日も西山に傾けば、夢の中の假の姿を飾り、月東嶺に出ぬれば、誰とも知らぬ人を待ち、夜毎にかはる移香の、身に止まりて心を惱まし、朝な〳〵の手枕の露に名殘を惜しみつ丶胸をのみ焦す事返々も

口惜しき浮身なりと、此れ佛の教によりて色即是空と觀せしなれども、彼等汚女の境遇の憐むべきものあるを語れるに非ずや。

尚一歩を進めて考へよ、彼等固より有情の人なりしかも殊に情界の痛激なる經驗を有する彼等に於ては、時ありて一宵の佳會に二世の契緣を結ぶものあるも怪しむべきにあらず、大磯の虎の祐成に於けるが如き事例は、寧ろ人間の天眞を發露せるものにあらずばなす能はざる所、徒らに人間虚僞の桎梏に制せられて、名を惜み利を逐ふ徒の到底解する能はざる消息は、彼等の戀なりとす、戀何者ぞ、喜ぶべきが如く哀しむべきが如く、時に人をして天地の間に濶歩せしめ、一機轉じては尺寸の地に跼蹐せしむ、之が爲めには、慟哭夜を徹するものあり、喜笑己を忘るゝ者あり、戀を得るに及びては其前に天なく地なく、社會なし、況んや區々たる俗緣をや、さはれ戀する人の膽大なる如くして、夜さり月澄み秋風落莫、萩の葉に置く露、庭面にすだく虫の音如何に情人の心を傷ましむるか、大膽なるが如く又小膽なるが如く、勇にして又怯なり、遂に人間五尺の身をして其束縛に甘んぜざるを得ざらしむ、何たる靈妙の力ぞや、一旦を失なはんか、怨風結で塚青く、幽情凝て石立つも固より其所なり、波濤洶湧山に襄り地を浸すは戀する人の胸中三寸の心海の狀ならずや、失戀の前には天地晦冥す、五尺の身を粉碎するものある又何をか怪まん、夫の巢林子の其劇曲中の傾城遊女に對するは實に此る同情を以てせしを見なり、然ど人或はこれ詩人の情界に於る理想にして以てなべての人に許すべきにあらずと、或は然らんされば余は今此る見地よりして彼等の境遇を見んとせず、今當時の生活の情狀を揣摩するに、前述

ぶる如く彼等鄙賤の身を以て王公貴人の顧眄を蒙むると雖固より上下萬人の倫輩と牀第を接するもの、世の高士の擯斥する所なり、されば書寫山の性空上人結縁し經供養しける時人はあまたの布施をおくりけるにより、神崎の遊女宮木同く布施を送りしに、上人思ふ所やありけむ、ためらひて取らざりしに、宮木詠じて曰く

津の國のなにはの事かのりならぬ
あそびたはふれまてとこそきけ

と、以て上人彼等の布施を受るを屑とせざりしを知るべし、檜垣の嫗は名ある遊女にして、歌詠を能くし一時世に知られしものなり、されど、其晩年の狀を見よ、肥後白河の邊に住みて、古へ相知りし大貳興範朝臣のゆくりなく再び來りて水を乞ひしに、己が形の老ひ果てゝ、いやしきに又見ゆるを耻て

年ふればわがくろかみもしら川の
みつはくむまで老にける哉

との詠あり、あはれむべし一代の佳人遂に枯特なき人とならんとす、自から記して曰く「としなどおいおとろへて、心地のみつねならず、くるしうおぼえてなやましきに、あはれなど思ふべき子などいふものゆめになきに」と、されどなまじいなるものを子と名づけて之を頼みしも、眞の情もなく遂に捨てられ、果ては「おいにきはめてすみかもなくなりててづから水くむきはになり」しとぞ、此等一般遊女の輩の末路なるべし、檜垣の才ありて、尙此の如しとすれば、又頗る憐むべきにあらずや、又彼等の幼にして歌舞藝能を學ぶを見るにせめられて歌はせらるゝに夜は餘りにねぶたしとて詫しかども許されず、果ては外に立ち出てゝ水にて目を洗ひ、睫の毛をぬきなどして、尙歌學

びしと云ふ、彼等の輩の世に活計を得る、又たやすからざるを見るべし。

今我が語らんとする白拍子亀菊また此の類なり、而して承久大亂の階をなす、此れ眞に彼の罪か否か。

（つゞく）

玉輿記（二）

須藤鳴門

諺に曰く、女は氏なくして玉の輿と、玉輿に乗るとは誠にめでたし、されど、玉輿に乗るにもその品あり、心ばへのめでたきを以てするものあり才のめでたきを以てするものあり、みめかたちのめでたきを以てするものあり、この三つのもの、孰れも女子の徳には相違なきも、みめかたちを以てする者世の中、常に多く、才を以てする者之に次ぎ、徳を以て玉輿に乗る者最も少なきは如何ぞや。

容色のめでたきも、余は天の美爵とやいはん、人力の如何ともすべきにあらず、されど、容色を恃みて才徳なくば、容色を以て喜ばるゝものは、所謂色衰ふるときは愛弛ふ習なり、これ陳腐の言なりと雖とも、名言は百千載を歴ぬるとも、亦名言なるぞかし、「くじ」の言も、「さか」の言も、「ぜすゝ」の言も、陳腐なりといはゞ、陳腐に相違なかるべし、則ち陳腐なりと雖ども、棄つべからざる者多し、さては、才も生れつきの上下はあれど、亦養ひても得らるゝ者なり、才のみありて徳なくば、これ亦遂には疎まれん時節到來せずとも言ひがたし、徳を以て愛を得たる者其の愛の衰へたる例鮮し。

されど徳を修むるは實に難し、才を養ふも容易

ならず、容色を飾るはいと易し、易きを取らんか、難きを取らんか、易きを捨て丶難きを取らんこそ、誠にめでたけれ、徳あり才あり容色あり、三拍子揃ひたるこそ、完全無缺、最上至極無類飛切の別品とはいふなれ、されど、こはいつも品切れなり、先づ以てこ丶には、美爵もて玉輿に乗りし、いとも目出度人々の生立ちを掲げ列ねて、昔時の女子世界の光景を紹介し、當時の社會に於ける、女子の地位如何の一端を示さまく欲し、依て其の傳を作るものなり。

牧野駿河守母儀

牧野駿河守忠卿は、越後國古志郡長岡の城主七萬四千廿三石を領し、父は飛彈守.源忠成とて、延寶の初まで勤候ありしが、卅六歳にて病死せり、その節忠卿は幼少にして、老之介と稱す、然るに忠卿の母は、江戸麻布谷町の古木屋仁兵衛と申者の姪なり、こ丶かしこに奉公して、後松平陸奥守の從弟、奥州岩沼の城主田村隱岐守宗良の家來、祿二百石取りの原田有庵の所に下女に住み込み、お夏とて、一兩年も勤め、其後牧野忠成の奥方へ半下奉公に出で、仕ること年月をへる程に、夏女飛州の湯殿役を致しける折柄、忠成夏女の愛らしきに心動き、遂に手を付けられ、いつしか身重になりゆきて、終に玉の様なる男子を生み玉ふ、是れ老之介なり、後また懐胎して女子を産みければ忠成大に喜び、家中從者に至るまで、上へ下へと悦びける、依てかの女中をば御袋様とて尊敬しける程に、威光日に月にさかえゆきしが、其花も散り果てなきかずに入りしとなり、嫡子は駿河守にて、女子は上州高崎の城主、安藤對馬守重治の長男、安藤政藏重興の室とす、重治は後長門守と稱す。

史談

脇阪淡路守母儀（徒士の娘）

脇坂淡路守安照は、脇坂中將少輔安政が次男なり安照其の家督を相續せり、家督の後、嫡子甚十郎出生あり、是れ妾腹なり、されば、其の妾の根本を尋ぬるに、さのみ賤しき人にもあらねど、其親は、戸澤彌市右衛門とて、伊豫の人なり、幼少の時より、江戸に來り、當分輕き奉公などして打暮しける處に、其の頃田村隱岐守、また右京亮と云ひし時、始めて將軍へ召出され、松平龜千代の後見となり、即ち龜千代殿領知の内、三萬石を配分仰付らる、故に右京亮、江戸草創の節、御人新參に召抱へらるゝ由に付、戸澤彌一右衛門も、徒士に住み込み、金子四兩壹分に、三人扶持をぞ賜はりけり、其後中小姓になされ、數年の間勤功を盡せり、或る時、土方右衛門と申す旗本衆の家中より妻を求む、其の妻一人の娘を連れ來る、これを於津屋といへり、かくて年月を送る程に、彌一右衛門が實女生れたり、名付けて於花とぞ申ける、孰れも名にし負ふ美人にて、成長に及び、就中於津屋は、みめかたち、美にして艶なり、げにも風流に見えて、いともやさしげにぞ思はれけるされば、十歳の春、土岐山城守奥方へ奉公に出し御腰元を勤めけり、然る處に山城守息女縁組相極り、小堀備中守息小堀大膳へ遣はされければ、かの於津屋も御供にて、小堀家へ行て勤めけるが、元來於津屋容色勝れぬれば、かの息女少々嫉妬や有つらん、又朋輩の猜みや有つらめ、程なく暇を請ひ浪人せしか、早其頃二八の内外、誠に見る人おごを霑はし、心を迷はしぬ程のあだ物なり、然るを脇坂家へ召出され、其の名も於蘭とてかんばしき名に改め、誠に寵愛浅からずして、終に嫡子甚十郎を產めり（後亦淡路守）因て御部屋樣とあ

がめ奉らる、さる程に於蘭の父母を召出され、田村を暇を取り、脇坂の下屋敷へ遣はされ、御合力として百石許りの擬がひて置かれ、法體して戸澤宗關とぞ申ける、斯くて於蘭は、安照の命に依りて、播州龍野へ往き住居ける、さて〳〵果報の人哉と、聞く人皆羨まざるはなかりしとなん。

松平陸奥守母儀（浪人の娘）

奥州五十四郡の内、廿一郡の大守にて、六十萬石を領し、外に二萬石は、馬の飼料に、近江常陸兩國の内にあり、これ仙臺中納言藤原朝臣政宗卿の嫡孫、松平陸奥守綱宗とて、風流の罪過を以て、武州品川に蟄居申付られ、薙髮して嘉心とぞ申ける、嫡子陸奥守母儀は、松平相模守光仲家の浪人三澤某とて、子供三人持しが、長女を前陸奥守へ奉公に出し申しける處に、殊の外、綱宗の氣に入り、寵愛日に増し、いつしかいわた帶を施し、終に萬治二年己亥五月八日、陸奥守出生、これに依りて母儀內敬の事、家中擧つて仰ぎける、誠に果報の人やと羨みけるとぞ、さる程に、其弟二人召出され、當時御合力少々賜はり、後、陸奥守（幼名龜千代）家督に成り、奥州の內、水澤に於て、三百貫文下され、三澤頼母宗直とて仙臺に住す、頼母弟に五十貫文を賜ふと雖ども、江戸町屋敷に在りし節より、其身不品行にして、博奕を好み、或は當時流行の六法とやらんを盡し、囊中一錢なくとも、我は陸奥守といふ甥を持て居るぞ、如何程にても金銀の借用は、氣遣有間敷抔と、こゝかしこにて阿房口を叩き、我儘をなしたわけを盡す故、姉より屢諫言あれど不用の間、頼母大に立腹し、討て捨つべき由、陸奥守も聞き召され尤とて、先づ少々押籠置き、後は頼母知行の內へ遣はし、流浪者の樣に致し、捨置きけるとなん、

松平越中守内室（鮫屋の娘）

爰に本名久松家の松平古隠岐守定勝とて、後是を桑名少將と申ける、其三男を越中守定綱といふ、寛永の頃、濃州大垣城より、伊勢桑名城に移り拾壹萬石に成りけり、されば、定綱未だ血氣盛んの時、元來色に厚く、年廿三歳の春、京都に遊ひけるが、或る時鮫屋八郎太夫と云ふ者の娘於米とて、十四歳に成ける、容色千人に勝れ、海棠の雨にぬれたる風情なる、定綱一目見るより思を焦がし、何分にも召抱へ得させよ、と家來の者に仰せれば、殿の仰せいなむべくもあらねば、早速鮫屋へ、右の趣申聞せ、八郎太夫も、合點致し御請を申し、娘於米へも出世の事を申諭せば、これも怜悧にて年はゆかねど合點早き者にて、乃ち奉公に出しける、定綱の喜悦斜ならず、寵愛誠に淺からずして、年月を經る程に、女子一人を設け於鶴と名付く、成人の後、酒井雅樂守忠清の室とす次に松平三郎介生出あり、後諸太夫に任じ、攝津守と號す、定貞と改め、定綱の家督相續の後、若死し、其次に女子出生し於萬と名付け、後松平肥前守定綱の室とす、右三人の母儀なり。

毛利日向守母儀（町人の娘）

前毛利日向守大江就隆とて、周防國德山の領主にて、三萬五千石を領せらる、就隆沒後、末男元丸と稱し、家督相續して、式部元賢と改め、後諸大夫に成り、日向守に任す、されば、元賢の母儀の事を尋ぬるに、京都の町人中川右衛門と云ふ者の妹なり、名は於清とて、かはかたちも清らにて楚々人を動かす、故日向守に仕へ、寵愛せられ、懷胎して元賢を產めり因りて中川は召出され、祿千石賜はる、然るに中川は生憎嗣子なき故、旗本伊奈兵衛尉忠易の末男を養子となし家督を讓る、中川主殿とて、元賢元次に勤候せり。（未完）



學藝

通俗土佐日記（第十四回）

北海道師範學校教諭　兒玉彌三郎

廿六日、眞にやあらむ海賊追ふといへば、夜半ばかり舟を出だして、漕ぎ來る途に、手向する處あり、揖取して幣奉らするに、幣の東へ散れば、揖取の白して獻る言は、此の幣の散る方に、み舟速かに漕がしめ給へと白して、奉るを聞きて、或る童の讀める、

海の知夫利の神に手向する幣の追風止まず吹かなん、とぞ讀める、

○眞にやあらむ云々　實は、海賊の故にはわらで天氣の直りたるが故に、夜半ながらも漕ぎ出せるなり、是れ連日の滯船に倦みたる故なるべし、然るを斯く海賊の爲めとしたるは、例の女女しく見せんが爲めたり、故に其の海賊の爲めに舟出せることの實否判然せざれば、斯く冐頭に眞にやあらむと記せるなり、

○夜半　を普通は午夜に限りていへど、古は廣く夜中を指せり、此處のは夜半ばかりとあれば、午夜の頃を指したるなるべし、

○手向けする處あり　手向とは、首途に途中の恙なからんことを祈りて、神に幣を奉るをいふなり、旅立ちの時は必ず其の境の山を越ゆる處

學藝

にて、幣を散らして祈るが故に、其處をたむけといひしが、今は轉じてたうげといふとぞ、故に後には、山を越えざる舟旅にも、必ず手向したりしあり、此處も出帆する舟ありて手向せしに會せしなるべし、後世は更に轉じて、首途にあらざる時に神に物を捧ぐるをも手向といふに至れり、

○楫取して云々　楫取を以てといふ心あり、

○たいまつらす　はたてまつらすの音便なり、紀氏の舟、斯く數日の滯留に困じ果てたる折柄、他の舟に首途を祝して舟中恙なからんことを祈るを、好き序なりとて幣を奉りしなるべし、楫取してとあるは此の手向する處、紀氏の舟と隔たりしが故に命じたるなるべし、

○幣　とは色々の絹、紙等を切りて散らすをいふなり、今の世に御幣といふものは、古、大ぬさといひしものなり、

○楫取の白して云々　とは神に祈り申す詞なり、

○或る童の云々　是れも紀氏の歌なること明らかなり、

○海　と書きてわだつみと訓せるは、古事記上巻に「綿津見神」とありて海神の名なるを、後世、海のことゝせるなり斯く書きたるなり、

○知夫利の神　にわだつみのを冠したるは、海を主宰せる知夫里の神といふ心なるべし、知夫利に關しては種々の說あれど、要するに、隱岐國知夫利郡知夫利崎にわだつみの宮といふ神あり、舟出の時は其の神に奉幣して安全を祈るといへるを本體として、海陸共に、道を祈る神を知夫利の神と名づけたりとの說、此處には適せりと思はる、

○幣の追風　とは幣を吹き遣る風のことにて、

都の方へ舟を進むべき西風を祈れるなり、

○一首の意、數十日の船中に困じ果てたれば、いかにもして疾く都に歸らんと思ふ心をいふにて、其を幣の上にのみかけていへるは、是れ亦老練といふの外なし、

此の程に、風の好ければ、楫取痛く誇りて、舟に帆かけなど喜ぶ、其の音を聞きて、童も翁も、何時しかと思へばにや、痛く喜ぶ、此の中に、淡路の老婦といふ人の讀める歌、

追風の吹きぬる時は行く舟の帆手打ちてこそ嬉しかりけれ、

とぞ、天氣のことに付けて祈る、

○楫取痛く誇りて　とは前に楫取をして幣を奉らしめたるより楫取の祈りて申したる詞までに照應せるなり、斯く思ひの外に風の好くなれるは己れが祈りたる驗なりと、自負せるなり、記者の心は、斯く風の好くなれるは偏に知夫利の神の賜なるを、楫取己れが力にて吹かせたる樣に思へる愚かさを思はせて書けるなり、

○何時しか云々　何時しか都に歸り着かんと思へばにやの意なるを省けるなり、人々の喜び樣の尋常ならざるに依りて、其の思へる所を察したるなり、

○此の中に　とは童も翁もと舟中の人々を引き總べていへるが中にとの心なり、

○淡路の老婦　淡路といふ名の老婦なるべし、又淡路のものなるが土佐にて紀氏に仕へたる老婦にや、何れにてもありぬべし、

○行く舟の帆手打ちてこそ云々　行く舟の帆手打つ如く人々喜びて手を拍つなり、帆手とは帆を揚げ下しする綱ともいへど、又單に、帆のば

たし〳〵と音して人の拍手する如きを以ていへるにやとも思はる、

○此の歌も、詞遣ひ頗る巧みなれば、紀氏の名を此の淡路の老婦に讓りたるなるべし、

○とぞ云々　とぞと係りて祈ると結びたるにて、天氣のことに付けては揷入せるなり、祈るとは知夫利の神に祈るなり、

廿七日、風吹き波荒けれぱ、舟出ださず、此れ彼れ畏く歎く、

○畏く歎く　とは畏み歎くとは異なり、歎くてとは、昨日追風を惠み賜はりし知夫利の神に對して畏れ多きことなればなり、

男達の詩に、日を望めば都遠しなどいふなる言の樣を聞きて、或る女の讀める歌、

日をだにも天雲近く見るものを都へと思ふ道の遙けさ、

又或る人の讀める、

吹く風の絶えぬ限りし立ち來れば波路はいとゞ遙けかりけり、

○日を望めば云々　晉書帝記に「明帝數歲、元帝抱二置膝前一屬二長安使來一因問、汝謂下日與二長安一孰遠上對曰長安近、不レ聞下人從二日邊一來上居然可知也、元帝異レ之、明日宴二群僚一又問レ之、對曰日近、元帝失レ色曰、何乃異二間者之言一對曰、擧レ目則見レ日不レ見二長安一由レ是益奇レ之」とあり、此の語に因みて吟じたる詩句なるべし、日邊近し都遠しとの意にて、專ら船中に倦みたる情をいふなり、

○言の樣　とは詩句の心をいふなり、詩句と和語とは其の樣異なれる故に、其の心といはんとして、やがて樣といへるなり、

○或る女　是れも設けたるなるべし、
○天雲　に天といふと同意なり、
○歌の意は、天なる日だに近く見るを、都へ歸らんと思ふ道の遙けさよ、日に比べては近き都の、斯く遠さは如何なる理ぞと、其の理の當らぬを怪しむを表として、舟中に苦める不幸を歎きたるなり、
○吹く風の云々　絕えぬ限りはとは、風の吹き絕えぬだけはといふ程の心なり、
○いとゞ　はいと〳〵を約めたるにて、しとしとをしとゞ、たわ〳〵をたわゝなどいふが如し、俚言に一倍などいふに同じ、
○此の歌も、詞は違へど意は前のに同じく、船中に倦みて疾く都に歸りたき心を、表面は波のいとゞ都を遙かにせんとは思ひ設けざりしことよとの心に讀みなせるなり、

日一日、風止まず、彈指をして寢ぬ、
○彈指　は爪を彈くなり、忌々しく疎ましく思ふ時は、每に人のすることなり、
○寢ぬ　とは日の中は固とより、夜に入りてまでも、風凪がば舟出さんと思ひて、起きて待ちたるも、依然風荒るれば、詮術なくて寢たる心にて、一字に多大の意味と感慨とを含めたり、

和歌評釋　小倉の色紙（つゞき）

神田中學校講師　中川愛氷

柿本人麿

孝顯天皇の皇子天押帶日子命の後胤といへど、其父祖は詳かならず、日並知皇子に仕へて舍人となり、皇子薨去の後再び高市皇子に仕へて其の舍人となりぬ、後聖駕に陪して伊勢大和紀伊

の諸國をめぐり、過ぐる所一として詠歌せざるはなし、晩年國守となりて石見に終る、世に歌聖と稱せらる

足曳の山鳥の尾のしだり尾の
ながながし夜を獨りかも寢ん

○あし曳の　山の枕詞、山の足は長く引きたる故に云ふ、こゝにては下の言葉に言かくるまでの枕にて、歌の意にかゝはらず○山鳥の尾の　山鳥は雉に似て尾の長き鳥なり○しだり尾の　いゝ、しだり尾はしだり柳、しだり櫻の如く、山鳥の尾は長き中にもしだり尾とてすぐれて長き尾ある也、以上の三句は長々し夜といはん序詞にして、序詞は枕詞の如く歌意にかゝはらず、語勢を強くせん爲に用ふるものなり○なが〳〵し夜を　五字目の、しは强助辭にて、長い〳〵夜といふ事○獨りかも寐ん　かもは感歎詞にして、獨り寐る事かナアといふ意、

この歌、萬葉集第十一に「寄物陳思」と題し、拾遺集戀の部に「題知らず」とあり、

○一首の意　この長々しい秋の夜を、思ふ人と寢てあかしはせずに、我のみ獨り寐る事か、さて〳〵わびしく悲しき事ぞとなり、

安倍仲麿

父祖詳かならず、或は曰ふ中務大輔船守の子なりと、性聰敏にして讀書を好む、寶龜二年選ばれて遣唐留學生となる、時に年僅に十六、永く唐に住て留學し、博識の名あり、玄宗皇帝深く仲麿の才を愛し、名を朝衡と改めさせ、左補闕の官を授けて、皇子儀王の友とせらる、孝謙天皇天平勝寶三年、藤原清河遣唐使として來唐したるに逢ひ共に歸朝せんとて玄宗に暇を乞ひ、王維、包佶、趙驊等送別の詩あり、歸路海上にて難風に遭ひ、

安南に漂泊し、復清河と共に唐に至り、左散騎常侍、安南都護、又は光祿大夫、御史中亟、北海郡開國公等の官に擢られ、代宗皇帝の大暦五年正月七十歳にして遂に唐に卒す、後光仁天皇寶龜十年、五月、唐朝の使者來り、はじめて仲麿が唐朝にて卒せし事を聞かせ給ひ、此國の仲麿が家の衰へたるを憐み給ひ、葬祭の料として絁百疋白綿三百屯を賜ひき、仁明天皇の承和三年正二位を贈らる、

あまの原ふりさけ見れば春日なる
　　三笠の山に出でし月かも

○あまの原　あまの天の事、はらはひろとかよふ詞にて野原、海原など、すべて廣き所につけていふ也、乃ち大空の事をあまの原といふ○ふりさけ見れば　ふりは語勢をつくる發語にて、さけは古事記、萬葉集などに離とも放とも書きて、遠ざかり離れてあるを云ふ、見ればとつゞきて、遠く見わたす意○かすがなる　大和國添上郡にあり、○三笠の山に　春日の鄕にある山○出でし月かも　出た月かマアと疑ひ思ひやる意、

この歌、古今集羇旅部に「唐にて月をよみける」とあり、仲麻呂歸朝せんとて明州にて舟に乘り送り來し唐人に別るゝ時、月を望みて悵然としてこの歌を詠じ、漢譯して示したる由、

○一首の意　大ぞらを遙かに見やれば、海の中から月おもしろくさし出た、この月は我國で春日の三笠の山から出たのを愛でた事があつたが春日のあたりは山うちかこみたる所、この歌をよみたる明州は限りなき海邊にて、周圍の景色はいたく變りたるが、それでも同じ月かと疑はれるとなり、懷舊の情こもりてあはれ深し。

家政學大要講義（つゞき）

磯部武者五郎

（十二）家庭衞生

家庭衞生につき考究すべき要項は左の如し

家庭衞生
- 日光、空氣
- 土地、住居
- 飲料、食物
- 衣服、器具
- 身體の清潔
- 運動
- 休息

（十三）日光と空氣

日光の映射充分なる室に居り、又常に外出して日光に當るときは身體健康の基となるべし、

烈しき日光に當るときは疾病を生ずべし、

空氣は人體に大切なれども、其の清濁を辨じ置くべし、

大人が靜に呼吸する空氣の量は毎回凡そ半リートル（凡二合七勺）にして一分時間に十六回呼吸するなり、

空氣を呼吸するにつきては左の注意を要す、

一、多人數集會せる室は時々空氣を流通せしむ、

一、若し空氣流通せざるときは時々室外に出で新しき空氣に觸るゝべし、

一、空氣流通せざる室内には腐敗し易き品物を置くべからず、

一、寢室書齋等は時々戸障子を開きて空氣を流通せしむべし、

一、森林樹木の繁茂せる處は空氣清涼にして、其の含める酸素多く身體に利あり、

一、故に家の周圍に樹木を植えて、又時々林下を散歩すべし、

一、寢室其他密閉したる室内にて喫煙、吐唾するときは空氣を腐敗せしむるを以て、喫煙

は之を避けて唾は唾壺に吐き蓋を爲すべし、

（十四） 土地住居

土地と住居は衛生上尤も大切なり、

土地の撰定は左の標準に據る、

土地の撰定
- （一）方角　南面の開きたるを可とし北向を不可とす、
- （二）高低　高所を可とし低所を不可とす、
- （三）土質　砂石岩石の交りたるを可とし、沼、田、池の埋立地を不可とす、
- （四）地位　樹木のありて人家稠密ならざる處を可とし、人家稠密殊に製造場に近き處を不可とす、

住居の建て方は左の標準に據る、

住居の建築
- （一）我國の氣候にては日本風建築を可とす、
- （二）地震多き我國にては二階三階に止るべし、
- （三）居室の方角は南面を第一とし東、東南之に次ぐ、
- （四）室の大小は通常一人につき疊三疊即一坪半より狹かるべからず、
- （五）牀は高きを可とす、
- （六）壁は堅牢なるを要し沙土を用ふるを可とす、

（十五） 家屋の種類

家屋の種類
- 木造　衛生經濟に適す保存期限短し、火災の憂多し、
- 石造　堅牢保存は木造に勝る、保存期限長し、火災の憂なし、
- 煉瓦造　同上
- 土藏造　同上石造煉瓦造に勝れり、
- 塗屋造　火を防ぐに適せるのみにて品格甚劣れり、

（未完）

菜畑に花見がほなる雀かな　芭蕉

家庭



女子服裝改良に就て

ドクトル佐伯氏談

女子體質の健全なると、然らざるとは、將來の國民を作るに大なる影響のあることとは、云ふまでもないことであるから、女子の體育を完全にする爲には、大に運動を奬勵するの必要が起る、然るに此の必要なる運動を行ふに尤も不便なるは、我國の女子の服裝であつて、袖が長くて、上下着流しで、骨盤部に褰げを施し、また帯が廣いこと等、多くの妨げがある、それ故運動を輕快にしやうとするには、何はさておき先づ服裝を改良するのが肝要であることとは、識者の夙に唱導して居るところであるが、中には現今の女裝を以て我國固有のもの丶如く思ふて、頻りに改良難を主張する人もある。

服裝に關する歷史的觀察をして見ると、服裝の改良は、決して左樣困難なものではない、優美とか高雅とかいふ美感は、暫く見馴れさへすれば、必ずそれに隨伴して自然に生ずるものである、今日の振袖などは確かに元祿以後に出來たもので、その以前には無かつたものであるから、之を短かくしたところが詰り二百年前の昔の風に復るまでのことで、見苦しくなる筈は決してない、着尺と身

丈を一致せしめて紮げを廢することも同様であると思ふ。

そこで服制の好尙とか意匠とかは、婦人の意見に一任するとして、大體の希望を陳ぶれば、衣服を少年服、通常服、禮服の三種に分ちて、禮服だけは全く從前のまゝ、を保存するが宜い、白襟に黑の紋付の扮裝は、その高尙優美なること恐らく世界第一といふても過褒ではないと思ふ、少年服と日常服とは、帶も紮げも用らぬ衣と裳とを分けた袖の短いものに改正して、運動の妨げとなつたり、胸部や腹部を壓迫したり、呼吸消化を自由ならしめざる等の諸の害を除き、又た足は下駄を廢して、靴を用ゆることが肝要である。而して是等の改良の先鞭者としては、新らしき教育を受くるところの女學生に望みを置かなければならぬから、自分は女學生に向つて、熱心に衣服改良の旨義を鼓吹して居るのである。



温厚なる人は、苦痛を蒙むる時に當りて、或は隱遁し、若くは默思するの傾向を有すと雖も、こは適々不滿の精神をして、益々不滿ならしむべきのみ　マコーレー

家事 衛生一夕話

醫學士　吉村量

（一）小供の手足

夏が來る惡疫が流行る、衛生は今から勉めて置か

ねばならぬ。偖先づ小供の顔や手足だが、大道を往くと洟を垂し、口の端には餡をつけ、手も足も土だらけにした小供が澤山、石などを積み重ねて遊んでゐる、いや實に穢ない、中には一種不快の臭氣を放つものがある。然し此樣な小供は中以下の生活を營むもの、家庭に育つものだが、稀には中以下のものもある。諸卿は小供の手足の汚れたのが精神上衛生上にどれ程害があると思ひます、塵や埃が皮膚の上にたまると垢と成つて、毛の穴から出入する空氣の道を塞ぐから、皮下の血管は強壯の狀態を失なつて惡寒を感ずる樣になる、風邪をひく、從つて精神は爽快とならぬ、疾病の起る原となるから、父母は能く注意けて常に皮膚を清潔にしてやらねばならぬ、夫には湯に行くもいゝが冷水が一番宜しい、水を濕した手拭で萬遍なく身軀を拭つてやる、小供は風に吹かれ埃にまみれ方々に遊び歩く者だから、常に冷水を用ゐて風を引かない樣にして置かないと、忽ち咽喉病や氣管支炎になる。夏になつたら水游泳をさせるがいゝ、之は運動と入浴と、海事思想を養ふとに兼ねていゝ方法だ、河童に臍を取られるなんて言つてる樣じや駄目だ、何んでも歐米の學校には浴塲の設けがあるさうだが、羨しいことだ。



(二) 顔を洗ふ法

ウヰルソンと云ふ人が言てゐることに。顔を洗ふには種々の方法がある、其中眞の顔洗ひ法と云ふのは、先づ金盥なり何なりに、新鮮な水を八分目程みたせ、息をこらして顔と手とを水の中に沈め、全く濕ふ頃石鹸を萬遍なく顔へ塗り、手の掌でなでこすり、再び顔を水中に浸して石鹸を洗ひ去り、水を取り換へて新らしいのをくんで、よく顔を洗ふのである、石鹸を用ゆることが多いと、皮膚がキシンで何となく顔が强張ることがある、此時は微温湯で顔を温めて置いて、然る後手拭か何かで洗ふのがいゝ、顔ほど外面から汚れを受ける所はない、面は少なくとも一日に二三回は洗ふものである、これは汚物のたまるのを防ぎ、皮膚の强壮と心氣の爽快とを得るためで、決して顔を度々洗つたからとて、しやれの爲めだなど丶思つちやいけない。と云つてゐる、女は特に面貌が大切だ、夫の爲にも兒の爲にも、將又家の爲めにも穢ない顔をしちや居られぬ、顔を洗ふべし、面を洗ふべし、序に小供の顔も手足も、よく洗つてやることだ、清潔にさへしてゐれば衞生の道に叶ふのだ。

挿花の話

小畑いく子

燕子花、あやめ、花菖蒲

春が花か花が春かと人の心を空にした、櫻も過ぎて、翠緑したゝる若葉の風なつかしき頃ともなりますと、何となく水邊の慕はるゝ者であります、すると不思議なるもので、池沼の汀には緑の劔を植ゑたかと思はるゝ菖蒲、燕子花などが時を得顔に水面にぬき出でゝゆかしき色の花をさへ付けて

笑みさかえて居りますありさまは、實に淸らかな見るから、心も淸々しくなるやうであります、扨それを瓶にさゝんとするには、各其特色とする處は多少の差がありますが、皆同じ鳶尾科の植物でありまして、皆劍狀の葉を有し花も同じ形にて其性質にも甚しき變りはありませぬ、いづれも同じ水邊の草、其花期も少しづゝの遲速はありますがまづ同事と申てもよろしき程であります、從て、挿方も同一で唯性質を異にして居る部分だけを顯す事の出來るやうに注意を致しませぬと殆ど混じて仕舞ます、此三つの中にも、燕子花が一番變化も多く優美にして且つ婉容の態を備へ、花菖蒲は燕子花よりも花も葉も大く硬直勁拔の質を有して何となく鋭き所があります、あやめに至りましては最少く無邪氣な、いはゞあどけない處が見へてとり〳〵に趣味あるものであります、而して其挿方は皆同じく通例葉三枚、花一つにて一本を形るのでありますが、時としては花を用ひず葉三枚にて一本とする事があります、之を稱して素葉と申します、又塲合によりては葉五枚花一莖を以て一本とする事があります、此塲合は「一」にのみ多く用ひられます、何となれば燕子花、菖蒲などを見まするに、一莖に三葉か五葉か出て居る事が通例であるからであります。

さて一本を組み立てますには、三葉の塲合には花の前に長短二葉、背に一葉を遣ひます、又五葉の塲合には花の周圍前後左右に挿すのでありますが就中前の二枚に通常抱き合へる葉を撰ぶが肝要であります、然し長短宜きを得ざる時、又は根を去る事遠からぬ處で分れたのは其儘に挿し難きものでありますから、其時はなるべく葉の硬く強げなるを撰びまして、一つ〳〵に離して扨其自然の葉

の形及び其長短に随ひまして或は「一」に或は「二」「三」「奥」「心」にとそれ〴〵適當なるを取り先づ母指を一枚の大なる葉の葉元即ちもと兩葉抱き合へる袋の如き中に入れて靜に葉末の方へ押し上げ豫めくつろぎを付け置き、而して他の小なる葉をさし入るゝのであります、又背後の一枚は花の後部に挿します、其長短は其所に依りて一定して居りませぬが先づ前の二葉と同じ長さにならぬ樣、適當なる長さを保たしむる事が肝要であります、殊に此際注意を要するのは葉の表裏であります、是れはいづれも中心なる花

燕子花 三本



の方に葉の表をむける事であります。

今一つは御承知の通り葉の尖端には俗に「爪」と稱しまして、猫の爪牙の樣な形をして鋭く彎曲して尖たる處がありますが、不思議にも此爪は抱合ひましたる内外二枚が互に相對ひ合ひて居ります、されば挿す時にも爪の對ひ合ふ樣にせねばなりませぬ。

猶其葉の長短等は到底文字にて記し難きものでありますから圖を御參照ねがいたいのであります、即ち圖にも示しました通り燕子花類の「一」の腰は極めて低き處より屈曲して居ります、其心持は凡そ十分の三程の處まではよく〳〵

密着せしむる考へで少しも人工を施した樣の見えぬやうに、而して株と〳〵の區別は充分明瞭ならんことを望むのであります、餘り分れ過ぎても困ります其加減は「二」「三」の後背の一枚葉にて大抵調和が出來るのであります。

形式は本花は勿論低ながしと結構であります、又其數は圖には三本のみを示しましたが是は分り易き爲めに特に撰んだもので五本、七本、九本、十一本と例の奇數でふやして行くのでありますが、多くなる程困難であります、初學者に注意する事は葉の矯め方で葉は引きすごくのが宜しい、なぜと申すと其屈曲が極めて自然に過不及のない樣に出來思ふ樣に曲ります、されば自由に矯められまする處よりして餘りに圓曲に過ぎますると、氣品に乏しくなる恐があります、又此矯め方が花菖蒲と燕子花との特有の差を發揮する大切な處です、花菖蒲の方はなるべく勢よく劍狀をなせる葉のむなしからず見ゆる樣、硬直に、燕子花は之に反し、婉曲に挿すのであります。

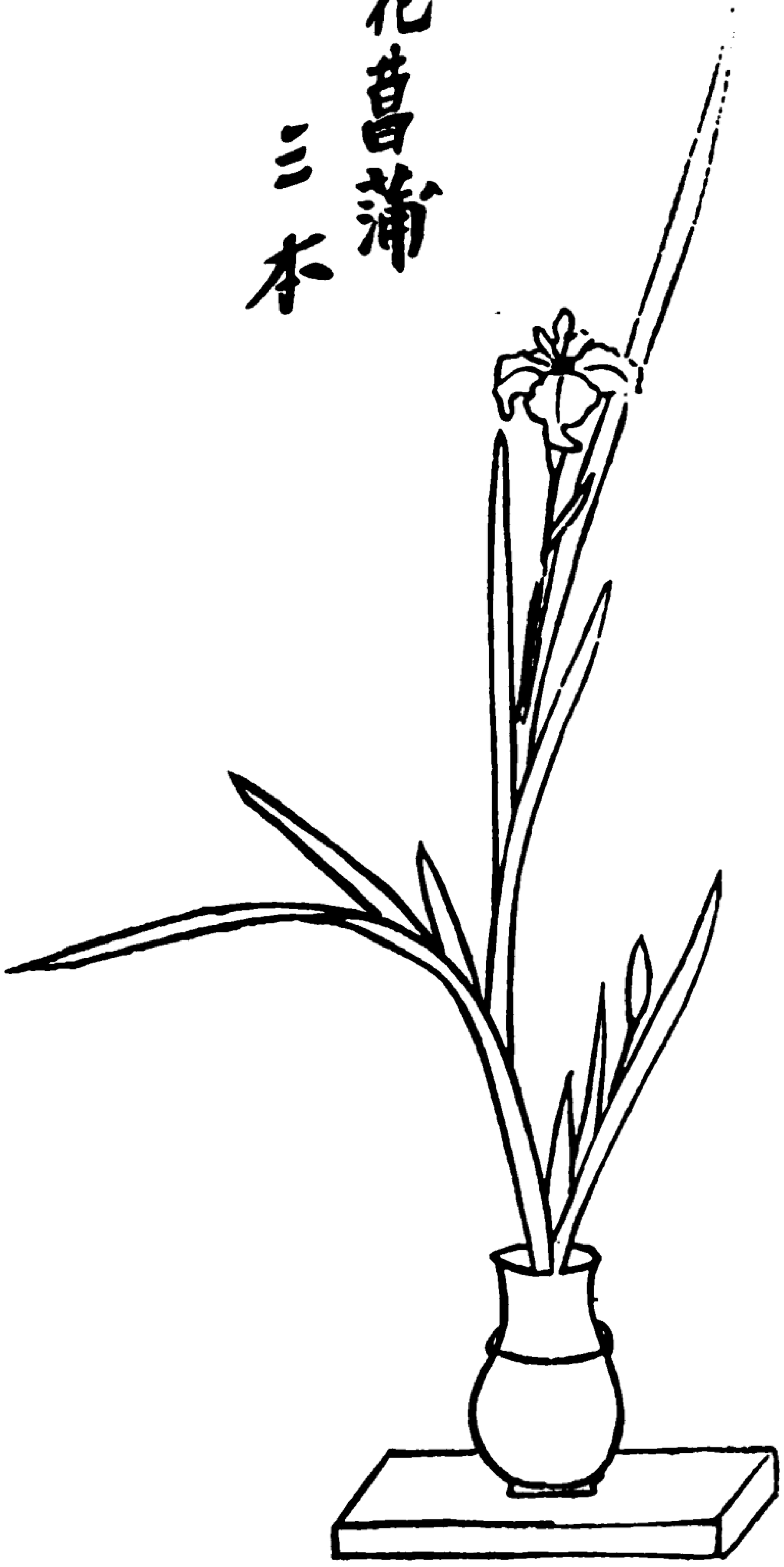


次に花の矯め方であります、花は其腰の如何によりまして凡ての形式が定る所謂骨子となるのでありますから、可成的前に申した如く、下腰に撓め

根から三分の一以上には手を加へず、屈曲なきを必要とします、又殊に花の首の所二寸位は妄に手を加ふれば直に折るゝものです、之は燕子花に往々見る失策であります

葉の使用は骨子なる花に肉を添ふるもので其長短配合は到底筆紙に盡されぬもので、圖につきて御覧を願ひたい、又前に花を用ひず一本を形る場合があると申しましたが、是は「二」「三」「心」「奥」などに用ひられます、即ち第二圖の「三の奥」第三圖の「二」等此類であります、是れは時節と大に關係あるもので、花の盛の時は花を高くし且つ素葉を少く用ひ、盛りの前には花を低く蕾を多く用ひ、盛り過ぎた頃は素葉を用ること愈多くするのであります、其葉組はやはり三葉で、花ある一本より花を拔き去りたると變りはありませぬ、就中、燕子花は四季共にあるもので、四季挿と稱し多少挿方の趣きを異にして居りますが、首夏の頃は最盛りでありますから、從て花の數多く且つ花を高く挿し、春、秋、冬は花を低く素葉を多く用る事は申迄もありませぬ。

花菖蒲 三本



花菖蒲、あやめは初夏のみに咲くものですから、從て四季挿はないのです、然し其時節乃ち盛の時と盛の前後との觀念は皆要用であります、而して是は葉組が燕花子程挿すに都合よく出來て居ないから是れは抱合せしめず、葉と葉を重ね合はした丈でよろしいのであります、それだけ初學者には挿すに困難です、猶かへす〴〵も硬直勁拔なる趣を忘れぬ樣にありたい事であります。

あやめに到りましてはまた一層穩にせねばなりませぬ、是は前の二者よりは天然花も小さく葉も莖も細きものでありますから、どこ迄もやさしく無邪氣に挿すことに、つとめねばなりませぬ、然しやさしくとのみ思ひて餘り婉曲に手を入れますと、だら〳〵と下りまして形をなす事が出來ぬ樣になりますから、大に注意を要します。

裁縫

あや子

（流行に就て）

流行を追ひ、風潮に從ふといふ事は、自ら其意志の薄弱を示す一端とも見えて、あまり賞すべき事ではありませぬ。然しながら是又免るべからざる事でありまして、到底防止ぐ事の出來べきものではありませぬ。それが單に衣服調度の上のみではありませぬ。建築にも音樂にも美術にも言語にも其時代によりて變遷と申すものが、つまり流行の歷史であります。そこで社會の進步するに隨ひまして、其流行の變遷も頻繁になるものでありまして、近來では西洋風の輸入なども盛でありますから、或は亞米利加風、英國風、佛獨風など〻男子は男子、女子は女子で學藝、服裝、遊戲まで日に

月に變り行きまして、去年のものは今年は不用に屬し、春季の流行は、秋季に至れば全く廢るゝなど實に激しきものであります。そこでそれ〳〵の商人は種々に意匠を凝し、新奇を競ひて風流士女の要求を滿さんとつとめて居りますが、いづれも其業務に忠實なるものでありますから、決して惡しきにいふべきではありませぬ、只其需用者に到りましては大に注意を要するものと思ひます。いたづらに世の中の皮想にのみなずみまして、實力も經濟も更に考へる所なく、封建時代の窮屈なる衣服の制度も廢された今日でありますから、四民平等などの語を濫用して、孜々として流行を追ふ事にのみいそがしくて、他を顧るに暇もなく、衣服の新調、頭髮の飾に贅を盡して、われ我こそ當世の佳人よ、流行の粹の粹なるものぞと心密かに誇るといへる如きに至りましては、妖色嬌音を以て世を渡る賤業の者と何ぞ撰ばんであります。然しながらそれは所謂身分相應と申事を忘れ、只一條に流行といへる事に心醉するからの弊であります。

又一方保守的の人に於きましては、卓然時流の外にありと、すます迄はよろしきが、一切萬事只舊〳〵といひて今樣を厭ふの極點は、開明の今日に滊車滊船の便をもとらず、電信郵便の利をも辭するの愚を演ずるに至りますから、所謂折衷をも主としてよく此邊に意を用ひませんければなりませぬ。

決して贅澤に流れてはなりませぬが、又禍福吉凶は人生の常、いつ如何にして襲來するか知れませぬから、其折〳〵に用ひまする禮服は、地質の如何にかゝはらず、用意がなくてはなりませぬ。それらは皆婦人の務の一つであります。

又同じ衣服を新調、もしくば仕立かへまするにも無意識にするのと、少し心を用ひまするとは、大なる差がありまして、淡き色の流行せる頃、わざわざ濃き色に染めなし、或は模樣の流行に無地となし、五ヶ所紋の流行に、殊さら一つに染る、是位の事は避けても別段に其爲に生ずる冗費が多くなるといふでもありませぬ。只少しの心用ひによるのみの事であります。それ故に地方から都會に出た人は何につけても、心の臆して人中に出るを耻ぢらふ樣な事が多くありますが、婦人などには先づ衣服の上に、一番に感じるものでありますが、決して都會の人とても皆が皆、左程に立派なものを着して居るのではありませぬ。つまり少しの心用ひ一つで、古きものも珍らしく見せ、とり合せに依りては、數十年來のものも新調の中に交へるも、遜色なきが如きは、全く其縞柄、色模樣などの調和がよろしきを得るからの事でありまして、是等は所謂、婦女子の身だしなみといふものであります。そこでまづ、遠隔の地に在る人の御參考までに、仕立方につきて近頃の流行とも思ふゝし〳〵を少しばかり述べて見ませう。



綿入れ物は相かはらず三枚重でありますが、其三枚共に同種を用ひる事もあり、また上着一枚を別

にして下着二枚を共にする事もあり、又上着には襲り色の裾廻しを用ひ、下着即ち別種の二枚は共裾ものを用る事もありますが、其反對に上着に共裾を用て下着に襲り色を用る事は致しませぬ。

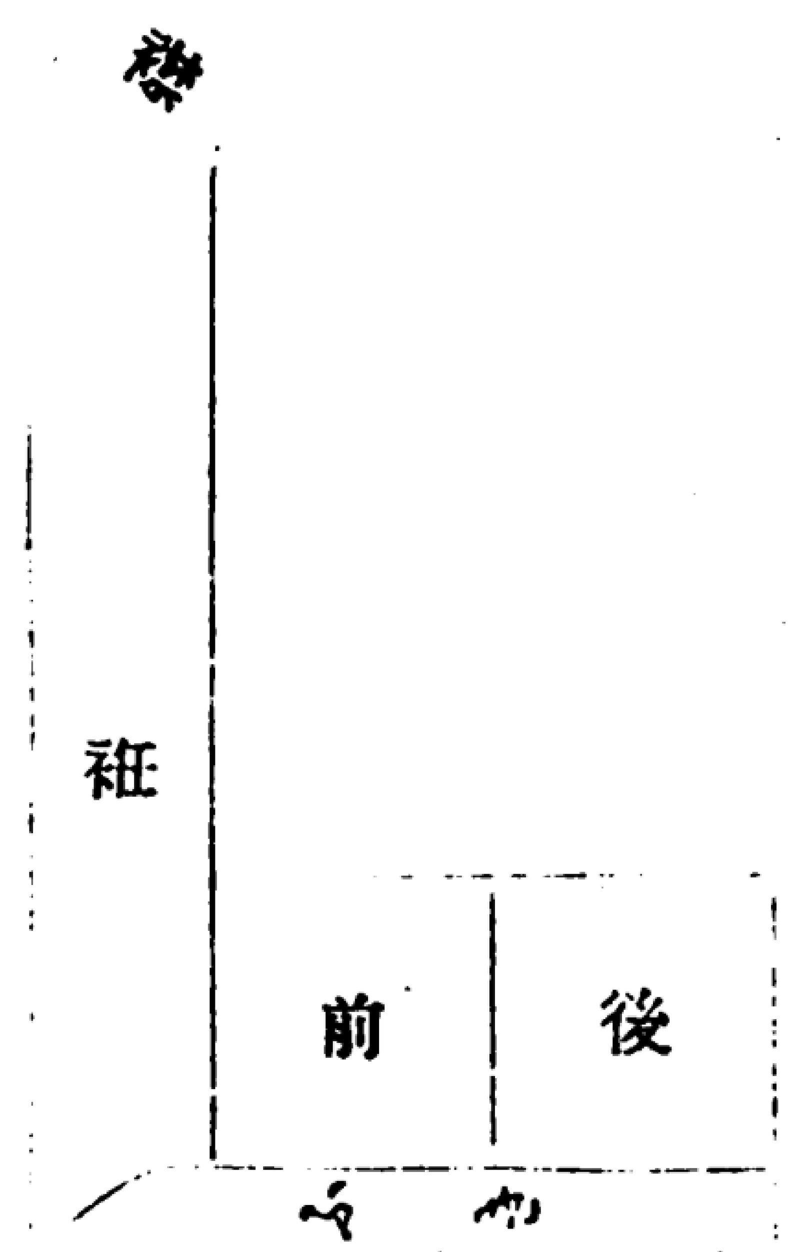
又裾ふきは近來はあまり多きを好みませぬ。まづ裾模樣、或は紋付の無地ものにて七八分より、多きも一寸を越る事はありませぬ。又裾綿はなるべく「ふき」の部分のみに多く用ひて、上部より自然に厚くする事は最忌みます。それは三枚も重ねたる時、上より厚きものは、余りに裾のひろくなりて歩むときに開き過ぐるからでありませう。そこで裾綿のこしらへ方でありますが、それは眞綿、或は小袖綿を凡そ「ふき」だけと思ふ程の廣さにして用ひますのであります。

小紋より縞物に至りましては、四分乃至七分迄の「ふき」に致します、又「ふき」の細くなりました爲めに、自然袖口、振口にも影響して袖口なども細く、振口はなるべく表より少しは裏に見返る心持にて、くけなければなりませぬ。

また衣紋つくろひが一昨年頃まではなるべく頸部にひき付けたものでありますが、現時では大に拔きて着ます、尤も學生はやはり以前のまゝでありますが、普通は大に變りて居ります其爲めに襟わけを廣くして、二寸六分乃至三寸程にも致します。

又重ねもの比翼などは二枚に着る此節の如き氣候には不便でありますから、大抵は假比翼に致しますが少し着馴れた人は、なるべく三枚別〳〵にする事と致して居ります。又袷物につきて申さば「ふき」はやはり小さく、二三分より大ならぬやうに致します、袷せの下着も東京以東では下着を別にして二枚重ねて居りますが、關西地方尤も九州邊にては暖氣でありますから、二枚にすれば胴を單

にするか、或は假比翼をよろしとします。其假比翼と申すは四裾及び衽の丈は、假令へば上着の裾廻しの丈一尺三寸あるものならば、下着の廻りは一尺三寸二分の丈に、圖の如く作り置き、然して上着の裾廻しの上にわらく、絎付るのであります。



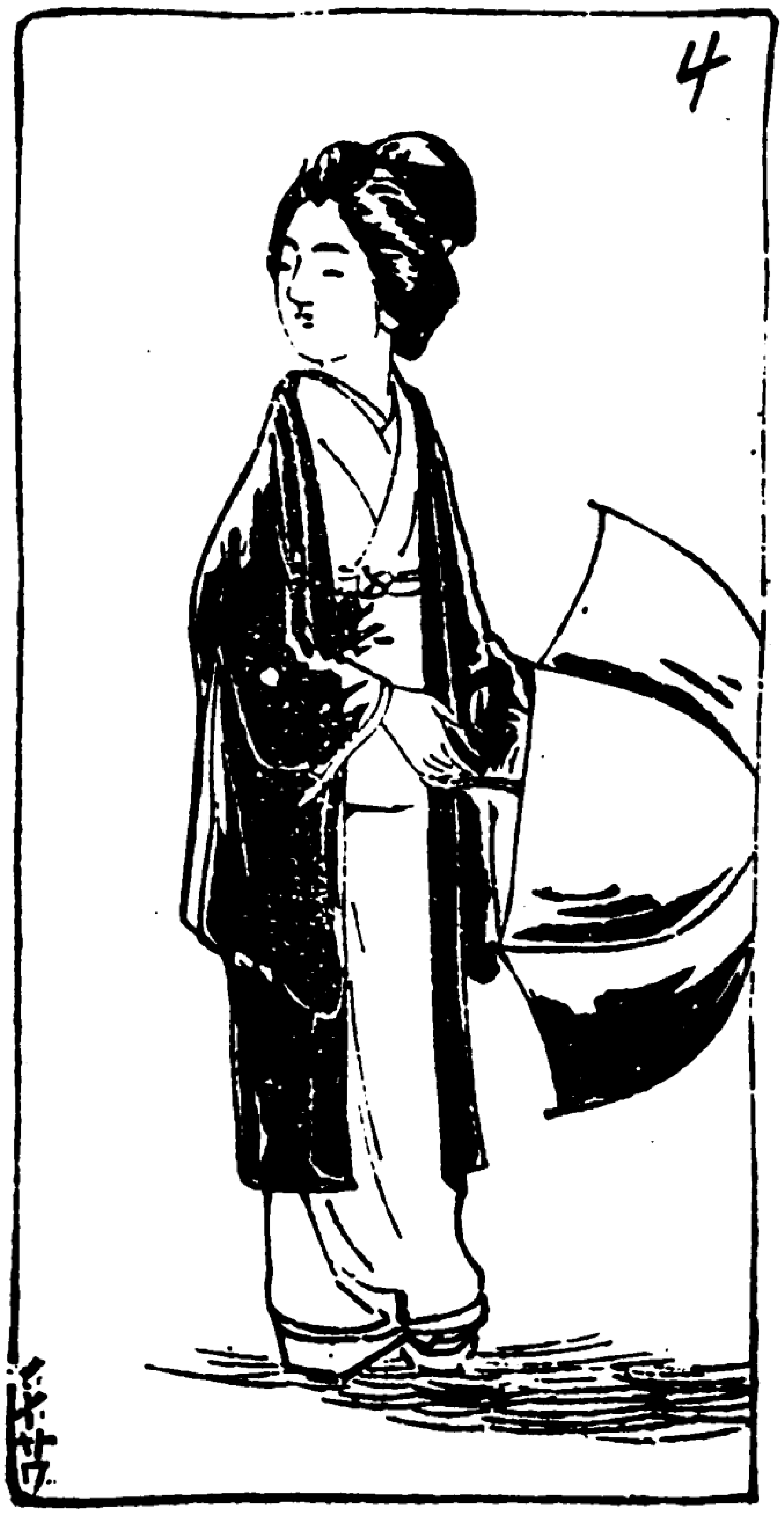
袖口振口も同じ理であります。併しても し一枚にせんとする時は、其の絎目の糸を拔きとれば直に離れて、少しも跡に手を入るゝ事が入らぬ至極簡便なものであります。

家庭割烹

岡野知十

家庭割烹の要は(一)手輕が一にかぞへ立てらるれど、この手輕といふ事は調理の手數のかゝらぬ樣經費の少さとのみを主とすといはゞ誤解なるべしもしさう解釋してたゞ安價たゞ簡便とのみを主とせば疎惡となり、その極は梅干にて茶漬を食すはかなく、家庭割烹の要は失はるべし。手輕といふ事家事經濟の上より最も注意すべき要件なれど、同時に(二)佳味 膳にのぼして目によく、舌にのぼして味よく、即ち色彩を施して粧飾を施し、搔敷むきものゝ如きオッ クゥなる、日常に用ゐるに及ばざる者はその盛方に注意し、見榮えよくし、箸を下して風味よきと、(三)原料配合烹煮の健康によろしきものを選む事注意を要

すべき事とす。風味、衛生の二の上より考ふれば、さてまへの手輕といふ事、從來の家庭にて考へし如き手輕とはその程度やゝちがひて比較的甚だオックウなるとを覺ゆべし、近來流行の學校の割烹科、割烹實習會、乃至新聞雜誌等に紹介さるゝ割烹法の手輕といひ、家庭向きといひながら、案外オックウにして時間を要し、費用多しとの非難は間々聞くところなるが、いづれ程度の問題なるべし。煮豆は煮豆屋のものを購ひ、魚は干物を買ひ、これにて膳立をなせばこれより、手輕きはなし、さらに手輕きをいへば、梅干で水漬の飯を



食さば最も手輕ならむ、菜根を咬み得て百事爲すべし」これが勤儉の德として稱さるゝに於ては、家庭割烹は初より講究の要なし。

ちかく報知新聞の弦齋氏小說『食道樂』は家庭割烹の鼓吹に力ありと聞ゆ、しかも、『食道樂』といふが如き調理の一品づゝにあれ、これを家庭に用ゐんとせば、決して手輕きにあらず、同じく牛肉なり葱をきざみてヂワ〳〵と煮るは食ながらもよくすべく、しかるをシチウとし、ビフステキにせば、その時間の上に、將その費用の上に比較的手輕にあらず、さればシチウ乃至ビーンステキは、家庭割烹に講究の要なしとせば、家

庭の割烹は遂に講究すべきもののなきに至るべし。

かくいひて余は家事經濟を顧みず、美味盛饌を説きて、家庭にすゝめんとするものにあらず、料理人等の多くは素人の數奇をむかへ目を驚かさんとして、やゝもすれば日用に益なきものゝ類を擧ばしめ、風味、滋養の注意を欠ぎて、たゞ手數をかけてひたすら見てうつくしきものをのみ講ぜんとするの傾きあり、これ等の弊は素より排斥すべき事なれば、極度まで手輕〳〵と走らん事亦本意にあらず。

家庭割烹を講修せんと欲するものに、家庭改良の上につきて多少の理想を有たるゝを要す。たゞ口腹の慾を滿さんとするにあらば亦誤解たるを免れず。

左て日用料理數種をかゝぐ、逐次當季〳〵のものにわたるべし。

▲竹の子

當季は竹の子の出盛になり。竹の子は左の數種に用ゐることよしとす。

【竹の子デンブ煮】は茹て、うすくうち、煮汁、味淋、鹽、醤油にてたッぷりと煮て、煮つまりしとき、別にメリケン粉を煮汁（なければ水にてよろし）にて溶き、ドロリとかけて、かきまはし、飴色となればよし。

【竹の子豚煮】ゆでし筍を大形に切り、煮汁と味淋にてよく煮こみ、煮つまりしとき、並味噌を裏漉にかけ、砂糖少々加へて、これを入れ、かきまはし、味噌のしみこみしとき降すべし、胡椒をなげかけて侑む。

【竹の子狸煮】同様大形に切り、油にていためこれを味噌汁に入れば「狸汁」なり、又薄醤油、砂糖、

煮汁に唐辛子を加へて煮こみ、煮あがり卸しぎわに味噌をうらごしにかけて加へ煎りつければ、狸煮なり。

【同木芽合ひ】同じくうすうちにして、獨活亂切と共に下煮をして味をつけ置き、別に白味噌に砂糖味淋を加へ、裏漉にかけ火にかけて煉り、これにてあへるなり。もし「烏賊」をともにあへるには、これも味淋と醤油にて下煮をすべし。海老などもよろし。

▲胡麻よせ（菓子）

胡麻を煎りて鍋にとり、砂糖、鹽少々、水飴等、適宜に加へ、火にかけてよくとけるまでかきまはし別に玉子燒鍋に油を志き、この中へ右胡麻をつめてならし、堅くならぬうちに手ばやくぬきて、庖丁を入れ、算木にきる。



▲メリケン燒（同）

メリケン粉に玉子を入れ、鹽少々加へ、水にてどろどろにとかし、（牛乳あらば加ふるもよろし）玉子燒鍋に油を志き、火にかけ、鍋の熱せしところへ、まへのとかせし粉を厚二分ぐらゐ平に入れ、かへして兩面をやき、上より平の蓋にて押しつけ燒目をつけて、あげて四角にきりて、砂糖をかけて用ふ、ヂヤミをつけて用ふるもよろし。



京都に於ける古美術品展覽會

◉百工藝術の華とも見る可き大阪の勸業博覽會に對して、山紫水明處岡崎の美術館で古美術品展覽會と云ふのが開かれた、その內容は十六古式飾と云ふ名目であるが、今その十六古飾を概括して畫いて見ると、即ち左の通りである。

◉先づ入場して右方の室へ入ると、第一に飾られてあるのが寢殿飾で、いまは昔壽永元年十二月十五日、九條家の姫君御入內の時、同家寢殿廂の間に於て、父君と姫君との御別杯があつた節の鋪設に據つて裝飾されたもので、總て九條家の什器珍寶である。

◉次が元服式飾で、縉紳家の元服式の裝置を示さんとして、天保五年十一月二十六日九條家に於て御擧儀ありし時の鋪設に基いたものであるさうだ。

◉隣室へ從つた左方には歌合席飾が設けてあるが之れは冷泉家に傳はる所の藤原清輔朝臣時代に於て行はれたる人麿神影供の裝置を摸したもので、副席として歌人の居間飾が示してある。

◉その向ひは立華飾、池の坊傳來の揷法に據つて三瓶一對より、軸物に至る迄立花の眞行草を示し

たもので、開會中は互交に取換えて陳列する事となつてある。

◉隣室は蹴鞠飾で、堂上鞠地下鞠の裝置を示したもので有か、堂上鞠の方は飛鳥井家に傳はる所の延寶年代蹴初式に則りて裝飾し、地下鞠は有賀家に傳はる古式によつて裝飾されたもの。

◉引返して正面右方室の裏手へ廻ると、小口に飾られたが饗應席飾で、元和三年五月十三日、松平筑前守(前田利常侯)が江戸邸に於て徳川秀忠公を饗應せし時の例に據り、三献饗膳の具を裝置して武家饗應の式を示したもので、その用器は小笠原家に傳ふる處のものを持出したとの事。

◉この次室は遊戯具飾、これは唯兒童玩具の種類並に其變遷の狀を知らしめんが爲めに、古今遊戯に關する器具を陳列したるもの。

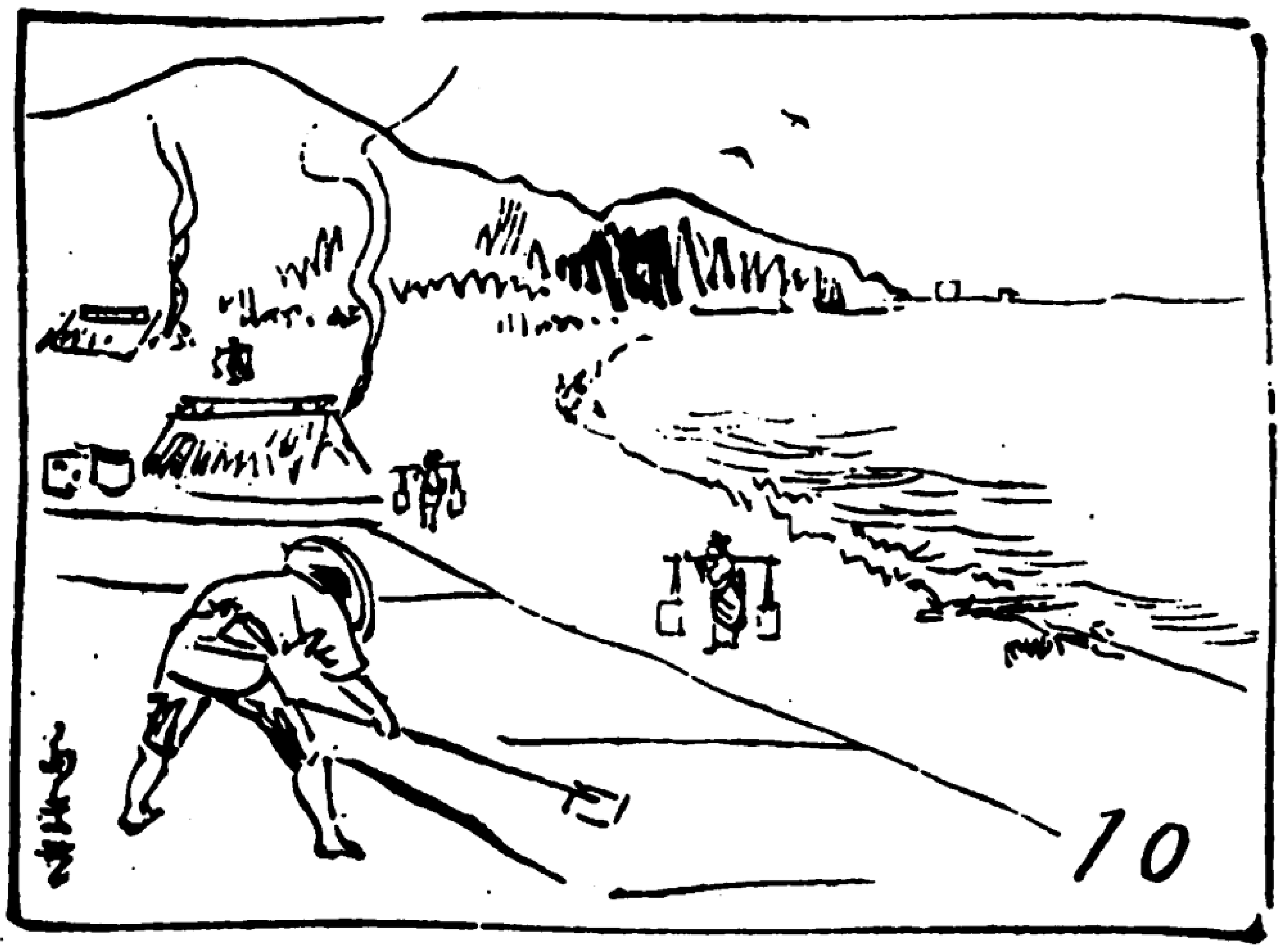
◉その又隣は能樂器飾で、翁附鏡間の裝飾を示し、併せて能樂に用ふる服具を飾りて、開會中時々取換えるやうになつてあるか、この飾部には彼の前田家珍藏の能衣裳もある。

◉正面左方室のかゝりには、雅樂器飾を以てし、舞樂管絃神樂などに用ふる各種の樂器、および舞樂の服具等を陳列して、古來音樂の用具を示してある。

◉婚禮飾の部には、武家婚禮式の壽の間と粧の間とを裝飾す、そして壽の間には少笠原家に傳はる、應永二十五年十二月十五日仁科相模守の息女が、赤澤治部少輔敎經方へ入輿せし際の三献式に據つたもので、その粧の間と云ふのは、即ち新婦の部屋飾である。

◉次の聞香の間には、十種香の中源氏香の香合席飾の一端を示したもので、總て志野流であるさうな。

◎去つて隣室に移つると、差掛かりが抹茶席飾で利休好、紹鷗好の二席に區別してあるが、前者は



やくやもしほの
身もこがれつゝ

三疊、後者は四疊半、兩ともに瀟洒なる鋪設を以てしてあるが、何れも斯道の古實に據つたものである。

◎次で煎茶席飾、この席飾は陸羽の茶經に基いたもので、賣茶翁および小河可進翁の流儀、並に近世諸派の式を參酌したもの。

◎又候舊へ返つて能樂器飾の裏手へ廻はると、官服飾の室がある、この室には公家男女の裝束を示さん爲めに、高倉家傳來の裝束式に則つて關白束帶の具及び內親王御五衣の具を陳列してある、右の外、安政五年正月七日白馬の節會に出御の際御裾を奉仕せし故九條關白尙忠公の身具宿德服なども展觀してある。

◎次の武具飾部には、武田家の鎧着初の飾式を主とし、併せて武具の種類および其變遷を示さんが爲めに甲冑を始め、その他馬具、流鏑馬裝飾等諸具が陳列されてあるが、の源三位賴政が御苑に於て鵺を退治した時に用ひた弓の模造、さては二十

四孝の勝賴さんが着たとやら云ふ鎧などもある。

◉階下は是れ丈けだが、階上東部の一室には祭器飾席があつて、鴨御祖神社神座、その他調度類および南都春日神社の祭器等を陳列してある。

◉本會の主眼たる十六古式飾は以上の如しであるが、右の外階上の大部分を占領して美術及美術工藝品の佳器名什ばかりが展列されてあつて此部には楠公肉筆の懐紙がある、書體は行書で御家流といつた樣な字だが非常に達者なものである、此の書と歌の内に彼の忠魂が籠つてあるかと思ふと掌を合せて拜みたくなる、其歌は

暮春　楠木兵衛正成

ちる花を日數としたふかひもなき涙と共にくるゝ春かな

忍戀

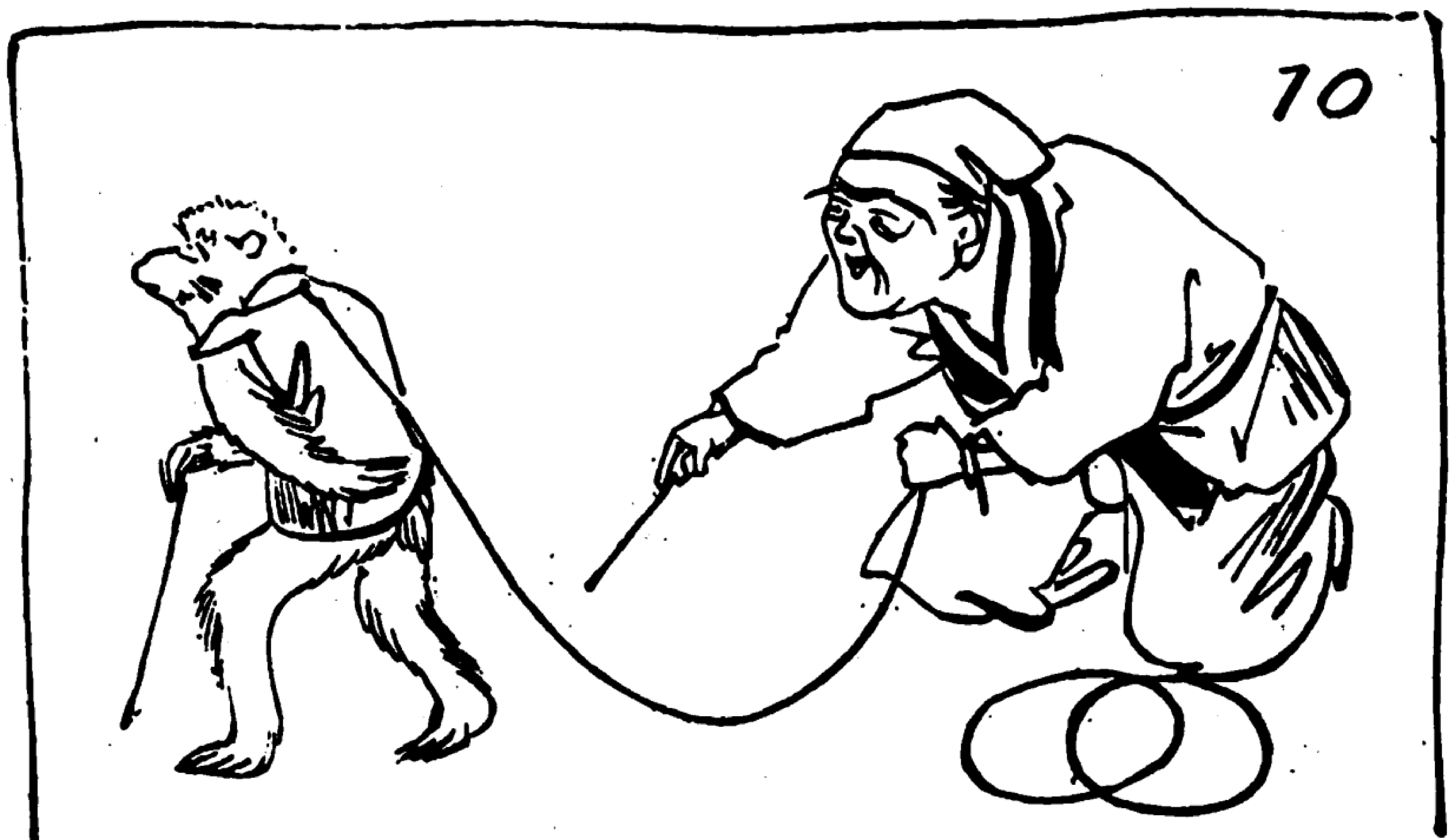
涙をはたゝもうさはや中〳〵につゝまは戀と人やあやめん

遠懐

行く友もかすあるましき憂き身をとしりなからなを（以下斷滅）

他一二絶品とも云ふ可き名器も見受けるが兎も角

猿は與次郎の得物なりける



従來萎縮の姿であつた京都美術協會が、今回の勸業博覧會を機として、その出品物の蒐集に最も困

難を惑ずる此種の展覽會を開催するに至つたのは實に大奮躍と云ふべきである。

日高見の國

文學士　濱田紅於

日高見國とは何方ぞ、應神天皇紀元二十七年、武内宿禰が東北巡視の復命に、東夷の中に日高見國あり、其國人男女共に椎髻文身にして、人と爲り勇悍なり、これを總べて蝦夷といへり、土地沃壤にして曠大なり、擊ちて取るべしと云へり、同四十年東夷多く叛きければ、皇子日本武尊勅を奉じて征伐し給ふ、神皇正統記に、轉じて陸奥國に入り、高見の國にいたり、こと〳〵く蝦夷をたいらげ給ひき、しかれば東北地方にありしと明なり、常陸風土記云、信太郡此地本日高見國也と、然るに延喜式には陸奥國桃生郡日高見神社といへり、現今桃生郡大田村に此神社存せり、この地北上川の流域にあるを觀れば、北上とは日高見の傳訛たるに似たり、されば日高見國とは東北北上川に至り西南常陸國を境とせる地方の總稱と見るべし、而して予の謂ふ所はその東北部なり。

予既に所謂新しき古蹟を辭して、水產學校を一覽し、やがて北上川の橋上に立つ、斯民の怒を和らぐべき軟風は、征衣の袖にそよ吹きて、羇愴轉爽なり、俯して蒼浪の汪洋たるを瞰、仰いで日和山の窈窕を瞻る、この山は治承中奥州探題葛西三郎清重の據りし處にして、眺望明媚の稱あり、里俗傳へ云ふ、舟子棹郎商船を出さむと欲すれば先づ峰頭に登り潮勢をトして、晴雨の候を計り、水色を察して風波の變を試むと、日和山の目蓋しこゝに基づく、好日山はその雅名なり、松尾芭蕉が、「雲おり〳〵人をやすます月見かな」と詠せし

も、この山なりとかや、只惜む時間やう〳〵せまりて登臨すること能はざりしを、欄檻を敲いて橋を渡り、遂に石卷の街巷を徘徊す同行數十、皆破帽敝服、宛も百鬼の晝行するが如し、

石卷町は牡鹿郡の大都邑にして、古へ伊寺水門と稱す、北上川その中央を貫流す、市坊約十又二、人家三千に近く、人口殆んど二萬あり、條坊宏大の觀なしと雖、官街邸宅の櫛比、男女車馬の絡繹は、到底荻濱、渡波の比にあらず、この港は寛永中、河村孫兵衛なるもの。藩主政宗の命を承けて北上川を決し、南注すると約十五里にして、終にこれを開きたり、後谷新平小洲を河心に築きて碇泊の處を設けぬ、明治十三年に至りて、内海某なるもの、家産を蕩盡して二橋を架し、以て中洲に通せしむ、里人呼んで内海橋と云ひ、その恩澤を無窮に記憶せんとす、但だ河口水淺く舟楫稍艱なるを以て、近來竿燈を照して夜航を便にせり、北海を航行する船舶は、たとひ荻濱に寄ざるも、こゝに錨を投せざるはなかるべし、奥羽觀蹟聞老誌に、市店連レ屋漁家比レ隣、商賈群集農工雜於、繁華輻輳殆若ニ江都海濱一商船之出入漁艇之來往、日夜泛々朝夕囂々、貿買不レ乏交易不レ虚、生財之有レ便貨殖之有レ利、廼與ニ攝州大阪、越前敦賀、筑紫博多、出羽酒田、同ニ膏腴一土產豐饒之富、天下第一之津也、と云へるは、較舞文弄筆の嫌なきにあらざれども、奥州に於ける屈指の要津たるは疑を容れざるなり、

市街を出でゝ松島に向ふ、この日行程六里と稱す然れども熟路坦々として、行歩難からず、たゞ蒼穹一碧纖翳なかりしかば、やう〳〵進むまゝに、流汗淋漓として眼に入り、體憊くして氣息奄々たり、十町に一休憩して、梨子の甘漿に渴を醫し、

熟柿の佳味に腸を撫でゝ、いそがぬ旅の道なれば行くこと甚だ遲々たり、鷹來に至る比、日恰も天に中す、乃ち路傍の祠前に箕踞して餉す、里人が



澁茶數椀の情、時にとりては甘露にもまさりて、其味や忘るべからず、午下一時出發す、時に健兒十數人一團となり、肋骨先生に請うて先發隊となり行くこと飛ぶが如し、忽ちにして二里許の懸絶を生ず、

小野村に入らむとして、路傍の一矮舍に憩ふ、舍内三坪許り、牀を設けずして、蓆を布き、一老媼の粗菓を鬻るなり、梨を食ひつゝ其身の上話に耳傾く、やがて急行肋骨先生等を追ひ、辛じてこれに小野河畔に及ぶ、一生徒予が袖を扣え曰く、この川上に我家ありと、「玉川のこの川上に家はあれど、君をやさしみあらはさゞりきと、事實はうらうへあれど、遊子が旅情の切なるを哀ますんばあらず、又一生徒あり、自ら佐々木盛綱の後裔と稱し、頗るその閥閲を誇るもの丶如し、この昭代に何ぞ必ずしも家門の高下を爭はんや、又一生徒あり、予が名を呼んで質問する所あり、この兒容貌魁偉覇氣人に迫ると雖、甚だ温良恭謙にして、德望一級を蔽ひ、兼ねて文章を能くす教ゆるに足るものなり、

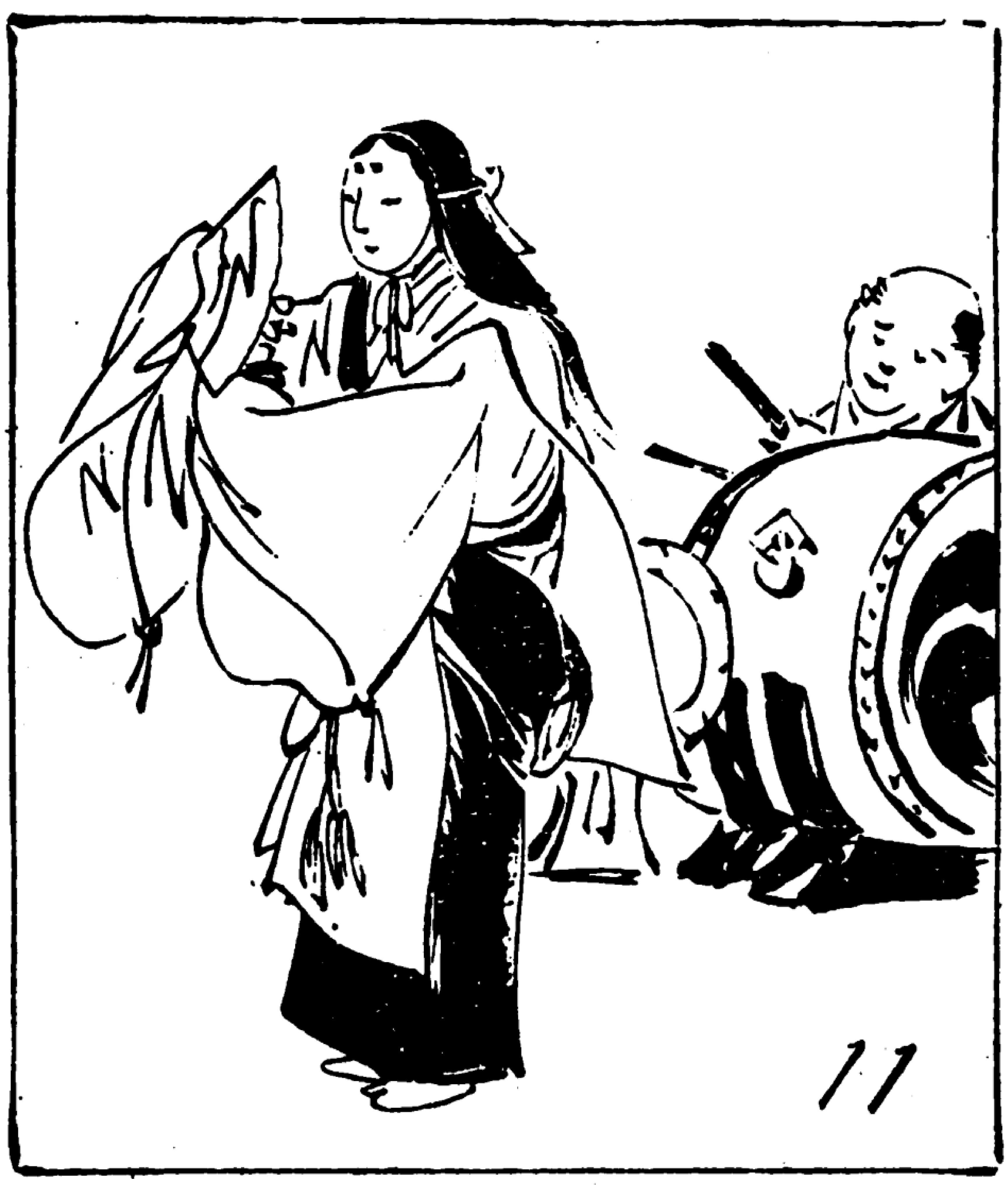
午下四點、道は既に宮城郡に入りぬ、松島を距ると僅に半里と稱す、會路二岐に分る、新道を取らんか、平坦なれども遠きと數町、舊路に由らんか捷徑なれども坂路を上下せざるべからず、先發隊は舊路により、處々白紙を樹枝にかゝげて後進に便す、その好意虛しくすべからず、峽に入り巓に立ち、村孃に行程を尋ね、田老に經路を問ひ、遂に高城村に出づ、時に日は傾き盡して、暮色蒼然、我脚疲憊漸加はりて、體の頗る重きを覺ゆ然れども松島は目睫の間にあり、勇を鼓して進み遂に旅館の廡下に疲足を憩ぎしは、五時の梵鐘沈沈たる頃なりき、此日下級生も來りてこゝに留まれり、故に予等の着するや、簞食壺漿して出迎へぬ、温情春の如く、稚氣誠に愛すべかりき。

躑躅と杜鵑

橘村生

博士藤岡先生の御宅には、毎月第一土曜日の午後

神にいさめの神樂がござる



七時から、・家族の茶話會がございます。今晩も先

生が御出に成つて面白い御話をなさいますので、十疊の御座敷に集つた人々は、奥樣を初め、お孃樣坊ちやま、お友達、大學へ出てゐる先生の甥、書生、小間使、下女達迄、座を正してズラリ並んで居ります。初めは書生さんが運動のことに就て赤い顔をして口を歪め手を振つて話しますので坊ちやんなど面白がつて大笑ひする。次は大學生が臺所の衛生といふ題で、お鍋にも分りよくお話しする。次は先生が花瓶に活けてある躑躅の花に關するお話をなされます。

『サア皆よく御覧。』と一本の枝をお取になつて、『今此一本の枝を取つて見ると、人が作つたのでは出來ない樣な、天然の形態が有るだらう、是は丁度人に男女の區別があつて其容子が違ひ、老人と小兒の體格が違ひ、强弱の相違が有て其構造が違ふやうなもので、如何なる草木でも夫々別段の形態が有つて、活きて居るに都合のいゝやうになつてゐるのは、外の鳥や獸とちツとも變りはせぬ。あの柳が風に當つても折れぬやう、あの松が雪に壓されても折れぬやう、又虫は虫で、草の色をしてゐるものもあれば、土の色をしてゐるのもある、彼樣に地上にある處の生物は、一木一草と雖も、疎かならないのは、人のよく／＼注意すべき事で、又知り置かないではならぬものです。其處でこの躑躅だが、これは野山に自生する灌木で石楠の種類に屬してゐる。花の全躰は合瓣花と稱し（朝顔なども）大概一枝に二三輪つゝ着生して咲いて居るから、よく御覧。』と云はれて坊ちやまなどは『母さま實際ですね。』と感心する。

『夫から花瓣が、五枚十枚位まである、萼が又五片、此二つを又花被と云つて、內部には十個の雄蕊と一個の雌蕊（眞中より出るもの）とあり、雄

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

皮膚病専門醫坂本李堂著

男女美顔法

（再版）　一名美貌之秘訣

正價金四拾錢
郵税金六錢

右ハ著者ガ多年ノ實驗ニ照シ何人ニテモ行ヒ得可キ美貌ノ秘訣ヲ詳説セル珍書ナレバ冀クハ本書ヲ繙ヒテ其容貌ヲ艶麗ナラシメン事ヲ

本書非常ノ好評ニテ夥シキ注文數ナレバ可成早々御注文被下度希候

發兌　東京京橋區弓町　松村三松堂

裁縫科附屬手藝品

綿細工（果物、鳥類動物、止繪法）

自宅教授
通信教授

規則書入用ノ方ハ郵券三錢送レ

岡山市下之町　矢吹綿細工教授所

改正

圖書目録

製本出來

御入用の方は貳錢郵劵封入申込あれば送呈す

東京築地二丁目二十一番地

株式會社　國光社

女鑑廣告

本社同様取扱中候

神田千代田町　博報堂　電話本局一四四番

京橋區尾張町　弘報堂　電話新橋八五一番

京橋區南鍋町　廣告社　電話新橋二六一番

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

未曾有の一萬號

島田三郎主筆

毎日新聞

本紙定價
一枚金一錢五厘
一ヶ月前金三十五錢
三ヶ月前金一圓五錢
六ヶ月前金二圓十錢
外地方郵便税一ヶ月金十五錢但三ヶ月以上前金拂込の向に限り特に一ヶ月郵税金五錢に割引す

創刊以來卅四年正論の府として終始一貫閥族と戰ひ銅臭と戰ひたる吾毎日新聞は帝國新聞の嚆矢たる名譽を荷ふて愈玆に來る五月十一日を期して一萬號に達するの隆運に會せり孤軍援る無きの吾社をして今日の榮えあらしむる者偏に愛讀諸君の高庇と謂はざる可からず依て聊謝意を表し稀有多頁なる當日の紙面に添ゆるに**日清韓三國の色刷地圖**を以てし諸君案頭に光輝あらしめむとす其如何に意匠の慘憺たるかは發行當日を待て知らるべく尙當日迄に新規三ヶ月以上前金拂込の諸君には無代價を以て進呈すべし請ふ愛讀を賜へ

東京市京橋區尾張町新地七

毎日新聞社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

婦徳修養婦人必讀良書なり

フランツボナイゼン原著
海老名彈正夫人序
日本齋木仙醉先生譯

新刊 噫有情

洋裝美本

定價三十錢
郵稅四錢

誤解する勿れ本書は決して淫靡なる小説に非ず、光明の婦人の福音也、樂しき家庭の皷吹也、原著者は聲名嘖々たる獨乙の文學者フランツボナイゼン氏にして、獨英佛其他各國各時代の大文學者の婦人の美徳と戀愛の美徳と、婚姻の美徳とに關する、理想を集めたる理想集也、此の書獨乙の文壇に白花爛熳の花園なりと評せられ、淑女靑年の愛讀書也、本書を讀める高潔なる一女史評して曰く、此書は世俗の多くの婦女子に關して書かれたる書に似ず、何となれば彼は其の思想地につけるの書にして、此は其の思想天につけるの書也、此の書は亦鏡なり、以て淑女の姿を映ず可し、婦人は此の書を讀める間は羽化登仙して天使となれる心地し、之を誦讀せるを聽き居たる團欒の處女等は或は裁縫或は編物の手を止めて恍惚として甘き天の露を吸ひ、美はしきエデンの馨ばしの花の香に醉へるを視たりと、噫此の書は歐洲の詩聖文豪が金聲玉振の文辭なれば、淑女の胸に一大光明を抛つもの亦宜べなるかな、今試みに茲に原著者の序歌の一節を拔萃せん。

歳又歳を經りゆきて、頭に霜を戴くも、生活の重荷分ち負ひ、生活の幸を倶にして
世の與へにし怡樂をば、徐ろに念ひ忍ばしめ、其の晩年を夕照の、光の中に榮わらす
猶は家妻の手を執らん、噫其人は幸なれや、妻の手により瞑するなる、斯からん人の臨終なる
眼に浮ぶ涙には、幽しき虹や閃めかん、

と、以て其一斑を悟るべし、誠に此の書は婦德修養者必讀の書たり、女學生の文を作る者の好參考書たり、家庭の珍品たるは謂ふまでもなく、詩人は此の中に慰安の盃を飲むを得べく、求道者は此の中に愛の哲學を聽くことを得ん、敢て江湖の讀者諸君の御愛讀を請ふ。

發兌所 東京神田裏神保町五 東華堂

賣捌所 東京堂、岡崎屋、中野書店、上田屋、文明堂、世界堂、春祥堂、大阪前川、

蕊は花瓣の底端に着いてるから、花が落つると、後には雌蕊と蕚とが殘る、然して此雄蕊と雌蕊とは絲狀の花絲と云ふものに、葯が付いて成立てゐる、葯から黄花の花粉を吐くと、風が吹いてきて夫を雌蕊の柱頭へ振りかけるので懷姙する、子持となつて實が成るので、櫻や梅などは虫の力によつて生殖の作用を營むから虫媒花、ツヽジや百合は風媒花と云ふのです。で又此雄蕊と雌蕊とは生殖上極く必要な器官であつて、

[illegible]

イ、花絲、ロ、葯、ハ、花粉、ニ、花柱、ホ、柱頭、ヘ、花瓣、ト、蕚、チ、花梗、リ、鱗片



若し其一でも無い時は種子を生むとができないから、この兩者を花の緊要器官と稱し、花被（瓣と蕚の總稱は）花が未だ蕾でゐる時からこれを保護して昆虫を誘つて花の生殖を助けるから、保護器官と云ふものである。
夫から花の下部の莖の樣な處は花梗で、花梗の下方に鱗片樣のもののあるのは苞。これで花の講義は了つたが、『偖その花はなにゆゑに咲くのだらうか、知つてゐるも

のは無いか』と仰しやゝ、坊ちやまは『お父樣夫は人に見せる爲めです。』と云ふをお孃樣は『イヽエ野山を飾る爲よ、人がお化粧をする樣に。』と眞面目な、お母樣はお笑になると、下女が思ひ出したやうに高笑ひするので、座中は暫く賑はしくある、すると先生『英一もお園も感心だが、少し當らなかつた、花が此樣に咲くのは決して人に見せる爲めではなく、又野山のお化粧をする爲めでもない、花が咲くのは、自分を繁殖す爲で先づ自分は何時死んで了ふか知らないから實なり木なり、二代目のものを澤山作らへる必要がある それには實を結ばなくてはならない、けれど自分は動けないものである から生殖の作用を營むのに他の力を借りなくてはならぬ、そこで花を美麗しくして置いて虫を呼んで其仕事を爲て貰ふ、何のことはない商人が店を飾り立て顧客を呼ぶのと同じことだ。次に葉だが 葉は圓長くて厚い、一二年の間は落ちずにゐる、櫻と同じく網狀の脈ある雙子葉植物で、此葉が集まつてゐる所はビワの葉と同じやうに輪生と云つて、モヤ〳〵した細い毛のあるのは雨や露の害を防ぐ爲である。今庭はツヽジの種類、山ツヽジ、羊躑躅、杜鵑花、石巖、白杜鵑花などは其重なるもので、普通のツヽジは元、銀(白)、金(赤)の二色斗りであつたが、段々色變りが出來て今では三百余になつてゐる、園藝上其最も良種とするのは、露國ツヽジ、印度ツヽジの二種で、高さは四五尺、低きは一二尺、枝少なくて花が多い、二月初めて花を開き、方今有名ものは玉の井(白色)、扇重(白地に緣紅)、佐野の暮(濃紫)、朝日(緋)、三芳野(紅)、練絹(白地に紅縞)、花簾(桃)、雲の上(樺)など、山石榴、映山紅、杜鵑花、などは皆同一物だ。羊躑躅の花は黃

色で赤味を帯びてゐる、通常のものよりは大形で高さ七八尺、葉は披針葉で粗糙であつて、一に蓮花ツヽジ、オニツヽジといふ、其羊躑躅と稱するのは花に毒があつて、羊が之を食べると躑躅して進ます、往來して去らず、忽ち死するが故であるといふことだ、ツヽジは我邦に於ける一種特有の產物で、古くより詩や歌に現はれて居つて、萬葉集に。

はそひわのさき坂山の白つゝじ
われに匂はていもにしめさん

とある。余は知らないが、大山の山中にも淺葱ツヽジがあると云ふことだ（馬琴の說）葉は大霧島のやうで、枝は蔓の如く木は小さい、花は綿花に似て色はアサギであると、又紫の山ツヽジ、野州日光山中にあると云ふことは馬琴の書たものにあるが、木の高さ一丈、美麗な花で紫花をしてゐる、土人は之をヤシホと云ひ、又白色のものを白ヤシホと云つてゐる、又白杜鵑花は、元琉球から出て、今は九州の平戸に移り、平戸ツヽジと云ひ單瓣で白色、猶馬琴の說に從ると、霧島は大隅の霧島山から出て、花は白と紫の二色。躑はサツキともいひ、段ツヽジは京都上賀茂壇よりいで赤紫の二色、姫ツヽジは京都の山中に多く、花は紫小輪、瓔珞ツヽジ紫の小輪、枝に連なつて、咲くさうである、彼樣に一々列記したれど、羊躑躅以下は皆野生のもので、最初のものは人工的に變化したものです。』余り話が六ツケ敷なつて來たので、人々の體屈する樣を見て奥樣は手づからお茶をくんでお茶菓子と共にお分けなさる、先生も、お茶を一口召食つて、『モウ少しだから皆も堪忍しなさい、ね此躑躅がから紅に咲き揃つてゐる處は、實に麗はしいものではないか、支那の

俗に躑躅の花の紅なのは、杜鵑の鳴いた血が落て染つたとか言ふて「蜀魄千年尚怨誰、聲々啼血染花枝」と云ふ句もある、其處に多大の趣味をなしてゐるのは、よし無稽のことにもせよ、決し



瓜やなすびの花ざかり

て理由の無いことではない、凡て動物が植物に據て其性質や形態を現はしてゐることは爭はれない事實で、これは其土地に應ずる自然の配合と云ふもの譬へば梅や櫻の間に鶯が鳴き、椰子やバンダナの樹蔭に獅子が眠つてゐたりする、其邊の處を考へて我國では、梅に鶯、松に鶴と色々配合を取つた通り、杜鵑と躑躅を取り合せたので、夫には躑躅が赤色でなくてはならない、つまり杜鵑の聲の凄絶なのを云ひ現はした、然らば杜鵑とはどんな物であるか、玆に書物があるから讀んで見やう。』と先生は本を取り上げて。

杜鵑は各地の深山に棲み、晝夜となく高く啼渡る鳥なり、羽毛灰色にして白斑あり、口中赤く頭に小冠毛有り、脛掌蒼色、嘴は多少曲りて勁強趾は前後に二個づゝあり、拇趾と第四趾を後に向け、前に二趾を向けて木を夾む、最蛄蟖

を好み其卵を鶯の巣に産し鶯をして孵化さしむ、鶯の生卵の中のほとゝぎす(萬葉)。」其卵數は一回一個を産するのみ、繁殖少く稀鳥なるを以て捕獲を禁ず(禁止鳥)漢名杜宇、子規、不如歸、和名冥途の鳥、四手の田長。

郭公は杜鵑とほゞ同じ「カッコー」と鳴く、彼よりも大、卵は鶲鶴或は鶺鴒の巣を借りて孵化せしむ。(西洋のほとゝぎすは春の鳥なり)。

とお讀になつて夫に一々お講釋をなさる、皆々もッヽジよりは面白く聽てゐる、之で話も切上げにして又もやお茶を頂いて散會、皆能く聽問して居たから、明日は目黑へ竹の子飯を食べに連れて行く、お鍋はお留守居、其代り半襟一筋と云ふので『先生、奥樣お寐みなさいまし。』

(完)

雨の笠置山(下)

西京 松原隱士

笠置山は木津川の南岸に位し直立八百五十尺、路は山の西面にあり、關西鐵道笠置停車塲を下り東方に行く數百歩にして小倉川に抵る橋を追手橋と云ふ、早く既に元弘の往事を偲ばるゝなり、橋を

宇治は
茶摘みの
花やか
に



雜錄

渡れば笠置の町にて、右へ折れ一町餘の左方に從是笠置山と刻せる石標立てり、是れ登り口なり。二町にして下の堂を經て上の堂に抵る、古昔二王門のありし跡と云ふ、此邊は元弘陣の一の木戸にて足助重範が二人張に十三束の矢をつがひて賊將荒尾兄弟を射殺たる、處、又其南の谷は般若寺の本性房が大石を投げ落して敵の人馬を虀粉にしたる場處にて地獄谷と稱せらる。往こと七町、道の左側に名切石と稱する大石横はれり、是元弘の役に戰死せる義士の名を刻せしものなるが往年地震の爲め轉覆して今は其姓名を見るを得ずと。誠に惜しむべし、石大なりとても敢て動かし難き程にもあらざれば多數の人夫を用ひ堀起して調査したきものなり、或は史傳上珍しき發見あるやも知るべからず。若其も手數となれば此の石面へ同役に忠死を遂げたる錦織判官代父子を始め此役に加はりし爲め處々にて斬れたる足助重範、源中納言具行、平宰相成輔の如き、又本件の參謀長とも謂ふべき中納言資朝、右少辨俊基、等諸卿の姓名を深刻して忠魂を慰めたき者なり。石の傍に地藏尊を刻せる石碑立てり後世供養の爲めに設けしものと云ふ。

笠置寺は山頂にあり眞言宗の獨立本山にして昔時寺中に四十九院ありしも兵火震災に遇ひ今は只福壽院を存する已にて、近年是に鹿鷺山笠置寺の稱號を歸せり。境内に種々の花木を栽え四季の觀覽に供す。鐘樓の梵鐘は建久七年解脫上人の鑄造せしもの高三尺徑二尺二寸形甚だ古雅なり。駒止松は天武天皇御登山の時駒を繫がせ玉ひしものなるが其松枯れたれば稚松を植ゑて遺蹟を表せるなり、天神社、菅公嘗て醍醐天皇の臨幸に供奉せられ、此聖境に跡を托せんとの志願ありければ後

世廟址を建てしが、中古山下栗栖の宮に移して當社の總社となせし故山上には廟址のみを存せり。椿本殿は堂山鎮守の護法善神にて延喜八年日藏上人の勧請なり、祠前に上人の座禪石あり。

鎮守祠の前より左へ折れ北へ進めば老樹の欝蒼たる處に一大石の立つを見る、即ち藥師石にて高四十尺巾三十一尺、是と相並びて立てるは文殊石にて高二十一尺巾十六尺、少し離れて尤も大なるは彌勒石にて高、五十一尺巾四十二尺、是れ此山の本尊なり、古昔此三大石面は各佛像を彫刻し其上に之を蔽へる大伽藍あり、碧瓦彩棟の美觀を極めたりしも、元弘の兵燹に燒かれて、殿堂は烏有に歸し、石面の像相は剝落して僅に朦朧たる痕跡を留むるのみ、亂世に遭遇する佛も亦災難なる哉。大石の前なる十三層の石塔解脫上人母儀の供養塔と傳ふ、或は元弘戰死の供養塔と云ふ。本堂は文明十四年七月貞惺和尚の再建にして正月堂觀世音菩薩を安置せり。

本堂の傍を下り行けば金胎兩部二大石の相並ぶを見る、一は高四十尺巾三十六尺、一は高四十八尺巾二十七尺なり。千手窟は良辯僧正勅を奉して千手の秘法を修せし處、又龍窟と名づく、虚空藏石高四十二尺巾二十四尺、弘法大師求聞持の法を修し自ら石面に虚空藏菩薩の像を彫刻せしものさしも巨大の像なるに相好端嚴微妙なり、胎内實と云ふは五丈餘の大磐石道に當りて自然に隧道をなし、人其間隙を行く、其狀恰も小兒が母胎を離るゝ如しとて名づけしなり。太鼓石、其頭上を踏めば太鼓の響をなす。此處より東方谷を隔てゝ遙に瀑布の懸るを見る、之を千手の瀑と名付け谷を觀音谷と呼ぶ元弘の役陶山小宮山等は此谷より登りて皇居を襲ひしなり。扨此時賊軍の嚮導をな

したるは飛鳥路村の住民なりしかば、他村民は其不義を惡みて爾來同村民と婚姻を通ぜざりしと、其質朴忠厚誠に愛すべき事にこそ。搖ぎ石、是本性房の遺物なり、平等石、高二十五尺、殿下に不動尊の石像を安置す、貝吹岩　高十六尺斜面西に向ふ三十六尺、元弘の時螺貝を吹き進軍を令せし處と云、南方一段低き平坦の地は陶山等が火を縱ちし寶藏坊の趾なり。此より山下を望めば木津川の流山腰を一周し水碧に砂明かにして點々たる白帆は岸上の綠樹と相映帶し、山間溪頭には茅椽竹籬の民屋を點綴す、眞に是れ一幅の畵圖にて雨中の眺望殊に趣味あるを覺えぬ。皇居の趾は絶頂にあり、石階數十級を上れば平坦の地三百餘歩、其正面に石の玉垣を繞らし行宮遺址の木標を建つ、是大伽藍の一部分にして玉座の址なりと云ふ。されば彼の藤房が勅旨を傳へ正成が勅答を奏せしも此邊にてやありけむ、今は唯雜木の鬱蒼たるあるのみ、當時天皇の御製に云

うかりける身を秋風にさそはれて
　思はぬ山の紅葉をぞ見る

石階を下り左に折れて又坂を登れば藥師石の頭上に到る。笠置石は高五十尺周圍二十尺餘、文珠石の上にあり、是山の名の因て起る所、寺記に云く、天武天皇少時田獵を好ませられ、一日駿馬に召して此山上に獵し給ふ、折しも大鹿道の傍より跳り出ければ御馬驚き馳せて留まらず、數十丈の石壁の上に立ちぬ、天皇大に驚き一心に祈誓を籠め給ひしに、其馬四蹄を交へ石上より一跳に降ること十餘丈、忽ち恍として夢の如くなる中に神人現はれて扶掖參せしにより毫も傷し玉ふなく、徐に御馬を下りて休息し給ふ所へ群臣漸く集ひ來て慰め奉る、其時天皇我今佛天の加護によりて

免かるゝを得たり、仍ては此處に佛像を彫刻して上、洪恩に報じ下、群生を利せんと發願しあらせ給ひ、後日の標にと御思召の蘭笠を執りて石の上に置き宮闕に還御なりぬ。其後數日を過ぎて再び當山に登らせ給ふに、一羽の白鷺飛立て御笠の在所を示しければ、軈て其處の大石へ彌勒藥師文珠の三尊を彫刻し給ふに、化人來りて鐫刻を助け、不日にして功を畢へしかば叡信益々深く山を笠置と名け給ふ。其後白鳳十一年宣旨を下し、彌勒を本尊とし文珠藥師の兩大石をも内に籠め、殿に架し崖に倚り、雲に聳ゆる廣大壯麗の大伽藍を造營ありて號を鹿鷺山笠置寺と賜ふ。元弘兵燹の後遂に再建の事なく、殿柱を据へたる巨大の基石のみ今猶處々に存して其當時の莊嚴を追想せしむ。斯の如き靈山なれば歷代天皇の御信仰淺からず、名僧智識の因緣深かりし故寶物も多かりしが、元弘の一炬に數を盡して烏有となりしは誠に惜しむべし。

祖師堂、弘法大師を安置す、堂の奥に石穴あり天武天皇彌勒の像を彫刻あり、鑿槌を納め給ひし處と云。毘沙門堂、楠正成の守護本尊多門天王安置す。正成は其母信貴山の多門天に祈りて設けし男兒なるが、當山に於て龍顏に咫尺せしを難有き事に思ひ此像を刻して奉安せしと云。

當山中興の高僧解脫上人名は貞慶少納言入道信西の孫にて尙書左丞貞憲の子、性無我にして才譽衆に勝る、一年宮中の最勝講に召されしが殿上に列座せる會衆僧侶が美麗を競ひ浮誇に馳するを見て斯る佛法の制儀を守らざる徒輩に伴はん事心外の至りなりとて、講會の滿散を待ち直に笠置山に入りて般若臺院に住す。後鳥羽上皇其德望を聞し召し新築の佛殿落慶の導師たるべき旨宣旨ありけ

雜錄

れば上人徒歩にて宮中に參り、破笠を御階の側に置て殿上に昇り意氣自若たり。扨講演の席には詞辨玉を聯ぬる如くなりければ、上皇を始め公卿皆感嘆せざるなく、軈て勅宣ありて解脫上人の號を賜ふ、久壽二年に生れ建曆三年二月二日笠置山に寂す、其墓は毘沙門堂の前東方谷を隔て八町の處にあり五輪塔を建つ、元弘中興第一功臣中納言藤房と云へば、忠義一图の石部金吉的お公卿樣かと思へばさはなくして、太平記の記者の中宮御所の女房左衛門佐の局に對する一條の艶話を傳へたり、勿論太平記には正史實錄と見難き小說的談話多けれども、藤房の濃情と局の貞節とは近頃宏りにラブ神聖說を唱へる輕薄男女の敎訓となるべきものあれば其あらましをものせんに、藤房一年主上の北山行幸に供奉してはのかに局を見たるより人知れず思ひ初めけるが云ひ知らすべき便もなければ心に籠めて三年を過ぎけるこそ久しけれと、該著者も流石に其根氣强さに呆れたるものゝ如し、扨左の如く書續けたり。

如何なる人目のまぎれにや、露のかごとを結ばれけん、一夜の夢の幻さだかならぬ枕をかはし給ひにけり。其次の夜のきぞかし、主上俄に笠置へ落させ給ひげれば、藤房衣冠をぬぎ、戎衣に成りて供奉せんとせしが此女房に廻り逢はん末の契も知り難し、一夜の夢の面影も名殘ありて、今一度見もし、見ばやと思はれければ彼の女房の住み給ひける、西の對へ行きて見給ふに、時しもこそあれ、今朝中宮の召ありて北山殿へ參り給ひぬと申しければ、中納言鬢の髮を少し切りて、歌を書き副へてぞ置かれける。

黒髮のみだれん世までながらへばこれを今はのかたみとも見よ

此女房立ちかへり、形見の髮と歌とを見て、讀みては泣き、泣きてはよみ、千度百度卷き返し、心亂れてせん方もなし。かゝる涙に文字消ねて、いとゞ思ひに堪へ兼れたり。せめて其人の在す所をだに知りたらば、虎伏す野邊、鯨寄する浦なりともあこがれぬべき心地しけれども、其行末いつくとも聞き定めず又逢はん世の憑もいざや知らねば、餘りの思ひに堪へかねて書きおきし君がたまづさ身にそへて後の世までのかたみ

とやせん

と先の歌に一首秀副へて、形見の髪を袖に入れ、大井河の深き淵に身を投げゝるこそ哀れなれ。爲君一日恩誤妾百年身とはかやうの事をや申すべき。」

隨分氣短のやり方なれど、是が眞の愛情なるべし忠と謂ひ孝と謂ふも情感の作用なれば藤房に此事あるも怪しむには足らず。

紀念碑は山の北面半腹なる高二十五尺巾二十尺の自然石へ行宮遺址の四大字を深刻して皆金を塡めたるもの、一字の大さ四尺五寸二品彰仁親王書の七字一尺五寸、山麓より仰ぎ觀て其壯大に驚く、赤血谷、紀念碑西方の谷にて元弘合戰に血を流せし所と云ふ。是にて笠置の探勝を終り山を降る。恰も好し此時雨止みて雲全く晴れ笠置の山色又一段の蒼翠を添ふ。（了）

附云笠置山に温泉場あり、家屋は木津川の流に臨みて建築され、河を隔てゝ北笠置の村落に對す、山靑く水淸く、欄干に倚て眺望すれば身亦畫中の人となる、僻地なるに拘はらず器具飮饌皆淨潔佳美にして旅情を慰むるに足れり。溫泉にはアルカリ性炭酸泉にして浴用服用に適し、慢性胃病、慢性腸カタール、及下腹充血、肝充血膽石、慢性肺病、及胸膜內の滲出物、尿道膀胱カタール、婦人諸病、痛風、密尿病、腺病、肥胖病、多血病等に効驗ありと云、此地夏季の納涼避暑には最も妙ならむ、關西鐵道にて京阪へ往來せらるゝ諸君は一度淸遊を試み玉ふべきなり。

君が行くわかの浦わにゐるたづの
たづきもしらずわれやなりなん
鵜殿餘野子



大阪 博覽會見物

水圭青眼

順序からいへば、各館内の陳列品の見物が了むで、それから餘興に移るのであるから、記事の次第も、さうするのが當然であるが、前號に餘興の挿畫なども掲げてあるから、陳列品の方を後廻しにして、餘興の事を先きにする方が便利と思ふ。

ウオター、シウト（Water Shot）

茶臼山の池に傍ふて、博覽會の一隅に小高い塔がある、數十級の階段を昇つて、其塔の頂上から見下すと、小舟が、水面に向つて、下口の階段にかゝつて居る。ウオター、シウトは則ち此の舟に乘つて、茶臼山の池に浮ぶのである、水烟一發、舟は矢よりも早く、池面を射て、水中に入るのであるから、誰れでも其時はヒヤリとして、ヤレ仕末つた、頭から水を浴びて、衣裳もヅブ濡れになつたと思ふ瞬間に、舟

は一二丁も先きの水面に停まつて、水沫さへも受けぬので、安心すると同時にまた不思議な思がする。

メリー、ゴー、ラウンド (Mery go Round)

圓形の舞臺に、木馬やら、椅子やらが、グルリと中央の赤い服を着て大鼓の撥を握つた黒奴の周廻を圍んで圓く双んで居る。さて小學校の生徒や、女學生や、微醉の紳士や、子供を連れた妻君などが、その木馬や、椅子を占領して、凡そ百名許も舞臺に上る、と一聲の滊笛を合圖に、黒奴の人形が、大鼓を鳴らし始むるや否や、舞臺はグル〱廻り始めて、その廻轉の速度が、次第に早まつて來て、後には目が舞ふ様になる、さうして十分間許り過ぎて廻轉が止むと、元の不動の舞臺に復するので、子供などには、尤も滴當な愉快な遊びである、五錢の白銅を投ずれば、誰れでも此の舞臺に上ることが出來る。

不思議館

電氣光學の原理を應用して、種々の技藝を演奏する火焰の舞が、本館第一の觀物である。それから活動寫眞も從來ありふれたるものとは、仕懸けも、器械も餘程違つて居るとのことで、精致巧妙といつても宜いと思ふ。

予が見たる火焰の舞は、朝顔の舞、夜の舞、百合の舞、火の舞等の數種であつて。電氣の仕懸けが、いろ〱に變るから、成程其名の異なつて居る如く、朝顔の舞も、百合の舞とは、幾分趣を異にして居る、

夜の舞と、火の舞とは、幾許か光景が違つて居るが、要するに異趣同工で、左程名目のかはる程、種類の違ふものとは思はれぬ。併し舞の廣大にして綺麗なることは、幾回見ても見厭きのせぬのが、何よりの證據である。西洋の舞踏に委詳しい人が觀たなら、多大の興味を感ずるであらう。

演舞者たるカアマンセラ孃は、米國の名優で、また絶世の美人でもあるので、歐羅巴各國でも隨分評判の高い女優であるさうだ。成程容貌といひ、體度といひ、優美で、高尙で、奥床しい所がある樣に見受ける。

◎朝顏の舞　電氣が暗くなると、忽ち劉喨たる音樂につれ、正面の幕が徐々と左右に開きて、中央には、白絹で製つた廣き舞衣を被きたる一美姫が、薄赤の氣光を浴びて直立して居る。音樂のやうやく急迫になるに隨つて、美姫は靜に双手を動かすと見る間に、白絹の被布は上の方へと廣がり、叉左右に分れて、歌その中から美人の玉嬋娟たる顏は、白色の電光を受け、微笑を含みつゝ、あらはるゝのであるから、舞の菩薩とも、ミユズの神とも思はれて、覺えず喝采する人が多い。さて舞踏が始まつて、漫々たる舞衣は紅黄紫靑など、種々の電光に映じて、その色を變じ、左右に飜へり、上下に飛び、舞臺一面浪跳り、雲起るかと怪まるゝ中に、美姫の姿は玻璃の電光を帶びたる舞衣につゝまれて、舞ひながら消え失するのである。

◎夜の舞　黑き美麗なる絹に、金銀の飾りを附けたる衣裳を着て、全身燦爛たる電光に照らされながら、舞曲を始むるので、袖を掀げ、裳を飜がえすと、金銀の飾りに黄白の電光が反映して、恰も黄金、白銀、

翠珠、紅玉などの一齊に滴るが如く見えて、如何にも奇麗である。

◎百合の舞　白絹二十余丈を縫合せて作つたといふ程の長廣の衣裳を着て、縱橫左右に操縱して躍るのであるから、八色の電光を浴びて、徐々に兩袖を飜がへし始めたときは、殆んど森嚴とも優美とも見ゆる。さうして舞臺の背後には一面の鏡が飾り付けてあるから、躍り廻る姿が、その鏡に反映して、孰れが眞で、孰れが影であるか、辨別し難い、舞のいよ〳〵佳興に入る時に、白色の電光が強く輝いて、滿天白雪を飜へし、舞臺は一面さながら銀世界となつて、八面玲瓏の思がする。

◎火の舞　炎々たる猛火の一團となるかと見れば、舞臺の下層から噴出するかと思はるゝ火焰の中から美姫が忽然と顯はるゝので、その火焰と見へたのは、赤色の薄絹に、同色の電氣を巧みに反映せしめて、それを操つたものであつたとが分る。電光のはげしく輝くにつれて、舞踏も次第に急がしくなつて、その飛舞の光景が、背後の鏡に映つたときは、恰も猛烈なる火焰の裡に美人の姿が包まれたやうで、不動の化身か、圓塚山の道節かと怪まれて、覺えず感嘆する中に、何時となく朦朧として烟の如く其姿を見亡ふのである。

活動寫眞は、カアマンセラ孃の舞曲の附屬物であるが、一寸愛嬌があつて、面白く見受けたものを紹介しやう。

◎雛の孵化　一人の手品師が出て、牝鶏の腹を絞つて、六個の卵を產ませ、その卵を割りて、雛を孵出じ、喜びて舞臺を飛廻つて居る雛を捕えて、卵殼に收めて、元の通りの卵として、また牝鶏の腹中に入

るゝので、其手際がなか〳〵巧妙で、實物を見るやうにある。

◎萬國婦人の行列　各國各種の美婦人が樣々に盛裝して、行列を組むで練り行く中に、日本の婦人が傘をさして、人力車に乘つて、鉢卷きをした車夫に曳かれつゝ行くところは、中々面白い。

◎歐洲俳優の樂屋　美麗な女優が化粧したり、禿頭の老俳優が入眼を取つて、鬘を外したり、又た女優と男優とが酒宴を始めて、睦ましくさゝめき興じて居るのを、室の鍵穴から、掃除人が涎を流して、見て居るのは如何にも滑稽である。

◎魔術　盃を把らうとすると、其手がポツリと肩から折るゝ。それが又繫がつて元の通になると、今度は手も足も首も、離れ〳〵になつて、空中に飛散してしまう。暫時して又た元形に復したと思ふと、己れの首を小脇に搔込んだ首なしの胴體が直立したるまゝ引込むで隱れる。

◎月世界旅行　數人の豪傑が、非常に強勢なる大砲の發射力に因つて、地球の引力以外に飛出して遂に月の世界に行き、その住民を征服して、國王を捕虜にする、そうしてそれを御土產にして目出度地球に還るといふ仕組で、人間を彈丸の中に詰込みたり、その丸が月世界に命中したり、又中から豪傑が出て、戰爭をしたりするところが、甚だ巧みに出來て居て、面白い。

それから此の不思議館の中には、臨兒育成器とかいうて、臨月前に生れた月の足らない、赤兒を、育つる器械とか、月の世界の山とか海とかゞ見ゆる大望遠鏡など、斬新の發明にかゝる器械が、此頃新たに歐米から着いたといふことである。



小説

姫椿（上）

齋藤素影

今より四五年も以前の事である。

『其様詰らない事を言はないで學校へは何うあッても行ッてくれねばならぬ、學校へ行かぬといふ事があるか、さあ最う八時ぢやないか、早く行かないと遲くなるぞ。』

と僕の家の隣家の亭主は斯う云ッて娘に勸めた。僕は病を養ふ爲め皐月の中頃郷家へ歸ッて居て、或日の朝、能くない事とは思ひながら、そッと垣の内から聞いて居たので。

『だッて妾、何うしても學校へは行きたくないもの、此様穢ない着物を着て行きますと誰も相手にしてはくれません、仕舞には皆で虐めますわ、そればッかりなら可いけれど、お鈴さんの母さんはお父さんを

捨て丶逃げて行ッたなんて言ふんですもの、妾母さんの事を言はれると、眞個に……口惜しい！後生ですから學校だけは止めさせて下さい。』

娘は最うおろ〳〵聲である。垣の內から能く見えないが、かねて知ッてる娘で、今年十六面長の色白で、此樣田舍には惜しい容色、平時手織木綿の垢着いて、處々補綴さへ見える袷に、最う心の出相になッた幅の狹い唐縮緬の帶を締めて居やうといふ風なので。

『うむ、尤もだ、其樣事を言はれちや口惜しいだらう、けれども我慢して行ッてくれ、今其樣事を言はれるのが口惜しいからと言ッて行かないで居りや、お前は一生其樣穢い垢着いた着物を着て世間の人達に相手にされずに居なけりやならんよ、學校へ行ッて勉强して心を美しく持ちさへすりや、自然皆が惡口なんか言はなくなる、お前は今まで默ッて何うか斯うか辛棒して來たのぢやないか、今更其樣事をいふものではない、何でも今日から人が惡口を言ッたりなんかしたら、流行唄を唱ッてるとでも思ッて居たが好からう、其樣事を口惜がらない方が可い、さあ早くお出、遲くなると不可ないから。』

父は尙も娘を諭して勸めて居る、併しお鈴は何うしても不承知の樣子。

『だッて妾や、お父さん、彼樣口惜しい……！私や何うしても行きたくないわ、學校だけは止めさせて下さい。』

『不可ない、學校は何うあッても止めさせる譯には行かん、兎に角最う八時だから早くお出、何れ歸つて來たらお前の得心出來る樣十分に言つてあげるから。』

『はい。』

『はいぢやないよ、さあ早くお出、何故云ふ事を聞かないんだ。』

『はい。』

『何だ、お前は、返辭ばかりして居て矢張何か考へてるぢやないか?』

『だッて妾や口惜しいわ、彼樣に母さんの事をまで……』

『うむ。』

『それに此樣衣飾をして、皆がいろんな事を言ッて相手にしないのも無理はないわ、ですから、わ、妾や何うあッても……』

お鈴の眼からは最う涙がこぼれて居るであらう。父も今は堪らなくなッたのか、

『うむ、尤もだ、お父さんは能く察して居るわ、だがな、お鈴、人は學校へ出て普通の敎育をうけて居ないと駄目だからな』

『ですけれどもお父さん、妾や學校へ出なくッても屹度お父さんには孝行をしますよ、それから日頃お父さんが仰有る通り心を美しく高く持ッて居ますから、學校だけは止めさせて下さい、學校へ出たばッかりで心が美しくなるといふ事もありませんから。』

『然うだ、實に然うだ、能く言ッてくれた、學校へ出たばかりで心が立派になるといふ事は決してない、又高家の人達だからッて皆心が美しいといふ事もない、學者や金持にでも心はまるで襤褸の樣な穢いの

もある、水呑百姓にでも心は錦のやうな立派なのもある、だがな水呑百姓で居てさへ心を錦のやうに立派に持ッて居られる人なら、若し此人が敎育を受けたら、心の錦は何程光を添へると思ふ、此處の道理を能く考へて見ねば不可ん、お父さんもな、少しは本も讀めて物の道理も解るのだが、病氣をしたり、火事にあッたり、それから何いろんな不幸に會合した上に、お前の母さんは善くない性の女だッたから、到頭お前と己を棄てゝ出て仕舞ふし、眞個に最う涙の絶えるひまもない口惜しい身の上なんだ、己も最う十年若けりや、斯うしてゐゝしてと思ふ事もあるが、此樣に齡をとッた上に病身ぢや、だん〳〵元氣がなくなッて心細くなるばかりで、迚も梲があがらない、一生最う此樣情ない小作人の身の上で終らねばならないのだ、だから此上は唯お前を一人前の女に育てあげて、世間からも少しは敬はれる位の所帶を持たせたいばかりだ、それをするには何うしてもお前を學校へ出さねばならぬ、學校へ出ないで居ちや、お前が何樣美しい心を持ッて居ても、お父さんが此樣病身者なんだから、迚も可い所帶は持たれない、だから學校へは是非とも出てくれ、お前の可厭がるも無理はない、尤もだが、それを我慢して勉强してくれ、勉强する氣さへありや、澤山の學費なんかなくッても、十分に出來る上のお政治だ、そんな弱い事を言はないでな、え、お鈴、己や何時も何故此樣有難いお政治になッてから生れなかッたらうかと、口惜しく思ッてるわ、さあ早くお出、え、困ッたことを言ひ出してくれた、眞個に遲くなッて仕舞ふぢやないか。』

父親は早や男泣きに泣き出したい位氣を揉んで居る。僕も素性を知ッてる人の事、同情の念に堪えない

ので、飛んで行ッてとも〴〵お鈴に學校へ行けよと勸めたい樣に思ッた。

『お父さん、ぢや妾學校へ行きますわ、何樣事を言はれても我慢して、一生懸命に勉強しますわ。』

お鈴は遂に意を決したのか、、、、きッぱりと斯う言ッたが、併し悚へ切れぬ涙をはら〳〵と落して泣いてるらしい。

『すゞ、行くか?、ぢやさあ早く、能く聞き分けてくれた。』

父親の嬉しさは最う言ふに言はれぬものであらう。

『はい、行きます、妾や何樣苦しい思をしても勉強しますわ。』

『うむ、何樣苦しい思をしても!?あゝ折角勉強して大きくなッてくれ。』

『はい、妾や學校の平岡さんの樣に、女の先生になりますわ。』

『うむ、女の先生、それが好からう、田舍に居るのだから、先生が一等好からう、さあ早く行ッて來てくれ、辨當を忘れる勿。』

『はい。』

何といふ可い氣象の娘だらう。あれが夫と子を棄てゝ出た女の娘なのか。全く父に似たのであらう。お鈴は早や父に別れて行ッたらしい。僕の胸中は何とも言はれぬ嬉しさに充ち滿ちた。併し其何とも言はれぬ嬉しさの心の裏には一種言ふべからざる悲しさが潛んで居た。僕は少時は茫然として佇んで居たが、堪らなくなッたので門口へ駈けて行ッてお鈴さんを見送ッた。元氣能く村端れなる小學校の方へと行く

お鈴さんの哀れげな後姿！其後姿をお父さんは無論見送ッて居た。

（下）

其後僕の病は驚くばかり速に快方に赴いて殆ど全快して仕舞ッたが、丁度四五日前からの五月雨で、月の行方も分らぬといふ有樣、鬱陶しくて〳〵堪らなかッたが、或日の夕方珍らしくも雨が晴れて、空には美しく月さへ見えた。最うすッかり雨には飽き果てゝ居た處であるから、嬉しくて堪らないので、直ぐ足駄を穿いて鎭守の社へ散歩に行ッた。

すると神社の階に跪いて頻りに何事をか念じて居る女があッた。能く〳〵見るとそれがお鈴さんであッたので、僕はあまりの意外に驚いて無言で鳥居の傍に立ッて見て居ると、やがて念じ終つたのか、立ち上ッて此方へ近寄ッて來た。近づくまゝに彼方も僕を見て喫驚したらしく、

『あら！』

と言ッて立ち止ッた。

『お鈴さん、何樣事を神樣に祈ッて居たの？』

僕の方からも聲をかけた。

『まあ可厭だ！すッかり見られて仕舞ッて。』

と羞澁んで居る。

『なに可いではないか、何樣事を神樣に祈ッて居たの？』
『いゝえ、別に何樣事も……………』
『だッて何やら念じて居たのを見たもの。』
『あら！』
『よ、何樣願があるの？』
『だッて母さんが居ませんから淋じいんですもの……………』
お鈴は急に萎れ返ッた。僕も此一言が胸にこたへて、忽ち哀れさの念が胸に溢れた。
『母さんの事に就いて何か念じて居たの？』
『はい。』
『感心な心懸けだ、だが何にも此處まで來て祈るには當らない、家に居て心の中で念じてさへ居りや神樣は屹度守ッて下さる、日が暮れてから一人で此樣處へ來て夜氣に打たれちや、第一身體の毒だよ。』
『はい。』
お鈴はいよ〳〵萎れ返ッた。けれども彼は父から言聞かされた決心があるからであらう。その涼しい眼には無量の光明は溢れて居た。如何に賤しき家に生れても、神聖なる靈は彼が小さき胸中に宿つて居るのである。

去年僕が歸省した時、二十あまりの海老茶袴をはいた、女教師のお鈴さんを見た。可憐なるお鈴さんは自分の一生を神聖なる兒童の教育にさゝげたのであらう。

（をはり）

文林



野柳　久我建通

すこかたく野へのおくた火末消て
殘るけふりはやなきなりけり

岩根厥　蜂須賀茂韶

里人もをりわすれけむたにみつの
めくる岩根におふるさわらひ

山春風　松浦詮

雪きえし山のはるかせのとかにて
はなの匂ひによはなりにけり

馬上春風　西三條實義

のりて行駒のたつかみなひけとも
將さむからぬはるのかせかな

水雷艇　宮地嚴夫

大そらの物とおもひしいかつちの
うみにとゝろく世となりに鳧

落花猶薫　北鄉久政

春風にこすえはなれてちるはなも
なほかくはしく匂ひぬるかな

新井白石　阪正臣

富人かひもかたなにもふれさりし
こゑひはつひに雲おこしけり

燐寸　小出粲

たひ人のゆきかふ袖のすりつけき
火うちふくろもゝたぬ御代哉

谷厥　鎌田正夫

谷かけに蕨しわらひはおほけれと
　うはら茂りてをられさりけり

舟中春風　遠山英一

いますこし風も吹けよと思ふまて
　舟の帆たるむはるのうなはら

春雨　近衛貞子

さわかしき風はやみぬと思ふまに
　空はかすみてはるさめそふる

兼好法師　蜂須賀随子

契りおきしはなと雙のをかのへの
　ことはの色は世にあせすして

春の夜文をよむ　柳原愛子

おくふかきふみの林をわくるまに
　早くもはるの夜はふけにけり

短艇競漕　北島以登子

みつの上に爭ふ丶ねのかちまけを
　見るこゝろにもなみは立けり

堤柳　常磐井文子

春雨のはれしあしたもあをやきの
　けふるつゝみはなほ霞むなり

鎌倉右大臣　田中瀧子

たはふれにぬきてあたへし黒髪は
　永きかたみとなりにけるかな

春植物　中村禮子

なにとなくなつかしきかな麥畑に
　交りてさけるそらまめのはな

椿　小川直子

少女てふ名をおほせたる程みえて
　いろなつかしき玉つはきかな

高架鐵道　鈴木小舟

夢にたにかけて見さりし黒かねの
　はしの上をもゆくゝるまかな

文林

蕨　服部磯子

かしこにも多くもゆらむ谷かけに
　蕨をり〳〵ひとのこゑする

燕の歌　橘村生

あらつばくらめ春の日の、
長閑きそらにかへりきて、
影を見せけりわかやどの、
もとの古巣をなつかしみ、
かの青やぎのわかみどり、
かのくれなゐの桃のはな、
汝がすがたにふさはしき、
かすみの袖をひるがへせ、
ながきちぎりの宿なれば、
棲にまかせむたびの身の、
二つのつばめちゝとなり、
母となる日をたのしめよ。

行路柳　伊勢　田村猛雄麿

うしろ髪ひくあをやぎのいとよりて
　あかぬおもひをゆふくれのそら

落花

來し路をこゝろまよふてとふまでも
　夜半のあらしのはなのしらゆき

水石契久　讃岐　小西甚之助

さしはさむ松の根とめにおくいしに
　千とせをちぎるかめのみづかな
石やまのいしにひゞきていく千世や
　瀬田のかはみづ名にながるらむ



五月一日兼題

樞密顧問官 正三位子爵 黑田清綱先生撰

（先生病にて伏褥せらるゝにより門弟子の代撰に係る）

早苗多

天 埼玉縣入間郡川越町十一番地 横田秋子

植あまるさなへをみれはこのあきも
たり穂のいねや去年にますらむ

地 三河國室坂郡下地町 永井さい子

生たちのおもひしよりやよかりけん
あまたさなへのみちにすてたる

人 清國北京城內黒芝麻胡同 稻田兼子

見渡せは野田もやま田もうゑつくし
つゆ置きあまるあせのたまなへ

甲之部

東京 田中よし子

千町たにうゑてもおほくあまりけり
ことしのさなへおひたちやよき

名古屋 瀬木せき子

畔つたひ行きかぬるまてしつの女か
あましすてたる小田のわかなへ

北海道 澤鈴子

ゆたかなる御代のためしは植あまる
けふの早なへの上にも見るかな

東京 雨森つる子

田のあせに道のかなたにところせく
うゑあまりつるつゆのたまなへ

東京 三好珍子

しつの女か早田おくて田とり〳〵に
うゝる早なへのかすもしられす

歌の庭

乙之部

あせ道にのこる早なへも見ゆるかな　熊本　日高かす子
いつこのさとにうつしうゝらん

小山田はみとりのほかのいろもなし　肥後　田代綾子
見わたすかきりさなへのみにて

うゑわたすいくちまちたの若なへに　東京　河合象子
あきのさかゐもかれて見ゐけり

幾千度とる手ひまなきなはしろに　札幌　山田婦美子
おふる早さへのおゝくもある哉

ゆふつきも手にとりそへて賤の女か　東京　安井京子
やまたのさなへとりもつくさす

みなくちに縁りのこしてちまちたに　東京　山口琴子
あまたのこるなへうゑわたしけり

くる秋やゆたけかるらしちまちたに　東京　山本茂子
うゑしさなへのかきりなけれは

まちことに植こそあまれつゆしけき　肥後　佐々小琴子
やま田のはらのたまのわかなへ

こもまくら高田くほ田のわかちなく　肥後　佐々有隣子
うゝるにあまるつゆのわかなへ

ちまち田やうゑむとすらむ畔もせに　三河　河合ぬひ子
とりつかれたるなへのおほきは

千まち田の早苗をみれはやつかほの　埼玉　横田音羽子
たりほのあきのおもひやらるゝ

いまよりは秋のみのりのほの見ゐて　札幌　山田静子
ゆたかなりけり小田のわかなへ

豊かなる御代のしるしとみるものは　三河　石川満壽子
ゆたけきとしのあきもしられて

いく町もあをみわたれるわかなへに　三河　本多きさ子
やまたにあまるさなへなりけり

夕つきのたのもにうかふかけふみて　東京　山本梓子
あきのたのみやいくらなるらむ

乞ふひともことしはなくてなはしろの　兵庫　小西まさ子
さすやさなへのかすそゝひゆく

なへはこふ人もひまなしいくつらの　三河　宇津野代幸子
あたらさなへもふしたちにけり

こん秋をみなたのしみに千まちたの　上總　高石登代子
をとこをみなのうゝる千まち田

千町田にうゑあまりけんこゝかしこ　山口　田村多豆子
さなへもいまはうゑはてにけり

わせおくてふれにつみつゝ賤の女か　秋田　古瀬りく子
さなへおほくもとりすてにけり

きのふとりけぶうゑはてつあすは又　三河　服部正子
とふさとをたにはこふわかなへ

千町田にうゑつくしてもあまりけん　東京　杉田繁子
とりてやうゑむのころさなへ田

大きみのめくみのつゆにうるほひて　東京　椎野秀子
なへうるこゑのあまたきこゆる

ゆたかなる君か御代とてしつの女か　栃木　青木たま子
やまたのさなへとりもつくさす

おくれしと植るさなへのひろ田にも　東京　吾妻ちか子
つきせぬ早なへうゝるけふかな

しつのめか歌ふ田うたのこゑすなり　下野　岩間きよみ子
あまるはかりにおいのひてけり

しめはへておろすゆたれの千町田に　あまる早なへとなれるうれしさ　東京　鈴脇ます子

來ん秋のゆたけきみのり見ゆるまで　さなへとる手のひまなかりけり　下總　春野すみれ子

千町田なうゑわたせともこゝかしこ　なほあまりあるつゆのたまなへ　埼玉　前野ふさ子

千町田にあまたも早なへうゑはてゝ　とよあきいのるよものたみくさ　東京　北島功子

來る秋のみのりのほともしられけり　ちまちたつゝくさなへあまたに　美濃　吉村せん子

丙之部

時來ぬとしつかおとめらおりたちて　とれとも盡きぬ御代のたまなへ　長野　山本直枝子

なとつひもきのふもけふもとる苗に　いくちまち田やうゑむとすらん　三河　服部萬子

千町田にこゝもかしこもさなへとる　ひとはたりほないのり植うらん　若松　川島謙子

さみたれの降る日もぬれて千町田の　さなへとれともうゑはてぬかな　讃岐　大山豊子

早苗とるすけのなかさのかすみゐて　いそくもしろき田子のもろこゑ　東京　安井あや子

さみたれにみとりはまして千町田の　さなへはかせにうちなひきつゝ　東京　林環子

けふもまたゆふへとなりぬ千町田の　つゆのたまなへうゑあましつゝ　東京　近藤はな子

千町田にこゝもかしこもさなへとる　人のなかさのしけくもあるかな　岩代　川島常子

けふもまたさなへとるらし打むれて　うたふ田うたのにきはしきかな　東京　戸塚てづ子

大きみのめくみのつゆはあまれきて　ゆたれなおほみさなへとるらん　東京　内田とく子

時來ぬとさなへとるらんきのふけふ　おほくそ見ゆる田子かすけかさ　下野　民屋信子

にきはしく君かめくみなうたひつゝ　たみは田ことにさなへとるなり　下野　民屋美津子

さなへとる今な見せはやゝまさとな　さひしといひしみやこひとらに　下野　海老沼靜枝子

さとかはの水のなかれなせき入れて　おほくの田子のさなへとる見ゆ　下野　民屋賀久子

桑種とりしあとのはたけな田に直し　あまるさなへなうゑこゝろみむ　兵庫　石田さだ子

植ゐたてゝゆたけき秋のおいさきは　のこれるなへのいろにみへけり　肥後　坂本道子

あしたよりゆふへなかけてとる早苗　ちまちいほまちうゑあまるらむ　山口　村上操子

小山田におひもわかきもうちむれて　さなへとる手のいそかしきかな　熊本　田代艶子

うゑあまる早苗にそれとしつのめは　あきのみのりやいのりつるらむ　茨城　中里げん子

賤のめかもすそぬらしつとり〳〵に　ちまちのおたにさなへとるなり　栃木　川連秋子

時きぬと五百しろ小田にしめはへて　みとりのさなへとりもたゆます　東京　川村松子

歌の庭

雨やまて日はくれぬめりいくちまち
いそくさなへにそてやくちなむ　東京　川瀬たき子

面しろくうたふ田うたにけふもまた
くろゝもしらすとろさなへかな　秋田　佐藤かつ子

日のくれて水のせゝらくなはしろに
つきかけふみて早なへとろ見ゆ　東京　後藤ちか子

村ひとのおのかさち〳〵わけもちて
さなへをおほみいそくたこかな　東京　内田きみ子

年としにうゝろさなへもかすまして
みよのさかゐもあらはれにけり　東京　荒井千代子

水くちもおなしせ戸屋の早なはしろ
うゑつけもまたおなし日ころに　東京　中野昌子

みはたせはかと田もけふは植ゐ果ぬ
のこるさなへはおくてなるらん　肥後　坂本たけ子

けふいくかほすひまもなく乙女子か
もすそかゝけてさなへとるなり　東京　椎野藏子

とき來ぬとおほくの乙女おたりちて
千まちのさなへうゑわたしつゝ　下野　大木音子

千まち田に野川のみつをせき入れて
とき來にけりとさなへとるなり　下野　葛生定子

にきはしくうたふ田歌の聲のうちに
御代のおほくのとみやこもらん　下野　花方米子

こゝかしこあかきたすきの打ましり
むつひてしつのさなへとる見ゆ　越後　檜八重子

さみたれのはれまをまちて千町田に
うゝろさなへのかすもしられす　下野　徳子

ほとゝきすなくれきくよりち町田に
とよみてしつかさなへとるなり　秋田　古瀬たゝ子

くろゝまて田面にうたのこゑするは
いまをさかりのさなへとるらん　遠州　飯田せい子

あせあゐていそしむ見れは賤の女か
とりあまりぬるさなへなるらむ　松山　上原のふ子

あら小田をいまはみとりにうちかへし
ゆたかにをふるみよのわかなへ　伊豫　小松千代子

日の影のうとときやまたもうね〳〵て
なほあまりあるつゆのたまなへ　兵庫　泉久頁子

大御代のめくみそしろききさなへくさ
このもかのもにゆたかなりけり　長野　小泉みつじ子

みそなはす君のめくみのこゝかしこ
たをもにきあふさなへところ　三河　石川多那子

見せまほしみやこの人にをやまたは
うゑしさなへのなみかせそふく　相模　森田葉留子

うゑわたす田のもに秋のいろみゐて
なほおきあまろつゆのたまなへ　埼玉　前野壽賀子

しかすかに瑞穂のくにと知られけり
みとりなみうつ五百田さなへに　伊勢　中村とく子

田の面のうつもろはかり打ちむれて
うたうたひつゝさなへとるなり　下野　木宮愛子

見るかきり植ゑわたしたるさ苗こそ
御代のゆたけきしろしなるらめ　下野・和賀井芳子

打ち見れはすけの小かさの數おほく
なへとるしつのにきはしきかな　下野　和賀井花子

かすおほき早苗やあめにおいぬらん
はれまにいそく田子のもろこゑ　東京　椎野ぬき子

早苗とる田子のぬれ衣ほしもあへす　いくか田のもにあけくらすらん　野州　佐藤てつ子

賤の女かさなへとる手にあはせつゝ　うたふ田うたのこゑゆたかなり　下野　壬生みと子

賤の女かさなへとるとてちまち田に　裳すそぬらしてけふもつとへり　下野　菅沼つれ子

時きぬとさなへとるらしさとの子か　うたふ田うたのいさましきかな　下野　菅沼よし子

けふもまた岡邊の小田にしめはへて　かみのみやひとさなへとるなり　下野　さなへ子

せき入しみつすみよしのきしのたに　とるやさなへのかすもおふかる　肥後　徳永雪枝子

見わたせはみとりの早苗ちまちたに　うゑあまりけんみちのかなたに　秋田　三浦さわ子

民くさのしけきさなへにおくつゆの　もれぬはきみかめくみなりけり　秋田　三浦ふさ子

賤の女はきのふもけふもきみか代の　ちよなかそへてさなへとるなり　愛媛　南　育子

植つけしかと田のさなへけさみれは　かせもかをりてゆたかなりけり　下野　栗生きくね子

苗しろにをふるさなへになにとなく　ゆたけきとしはまづしられけり　三河　榊原てる子

嘛かしと田子のつかれもおもほゆる　もろてにいそくさわのたまなへ　三河　石川代志子

みせまほしみやこの人にやまさとの　ちまちの小田にさなへとる日を　三河　石川美野子

くる秋のみのりたのみてしづの女か　このもかのもにさなへとるなり　兵庫　泉さい子

とり植るさなへのいとゝおほけれは　田子のぬれきぬほすひまもなし　伊豫、柳たけ子

日暮にはつくさんものとおもひしに　早なへおほくもうゑあまりけり　若松　川邊柳子

見わたせば小田にしけれる若なへの　ゆたかにいろのすゝしかりける　東京　荒井滿武子

數おほくうゑしさなへはおとられと　あきのみのりやいかゝあるらん　東京　荒井いく子

賤のめかわせとおくてのさなへふれ　くるゝもしらしいそきつむらん　秋田　古瀬とよ子

千町田に小かさならへてしつの女か　ふしおかしくもとるさなへかな　下野　長たつ子

いく千町田のおもしろくすけ小かさ　見ゆるはしつかさなへとるなり　下野　瀬下喜代子

見わたせは小田のひと面さなへとる　すけかさのかけ打ちつゝきけり　下野　植竹濱子

さとかはの流れほそくもなりにけり　いく千まち田のさなへとるらん　下野　花方和賀子

さなへとるすけの小かさの數見ねて　田うたのこゑそにきはひにける　下野　佐藤文子

しつのめかとれる早苗を駒におほせ　おほくはこひてうゝるころかな　下野　大木知賀子

あまのかはあせやしぬらんさ苗とる　まゝにまかせてみつ引かせなば　下野　中村清子

民くさのさなへとり／＼うゑいそく　たうたのふしもおもしろきかな　鳥取　大塚信子

秋の庭

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

池亭に蛙を聴く

天

本郷區湯島天神町二丁目五番地　山口琴子

おぼろ月の、をかしきよひのほとに、池のなぎさの、草のやに、つどへるは、世の中をやすらかにわたる、友どちなりけり。てりもせずくもりもはてずなど、うたふ、あるは唐のうたをもこゝろ〳〵に、ずしなどするを、たゞにやはとて、琴などとり出て、すこしひくほどに、みなそこにて、蛙のこゝろ〳〵とさへ、しらべあはせたるは、おなじ心にやと、あはれがりて、さよふくるもしらずしてなん。

おもしろくうたふ蛙のもろこゑは
やまと歌にもたちまさりけり

こよひはこゝに、露とゝもに、おきあかさばやとさへ、おもはる。

地

東京赤坂區青山北町三丁目六十八番地　山本梓子

風より先にと言つてし折を、心ならずも打すごしぬれど、垣の山吹咲きこぼれていとなつかしきしをり戸に、あないこひしは、くれ行春の日影はや西山へかたぶきたる頃なりき。苔路につもる花の雪、これや軒なる八重ざくらの名殘ならむと、ふみ分けかたうためらひつゝ、心もひろうつくりなしたる、池のほとりに、いざなはれつ。かの八橋のわたり思ひやらるゝ、かいつはた色こくさきて、衣にもすらまほしく、紫はげにいとなつかしきいろなるを、あけをうばふとにくませ給ひけむひぢり心も、至らぬ者の心には、いとわきかたかりけりやなど、物がたり聞ゆるほどこそあれ、おぼつかなげに一こゑ二こゑなき出でたる、蛙の聲いとみやびにあはれなり、いつれか歌をよまざりけると、昔の人のいひ、又井出のかはづなどもてはやすは、今いふ河鹿なりとかきけど、これもいとをかしうきゝなさるゝこゑなりや、いさら水たゝえたる所には、いつこにもきけど、所からこそは、うたへるこゑも、をかしうこそと云ふほどに、ここかしこの友さそひけむ、もろこゑ諍うどよみそめぬ、止むべきほどのよすかならねど、今宵は、やどり給ひなむや、月も夜ふけていとしづかに、池の鏡にうつりなむ、おぼろよのしくものなき影をめて、蛙のこゑも諸共にきゝふせりなむ、いと

うれしかるべきと、なつかしき友の心深うのたまへど、いかゞはせむ、母とじの待おはさむに、夜もふけば、罪多からむと、むかひにたてる、下つかへのそのこともに、分心のこして立いづるに、暫しとて、

もろこゑを我もかはつにそへなゝむ
　つれなくかへるきみとまるやと

かへし

かはつなく此いけみつにすみなれて
　こゝろのたまのなとかへるへき

人

三河國幡豆郡平坂町石川美野方　石川滿壽子

花の香にあくかれし、胡蝶の夢のさめやらで、猶ちり殘る花もやあると、程近き野邊へ徨ひぬ、綠の小草ふみ分けて、行きゆけば、とある池のほとりへ出でぬ、汀の彼方に山吹のいはぬ色に、匂ふも床しく、卯の花の白雪とみまがふ迄に、咲き亂れて、色とりどりに、池水にうつる狀の、げにいひしらぬ眺めになん、折しもいづこにや、怪し音に我を呼ひたつる氣はひなれば、誰ならめと、こゑする方へとたどり行くに、やがてさゝやかなる庵へ出てぬ、かの怪しけなる聲は、そがほとりの、蛙の鳴きしきるにてありき、その節面白く歌ふこゑの、何となうあはれに覺へ、しらず〲にかの庵にいこひ、我身のこしかたをおもひ、たゞ呆然たる折柄、ふとあなたの池の小さき浮木に、蛙の三つ二つ、そが上に昇らばやと、互に競ひて劣らじと、幾度となく落入りて、たやすく上りかぬるよと見へけるが、そが中の極めて小さき蛙の、遂にのぼりえたり、先つ方われを呼ひしは、古の聖人のこれによりて、文かく道を勵まれし古事にちなみて、わらはの怠りをいましめんとにてありしか、あゝ幸なる事をしたり。それとはしらで、今日迄花にはうかれ、月を愛で、暮れ行く月日は人の上とのみ思ひて、怠り居たるうたてさよ、いざ之よりはわれも亦、ひたすら勉め勵までやあるべきと、心に悟る折から、一しきり心ありけに、鳴く蛙のこゑの嬉しく、名殘惜くは思へども、入相告ぐる鐘の音のするにいそぎ歸りぬ、後のいさめの栞にもと、かくはかいつけぬ。

肥後　田代艷子

庭の山吹、さきそめしより、かしこの藤や、如何ならむそこの、つゝじや、いかならむなど、思ひやる折しも。昨日今日庭の、ふち波、ひもときそめて、池のあやめも、人まちがほなる、よし、

菜のおきなの許より、いひおこせたるまゝに、例のはやり心もて、へだてなき友、そゝのかしつゝ、直に、そが許へと、はせぬ。市中をさりし、一かまへは、世の塵の、かゝらぬげなり、我より先に、人やとひけむ、庭のしをり戸、あけはなしあるに、さしのぞけば、おりたちつゝ、人まちがほなるは、花にはあらぬ、あるじの君なりけり。導かるゝまゝに、園内ふかく、分け入れば、わざとならぬ、庭のしつらひ、たゞならぬに、枝おもしろき、小松ども、こゝかしこ、みどり、ふかむる間を、ぬひて、さきほこりたる、丹つゝじは、我はがほに紅をきそひ、池の汀の、花あやめは、白きは、きよく、紫はゆかしく、とり〳〵、水鏡に姿よそへる様いはん方なし、ゆかりに匂ふ、ふぢ棚には、若紫の、波たてる、こも又いひしらず、「さがるほど名はあがりけり藤の花」など、古き言の葉口ずさみつゝ、水の上高く、さし出でたる池殿に、やすらふ、ほどに、風のまに〳〵さゞ浪立てる、水の面には、盛りをすぎし山吹の、二ひら三ひら、たゞよふも、いと、心もとなく、暮れゆく春の、何となく、身につまさるゝに雨をよぶにや、はた友よびかはすにや、一しきり、蛙のもろ聲に、なき出したる、折にあひて、あはれなりや。

相模　森田葉留子

ちまたを離れ、水せきいれし田、あるは木立しげれる、家居のまばらにある、中にさる故翁のしつらへし清風亭となつけるあり、知人ありければ、この頃のけしき見んと、たづれたり、東南の方に池ありて坪數四坪ばかりなり、鯉鮒などうかぶ、かれて蛙のことを、きゝ居たれば、まげて今宵をと、のぞむ、あるじも、いとこゝろよくもてなしぬ、くるゝ頃より、一こゑ二こゑ、なきたつるよときくまに、一齊にこゑふりたて、あますところなき迄に、なき渡れり、ころしもいざよひの月いとあかくさしのぼりつるに、みぎはの松が枝すみゑのごとく水面にうつれり、なきたつるこゑの月の世にもひゞかんばかりにて、いましも天女の樂をもちて下りもやせんかとぞ、思はる、やう〳〵ふけゆけば、月のみかこゑまで、さゆて、きこゆ、あたりのさびしさもふかうなりぬ、いたづらにおどろかしみんと、水面につゞき音させしに、かきけすやうに、なきやみて、あらしのあとに、異ならず、しばしゝてたちまち一こゑ二こゑなきたつるにや一齊になきわたる前のことし、かしましといはゞいはなん、かく、しつまりての、のちにきくは、いよ〳〵耳すみて、あかず、おもしろし。

東京　杉田繁子

庭の面に、咲きの盛と、見えたりし櫻の、ふくともなき風にさそはれて、蝶かとも見え、あるは時ならぬ雪のふるかとも見ゆまでに、ちりまがふは、をかしきながめなれば、今宵は月も中ばならんに、花を見がてら、歌よみなどせばやと、みやびの友どち、三人四人のもとに、せうそこかきおくりなどして、暮るをまつほどに、長き春の日もやう〳〵たそがれになりて、木のもとにともし火などつくるほどに、まろうどゞもあつまりぬ。池のおもにのぞめるやかたに座をしめ、おばしまにせなかなしつゝ、心もとけてかたらふほどに、おぼろ月のかげほのかにさしのぼる。ねもいはれずをかしきに、一刻千金のからうたなども、かゝるをりにやありけんと、友の誦れば、我もふりたる琴などとり出し、時にあひたる一ふしをかきならす、折しも思ひかけなう、池のかはづの二聲三聲うたひそめたるに、耳をすませば、彼方此方よりあつまりて、低く高くもろこし人の、樂にてもかなでけるやうにきこゆ。

池殿に歌よみかはす人々の
なかにいりてもなく蛙かな

盛さそへるこゑは、いつはつるともおぼえねば、露とともにおき

あかして、わが友もみやびごとすしあそばゞやとさへおもはる。

肥後　佐々有鄰子

一葉二葉卷葉の水の面に生いでたる蓮葉は。朝露夕露の玉をかざして。風にゆらるゝさまゆかし。さとかをりくる立野の池にさしかゝる。小亭なれば。晝といはず夜といはず。夏をよそなるところなり。七十ぢゝかくなりたまへる。兩親君は。酒に茶に何くれと。種々のものとりもたせたまひて。今日も小亭にとはいでましぬ。耳うとくまします父君のことゝて。妾を呼びたまひ。水面になにやらんものゝねのきこゆるは。いかなるゆゑかとゝひたまふものから。そばだゞて。きゝつれば。ころびれの蛙にぞありける。かく。白し上げつれば。母君の小琴とりいでよとのたまへば。コロリンシヤンと調子をあはせて。席上の興をそへぬ。父君は。みゝうときこゝろなぐさの琴のねに調べあひてもなくかはづかな。

備後　枝ゆき子

昨日迄、いみじう香りたりし白梅の花も、あはれや、あとかたもなくなり果てぬれば、いかでいかで鶯の花をたづれて谷の戸出でむものかは、さるな、春雨がちなる今日此頃の事とて、今朝よりしめやかにふり出でゝ夕つ方よりやみぬ。折しも、妾は茅の池亭にて書よみけるが、日のやうやうに暗くなるまゝに、字をもよみ得で庭の面を見やりぬ。時はしも、夕月のいとおぼろなるが、中空にかゝり、昨日迄、天つ乙女のすがたして、庭に咲きみだれし櫻の花の、今日の風雨にいたくふきちらされしぞが上に、巳が影をやどし、邊の木々の若き芽の雨のしぐれにうるほひて、勢得たらむ風情なるなど、其景いみじう勝れて覺ねき。さればこそ、古へ人も、春雨の夕景と、文にも作り、歌にも詠ぜしなるかの、唐の山水にたくみなる畫工李思訓王維ぬしも、其眞景は、いかゞやと思ひ侍りき。余りなる勝景に、惚としてありけるが、何やらむいと床しの音のひゞきぬ、耳かたふけてよくきけば、愛らしや池の蛙の初聲なりけり、妾は之れがため異樣の感にうたれて、そゝろ昔の忍ばれつ、あな、去年の此頃も、妾が此亭にて書よむ折ふし、小池の邊にて、妾を音づれしはなれか、はた、なれが親なりしか、なれが体も音も、させる程にはあらざれど、なれが天よりうけたるいと優の音の、いかに妾が心をなして昔を忍ばしむらむ、そも、なれは、如何なる心して、此淋しき妾が庵の邊なる、小池にとこしへに住ひて、時もたがはず、妾を音づれつるが、やよ、いぢちしの蛙よ、なれがゆかりの者なりしか、はた、あらざりしか、古へ小野道風ぬしの、心を寄しものは、あな、世にありふれたる虫も多かれど、なれが如く、古への事蹟を後の世迄も殘さむものとてはなし、さるを、妾がさがは、幼よりいと歷史なる科を好むからに、なれが、殘せし事蹟をば、さぐりきはめて、なれと共に、いでや、歷史の道に、いそしまむと、思ふ折ふし、空にはかにかき曇り、春風の一しきり、はげしうなりぬ、妾が心をくみたるにや、前よりは、一きは大なる聲音もて、なきさけぶ樣愛らしとも愛らし。

東京　椎野秀子

やう〳〵ふけゆく春の、夜の遠寺の鐘もしづまりて、人のけはひもたねたれば、おのれも池のほとりなる、ひとまにはひ入りて、燈火かい立てつ、ふみひらきみれば、實にや遠き世の人と、まのあたりかたらふ心地して、うれしさやらん方もなし、折りしも庭の松が枝に、さしいでたる月のさやけさに、またひとしほ心もすみまさりて、椽ちかくなりたては、今まで絶ねてきかざりし、若草のあたりに、なきいでたる蛙の聲、かの古人の折にあへば、これもさすがに哀なりど、いひし昔の葉もかゝる時にもと思へば、ひとしほ哀れさもまさりければ、

牧の庭

哀れさを月にそへてや池水に
　ともよひかはしなく蛙かな

東京　椎野薫子

てりつゝく夏の日は、吳竹の根岸の里も、さすがに葉末をうごかす風だになく、前栽の青葉も塵にそみ、うち凋みたらんやうにみゆ、軒端の風鈴も音たゆて、そのむしあつさたゆべくもあらず、おのれふみよむことも懶く、團扇を手にしてそこはかとなく涼を追ひ、かしこの松の下、こゝの柳のかげ、さては泉水にのぞめるあづまやにやすらひ、そよとの風をもとむるも、水さへ涸れてその甲斐なし、折から上野の山の端に、一つ二つ黑き雲のみゆたるに、したひにうちひろがりて、鳴神さへ遠く聞ゆたるに、池の蛙のこゝかしこ心せはしく鳴きいでたる、折にあへばこれもさすがにうれしく、此夕ぐれの心地やいかならむ、

東京　金原玉城子

南の風、ぬるう吹て、いとうかすめる、中ぞらなる、月のきぬ笠を、おほひたるは、雨をもよほすにやと、池のつり殿に、しばしながむるほどに、かなし心の、友どちこれかれきあひて、げにおぼろ夜にしくものなしど、ずんじ出たり、あるは唐やまとの、うたあらそひなどするに、みなそこにて、蛙のうちそへたる、こゑは、をりしりがほにて、いとをかしうなん。ひとつふたつときくほどに、あまたきそひて、なくをあなかまといへど、きゝもいれで、さくら山吹、ちるころ〳〵とさへ、あはれなる、ふしをそへたるは、うた人のたぐひになむ

しき島の道の友とちかたらへば
　池の蛙もうたふよひかな

みやびこゝろあるにやと、をかしうなむ

和泉　福原菫子

降り續きたる昨日の雨も、やう〳〵晴れければ、草紙かいやりつゝ、やをら身を起して、庭一つ彼方に造られある、池のあづまやへと來て見れば、花は大方に散りうせて、跡方もなく、只春の形見と、一ひら二ひら、池の面にうかぶもあはれ、折から鳴き立つ蛙の聲、いとたかく、共に花を惜しむらんと思へば、いはん方なく、あはれなる心地せられてなん。

伊豫　梯たけ子

暮れ行く春の此日頃、あかすながめし庭の花は散り果てゝ、瓢の形せる池の面に名殘を止めて、一ひら二ひらちり浮びたる汀には、今を盛と枝もたわゝに、黃金色なる山吹の咲き匂へるに、其のかたへには、あたりも照るばかりに、紅ふかくさき出たる躑躅の美しさ、何れ優り劣りなきが、淸き水の上に影を寫したる、ゆも云はれず、此けはひを餘念なく眺むる折しも、我世がほに鳴き出でたる蛙のこゑの、何となくあはれに覺ゆて、花に鳴く鶯にたぐへて云ひけん古言さへ、げにと思ひ出されて、いづこならんと見かへれば、思ひがけなくも、かたへに萌ゆ初めし蓮の若葉に座をしめて、我は顏になく姿の、なかしとらをかしうなむ、なほ靜かに聽き居たれば、彼方此方に、鳴き出づる聲の數そひゆきて、やう〳〵日も暮れゆくまゝに、小やみなく諸こゑになきしきりたる。さながら春を惜しむやうに思はれて、いとあはれなりや。

愛媛　南脊子

わがやどに、臨める淸き池の面にはらふたき緋鯉のあまたうきつしづみつ、汀には折しも、黃金色なる山吹の今をさかりと、咲き匂へる、此けはひの、美しさ、げに人にもほこらまほしきに、まいてかなづる小琴の瓜音にあはせて、鳴きいづる蛙の聲よ、花になく鶯のごと、妙なるにはあらねど、いとおもしろき心地せらるゝよ。

信州　内山けさを子

徒然のあまり、そと障子あくれば、心いぶせきさみだれ、いつか晴れやりて、庭の立石など清く涼しく洗ひ流し、雨のあと、興ある蛙の歌二聲三聲、久方にとゞきけん、さやかなる月は東の森かけより笑み出でゝ、物心も、すがすがしうなるまゝに、庭におりたち、蛙のやど尋ればやと耳さかだてつ、茂るあやめ草にさみだれの名殘止むる白露も、あはれ我が袖にはらはれて、惜しき思ひのせらるゝなり、ふらふらと池のほとりにさまよへば、聲音は征々高う聞ゆれど姿は見わかず、たゞたゞ岩の上に散る花一つ汀にたゞよふ木の葉一ひらあるのみ、かきよせたくはあれど、池の事とてせんすべもなきつらさ、木々のひまよりもれ出づる月影につくづく見れば花にまごふは蛙の背にてありき、青葉の如く見ゆるは青蛙にて、愛らしき手もあり、にげなき大やかの口もあるなり、などかう見逃ふるものとは我身ながらもいとをかし、向ふの岸にたれし糸柳の、池面にかゝりたるそゞろ小野道風が勉めばやの心わき出でぬ、あゝとこしへに此心忘れず、忠孝はげまではいかにせん、こよひの空の限りなう面白さに、文よむことも忘れはて、とある木影にたちより、ひとり笑つゝあれば、月影うすらぎ松ヶ枝したりしたりて物暗うなり、ねよとの鐘の音たゞたゞに聞ゆ、名殘つきねど友とする月は早や西の山に姿かくすに、我もぜひなく家にかへりぬ、明けぬる日、夕べのたのしさ忘れかね、つたなき筆にてかくなん。

東京　後藤ちか子

昨日にひきかへ、ふりみふらずみ、殊さらの空、學校の途路、急ぎ歸り、日課も讀み終り、母上の仰せに、夕げもすまし、やがて椽近かく出でゝ、餘念なかりしに、長き日も今したそがれて、南の方に星一ッ、あらはに見ゆ、ものさびしく、萬の思ひに沈みしに、

耳をよすれば池の蛙、朝な夕なになきあかし、誠にものさびし、等しく春にあひながら梅の香を知らざりしにや、櫻の香を知らざるにや、かくなくか、浮世はかほどさびしきものならず、道遠くとも、陸には滊車あり、海には滊船あり、京、大阪の見物も、此頃の春ぞ賑はしき、博覽會などの賑はしさ、云はん方なし、なが池には樂しき、愛らしき、友のあるにや、京、大阪の見物は、ないて暮すなやよ蛙。

熊本　日高かず子

一日親しき友と成趣園を訪ひぬ。園内いと廣く、芝生滑なる築山數多たちならひ、其もとに湛し水清く、ひれふる魚底のさゝれ石も數ふるばかり澄みわたりたる中に、飛石の右に左につらねたるを傳ひづゝ、此處彼處とうつれる山の影ふみて下の方にゆけば、水の上にさしかけて造りなせる亭あり、いと床しう面白ければ、しばし休はんとて入りぬ。池水めぐらし、さまざまの水草うるはしうふくつあまたはなちたる、居ながら水も掬びつべく、手さしのふれば、魚もかゝらなん樣いとをかし、山吹咲をゝり藤のしなひの影なびく方に、あやしき水音聞ゆ、魚驚かさんと男童の石もや投げしと見れは、二ッ三ッつゞきて岸の蛙の飛び入るなりけり、古池ならねば逆さへいと長閑なるに、好心とゝめがたう如何で今宵は此處に居て彼聲を聞かばやと、夕暮待つをあはれとは知るや知らずや、三日月のほのかにさしそめし頃、此處よりも彼處よりも聲合せて鳴立つるが、何となうさやかなるは水の心やかよふらん、高く低く同し樣なるは何れまさるとも聞きわきかたうなむ、何思ひけん友の口笛吹出てしに、やがて一きは耳にたちてらうたき聲のきこえたる、清原のおもとの、夜なかぬならうまれし處の水の底に棲むよとおほへてなつかしかれは、是そかしかなるとなむ、始めて聞て珍しうもてはやすに、都人よと笑ふ、いな鄙ひた

るなのみきゝつけてと答ふるも恥かしや、しばしつゝけてやみたるに、此度は已まれひづれと口なれゝば、幾度呼べども鳴かず、はや去りたるにやと友の呼べば同じ音くりかへす、あなにくしといふ聲の高かりしにや、水音して何處に行けん、友の呼べとも答へずなりぬるぞ口惜し、罪を己に負せられたるもまた恨なり、夫れにのみ心うつりて、きこゑざりし外の鳴音の頓にかしましければ、更けては家の人々心痛むらん、月影の入り果てぬまにと、心殘して急ぎ家に歸りにけり。」

兼題廣告（上欄は歌 下欄は文）

		歌	文
五月	十五日	夕蛙	故郷を出づるの記
六月	一日	雨後蟬	夏初野外に遊ふ
	十五日	池蓮	結婚を祝する文

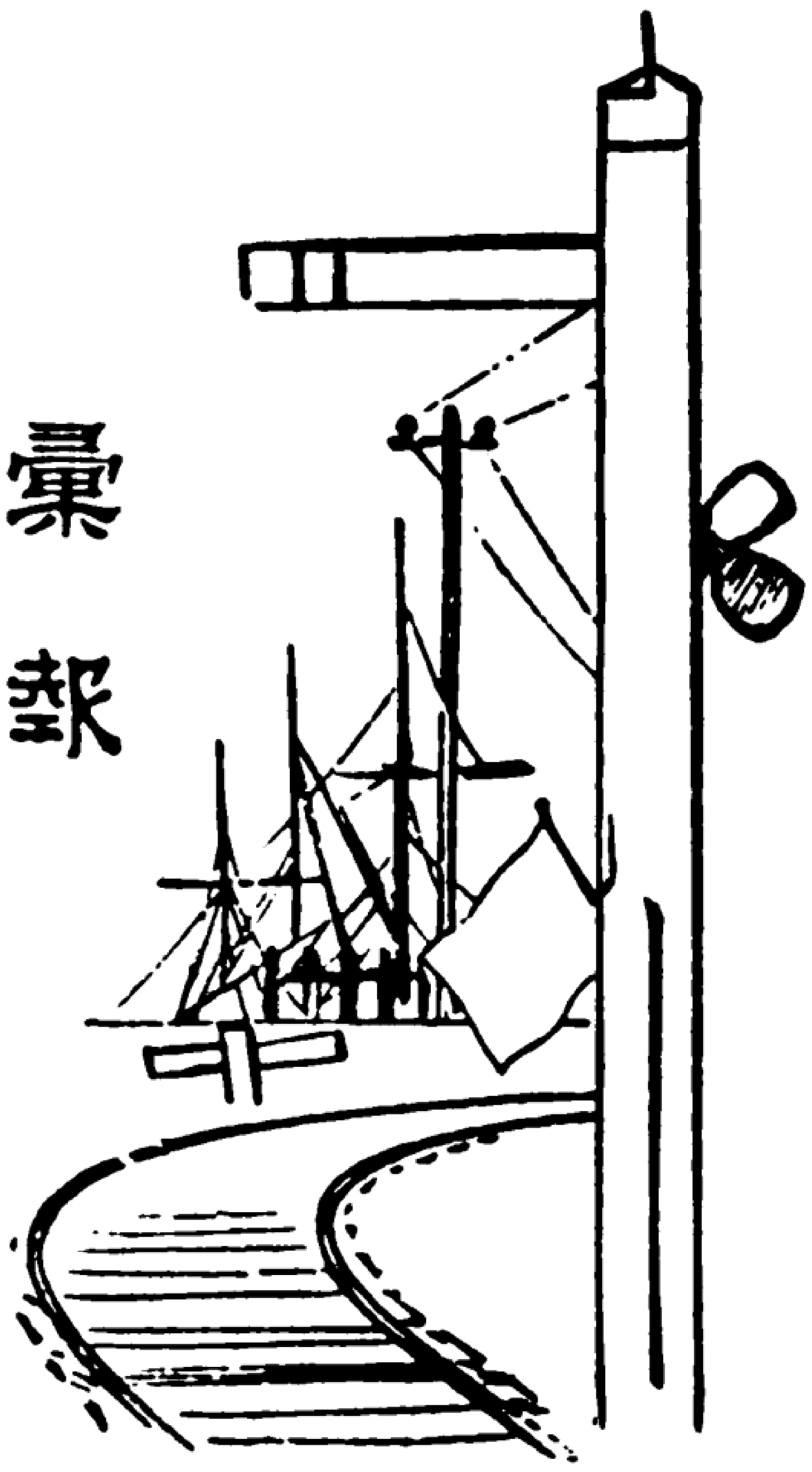
注意　投稿締切期限は總て發兌日の十日前則一日分は前日の二十日、十五日分は其月五日とす。依りて其期限内に到着すべき日取りの順序を數へて寄稿せらるべし。

天地人當撰者には文は壹圓（天）五拾錢（地）三拾錢（人）歌は各其半數の計算を以て孰れも代價相當の書籍を呈す。

明治三十六年五月　女鑑編輯局

○女子大學生と其父

萬朝報は、其の机の塵に記して曰く、小石川の女子大學々生はお化粧に贅澤を競ふとやらて、此の間も田舍出の一女學生が親許へ毎月三十圓宛の學資を求めると、大地主の爺も一驚して、何故其程の多額を要するかと問返へした、スルト其の娘の答辯に曰く抑も我が女子大學は良妻賢母以上（賢母良妻を作るは高等師範學校までの任なり）を作る所ゆゑ余の爲め田地の一二町を賣飛すも惜む可からす」と「良妻賢母以上の女學士や、女豪傑が續々輩出されては、少々迷惑するなり、賢母良妻を作るといふ高等師範學校位て、先づ勘辨してもらいたいものだとは、眞面目な親達の希望なるべし、全体女子大學なぞ云ふ其の名からして、賢母良妻以上（以外とはいはず）の意味を標識して居るにあらすやと云ふ人もあり。



彙報

○博覽會行幸

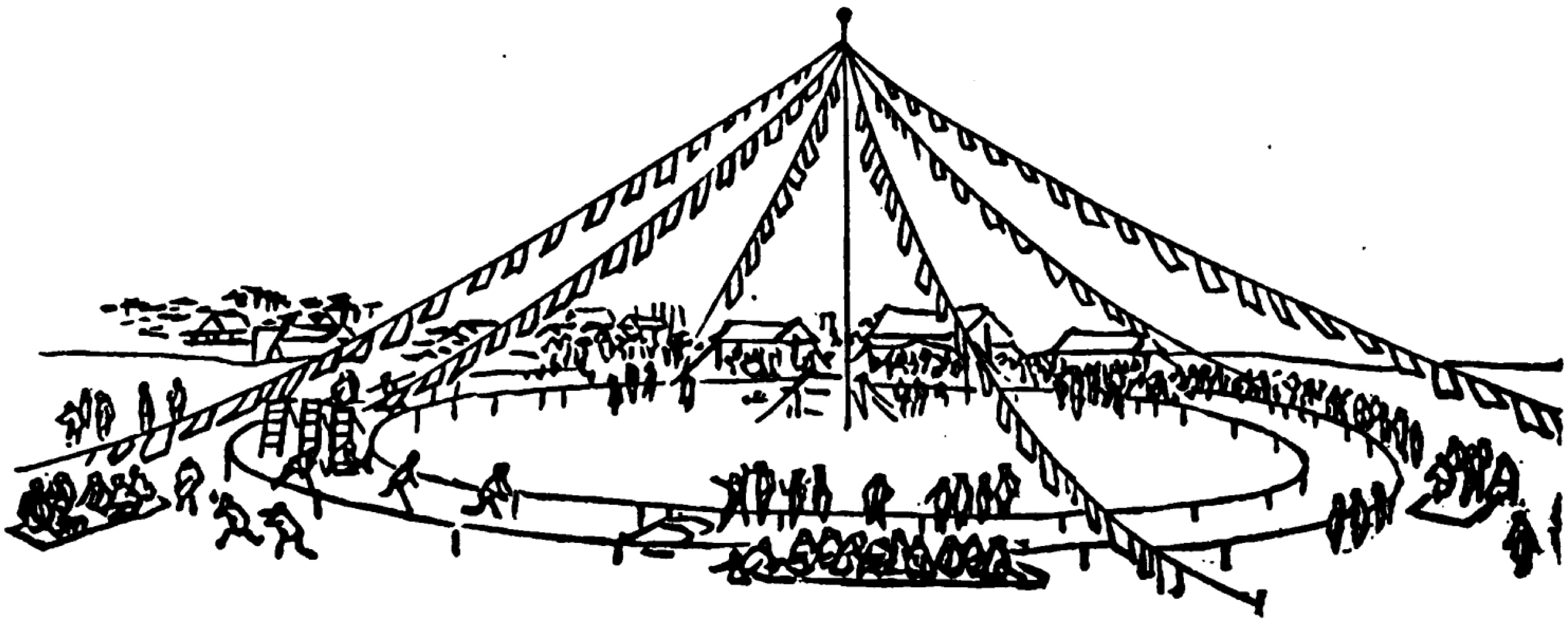
天皇陛下には東伏見宮依仁親王久邇宮邦彦王兩殿下を初め德大寺侍從長田中宮內大臣、岡澤侍從武官長、三宮式部長、長崎、山內、栗原各宮內書記官、岡侍醫局長以下供奉廿日午前九時四十二分梅田停車場へ御着輦あり小川師團長、高崎知事、加太控訴院長、鶴原大阪市長、服部兵庫縣知事、大西堺市長、貴衆兩院議員其他赤十字社員等の奉迎を受けさせられ暫時停車場內の便殿に御休憩あり此時百一發の皇禮砲を放つ九時五十分　陛下には大元帥の正服を召させられ龍顏麗はしく停車場出御御車寄より無蓋の御馬車に召させ給ひ第二公式に依り御順路を經て博覽會式場に御着あり閑院宮殿下總裁以下參列員一同奉迎閑院宮殿下の御先導にて美術館內の便殿に入御午前十時式場に出御閑院總裁宮殿下より上奏文の捧呈あり　陛下には左の勅語を賜はる

第五回內國勸業博覽會の設け成るを告く朕玆に親臨して開會の典を擧く列品の衆多なる前回に倍徙す技術の精巧なる必す觀るへきものあらん況んや外貨の陳列ある今回を初めとす我を益すると當に大なるへし爾官民倍々乃の心力を一にして我國光を發揮し以て文明の華を賛けんことを期せよ

次に各地方長官總代高崎大阪府知事の祝詞あり是

雜報

にて式を終り　陛下には再び便殿に入御午後零時十分同館御車寄より御乘車德大寺侍從長御陪乘にて御還幸あらせられたるが奉送者は御臨幸の時に同じく同五十分梅田驛御發輦あらせられたり是より先き博覽會塲は前日來徹夜にて大掃除をなし美術館を除くの外前日午後五時限り閉塲同朝六時以後は表門より式塲に至る大道路に通ずる横道は一切通行を禁じたるが奉送迎者及拜觀人頗る多く御道筋は殆んど立錐の地なき程なりし



○勤王家遺品の天覽　現任豊橋區裁判所監督判事戸田忠正氏の祖父贈正四位戸田忠太夫忠敞は水戸藩執政の職に在りて烈公を輔佐し勤王の大義を唱へ父銀次郎忠則亦夙に勤王の志士なるが今回　陛下の名古屋御駐輦を機とし兩士の遺品を　天覽に供し恐れ多くも行在所一夕の宸襟を慰め奉らんと同判事は離宮に携帶出頭し　天機奉伺の末大島師團長を以て岡澤侍從武官長に執行の事を諮りしに七日夜御着輦後同武官の執奏にて午後七時頃御所に差出して乙夜の覽に供し奉りしに洩れ承はる所によれば　陛下には御機嫌いと麗はしく珍らしきものを見るものかな齊昭(水戸烈公)の手蹟は屢々見たる事あれど戸田忠太夫の手蹟は此か始めてなりとて御手つから繰返し々々叡覽あらせられ聽て又德大寺にも見せよとの難有

御沙汰ありしかば徳大寺侍從長は御次の間に於て拜見の後結構の物にはべりと申上げたるに忠太夫はいみじきものなれば渠が勳功にめて遺墨の和歌を寫し取らせ給ひて政務の餘暇に見まはしなど仰事ありしかば　叡慮の程を忠正氏に傳へたるに氏は祖父忠太夫も嘸かし黄泉にて感涙に咽び申さんとて御禮申上げ聽て其夜の内に和歌等は之を侍從に書き寫させ尙ほ戸田由緒書附兩士の略傳は御手許に止めさせられたりと又十二日　皇后陛下にも當離宮御駐輿の際香川皇后宮太夫へ御下命あらせられて戸田判事より　御覽に供し奉りたしとの申出を御聽許あらせられ特に忠正氏を御座の間の御次へ召して拜謁を仰せ付られ其際香川皇后太夫の取次にて前回　天覽に供したる品々及び更に戸田忠太夫遺著『學の美知志類遍』一卷を奉りたるに忠太夫の遺著一卷を和歌短冊五首の内『遊春野』とあるは殊の外御意に適ひ『學の道志類遍』寫本と由緒書忠太夫銀次郎兩士の畧傳も御手元に止めさせられ且つ稀世の品々を一見して滿足に思ふとの御沙汰あり戸田判事は同姓の光榮此上なき事と感涙に咽びて退出したる由其の遺品は左の如し

水戸烈公より戸田忠太夫忠敞へ送りし書翰

久濶之處履況無恙令大悅候此若瓶艮爐差贈候間謙間可用候也

正月念三　　齊昭（花押）

戸田忠敞

二白甲辰以來忽然十年光陰如銃丸實に一瞬之間に候

世に風の擬り起ぬ留に習はれは
月雪花ぞおの賀友なる

忠太夫の肖像に烈公の賛したるもの

君の爲民の爲めにと明け暮に赤き心を都九之つろかな　景山賛

短册五枚寫

戸田忠太夫の折にふれてよみし和歌

賴朝懷舊

宵のまや月蒙しはしの木隱はのちてらんとの曇りなるらむ

梶原景秀

さきいてしいくたの春の梅か香の布たゝひ匂須摩の浦風

遊春野

さくら咲野邊にあそひてくれぬともよしやかりれは花の下陰

思ふことありて

國のためよの爲ちに思ひつゝはなにこゝろもそまぬ春かな

この春よし野にいたりける人の許へ

こゝろあらは花にとはまし木かくれて三つの寶のありしむかしな

○私立東京高等女學校開校式　豫て記したる同校開校式は去月十九日午前十一時より芝區三田四國町（元水産學校跡）なる同校講堂に於て執行したり棚橋一郎氏本校設立の由來を陳べ次に勅語捧讀、校長棚橋絢子女史の開校趣旨、常宮、周宮御用掛小川直子女史、



女子高等師範學校教授野口保興氏、三輪田眞佐子女史、東京府第一高等女學校々長林吾一氏並に星松三郎氏等の祝詞並に演説ありて午后二時全く式を了へたり左に記せるは小川直子女史の演説中に弄讀したる祝歌なり

咲いてむ花の薫そまさりける
けふ植ゑわたす大和なてしこ

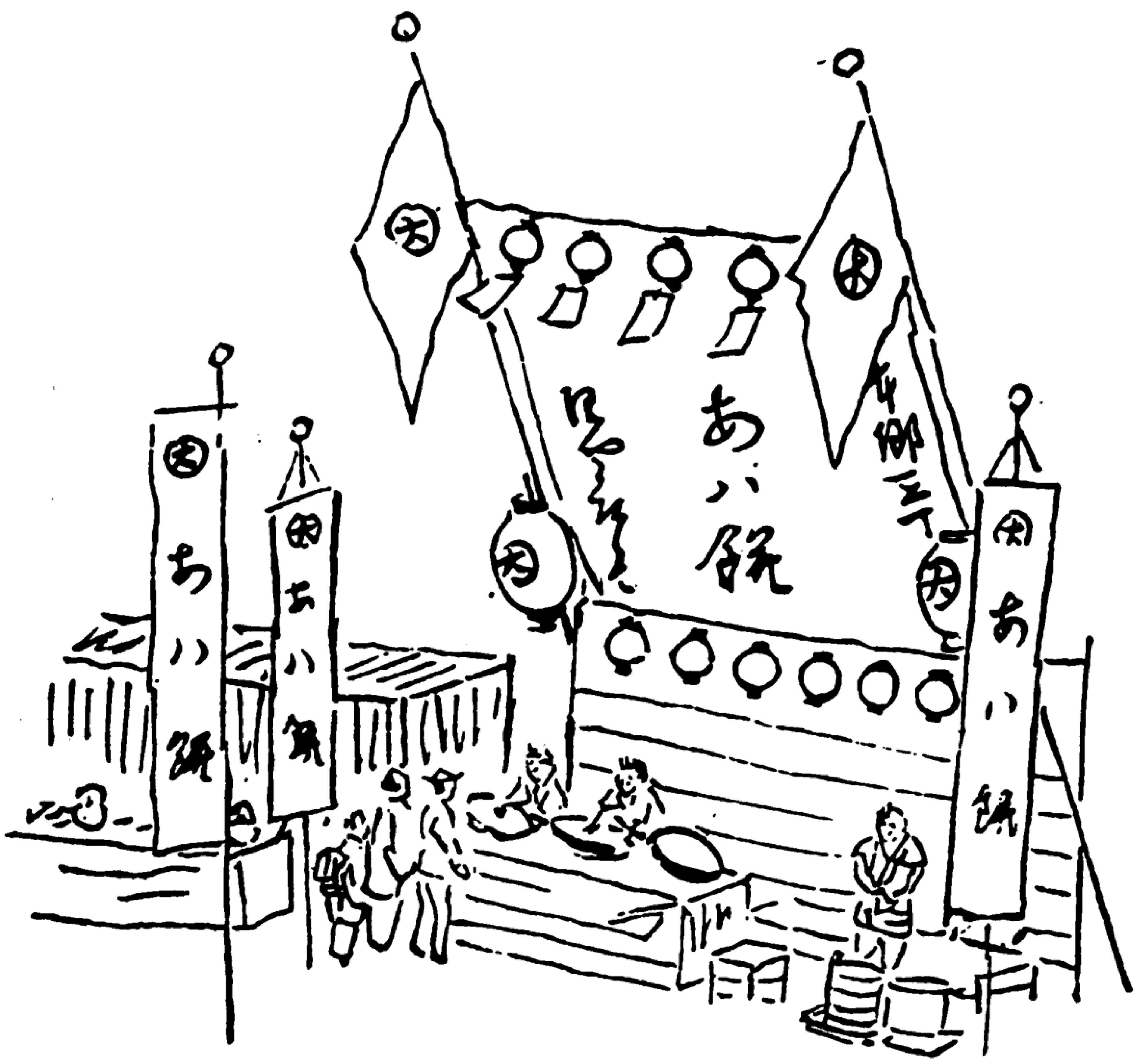
○京都淑女學校卒業式　同校の第一回卒業式を去月一日午前九時より擧行せしが田中京都府視學官、内貴市長の告辭、田島校長の訓辭、來賓安達安子の祝辭、卒業生總代岡崎秀子の答辭、在校生總代中田小瀧の祝辭ありて盛會なりしと云ふ今回の卒業生は本科二十名別科五名にて前號口繪に掲げたるは

則ち是れなり、その姓名左の如し。

足立信子　松山歡枝
奥田一枝　岡崎秀子
西尾久子　中田ちま子
水田やゑ子　大田岩子
衣川りゆう　關田米野
井澤澄子　金森きの
平野俊子　若林照子
松本一重　奥村家子
澤くの　島村丹子
河村ちゑ子　武田こう
綾部直子

○實踐女學校の展覽會

下田歌子女史を校長に靑木文造氏を副校長となせる實踐女學校女子工藝學校にては此度新築竣功せしを以て去月十八日其落成式を擧ぐ



ると同時に生徒成績品の展覽會を開かれしが其重もなるは裁縫にて和服袴被布等頗る手際よきもの多かりし、女子の工藝中第一位に居る裁縫の重きを置かるゝは吾人の最も賛成を表する所なり、刺繍にも精巧を極めたるもの多く金銀紅綠燦爛として眼を眩す、其他挿花、造花、和漢畫、洋畫、筆蹟等何れも其教習年限の短きに比すれば大に稱揚すべきの成蹟見ゆ、特に和歌と書札の双美を兼ね

備へしかた〳〵少なからぬは校長の刀自が殊更此の兩道に秀で給へるに由るならんか因云近時の女生徒には讀書力の勝れたるに似ず筆蹟の拙なき爲め其人品に迄影響するが多し、女子教育に從事する人々の注意こそ願はしけれ

○フレーベル會第八回總會　去月廿一日午後一時より女子高等師範學校附屬幼稚園に於て、開會せしが會長高嶺秀夫氏代理として幼稚園主事中村五六氏開會の旨趣を陳べ次に會務の報告、幹事の改選を行ひ井口アグリ子の體育と衣食住との關係及びタッピング孃の實驗に關する演說筑前琵琶等の餘興あり出席者



會員百餘名來賓數十名にして盛會なりき

○和洋裁縫實修女學校の設立　神田區北神保町に設立したる同校は學科課度を、本科、教員養成科、洋服專攻科刺繡科（和洋の）四科とし傍ら女子必要、學科をも授くる由又同校にては、裁縫教授に關する教授書を編纂する筈にて既に洋服に關しては米國ミッチエルの裁縫術教科書を摘譯し不日出版發賣すべしと云ふ

○赤堀峯翁米壽の賀筵　日本料理界の泰斗と仰がれ久しく斯道の教授に身を委ねたる赤堀峯翁は今年八十八歲の高齡に達したるを以て磯部武

者五郎、石川正作、戸川安宅等諸氏發起人となりて本月三日午前九時より米壽の賀筵を日本橋區濱町日本橋倶樂部に催ふし餘興には筑前琵琶、臺灣踊等も有し由

○女子音樂研究會　女子に善良なる音樂的情趣を授けん目的を以て同志の者集りて、東京音樂學校教授天谷秀氏を講師とし假りに教場を神田今川小路二丁目十三番地天谷氏方に設けたるが理事は中島千代子にして毎週土曜日曜兩日篤志の輩にオルガンを教授する由

○女子同情會の幼女養育　昨年八月中板垣伯爵夫人等の首唱にて設立されたる、京橋區築地町女子同情會にては、早速その事業の第一着として同



月中會員四五名市ケ谷監獄に出懸け、長野縣上伊那郡富縣村大字北福地吉澤ハル(三十)といふ女囚が、足手纏ひの幼女ハツ(三つ)といへるを引取り遣りて、神奈川保育會なる佐竹音次郎といへるに養育さする事となしたる顛末は、當時世人の知る處なりしが、　女囚ハルは今回刑期滿ちて此程出獄せしより伯爵夫人絹子は會員三名と共に、幼女ハツを連れて監獄に出頭し、無事ハルに引渡したるより、ハルの喜び大方ならざりしといふ

○奇特なる老婦人　去る四月七日附を以て日本赤十字社本部へ小野田香川縣支部長より發したる報告に依

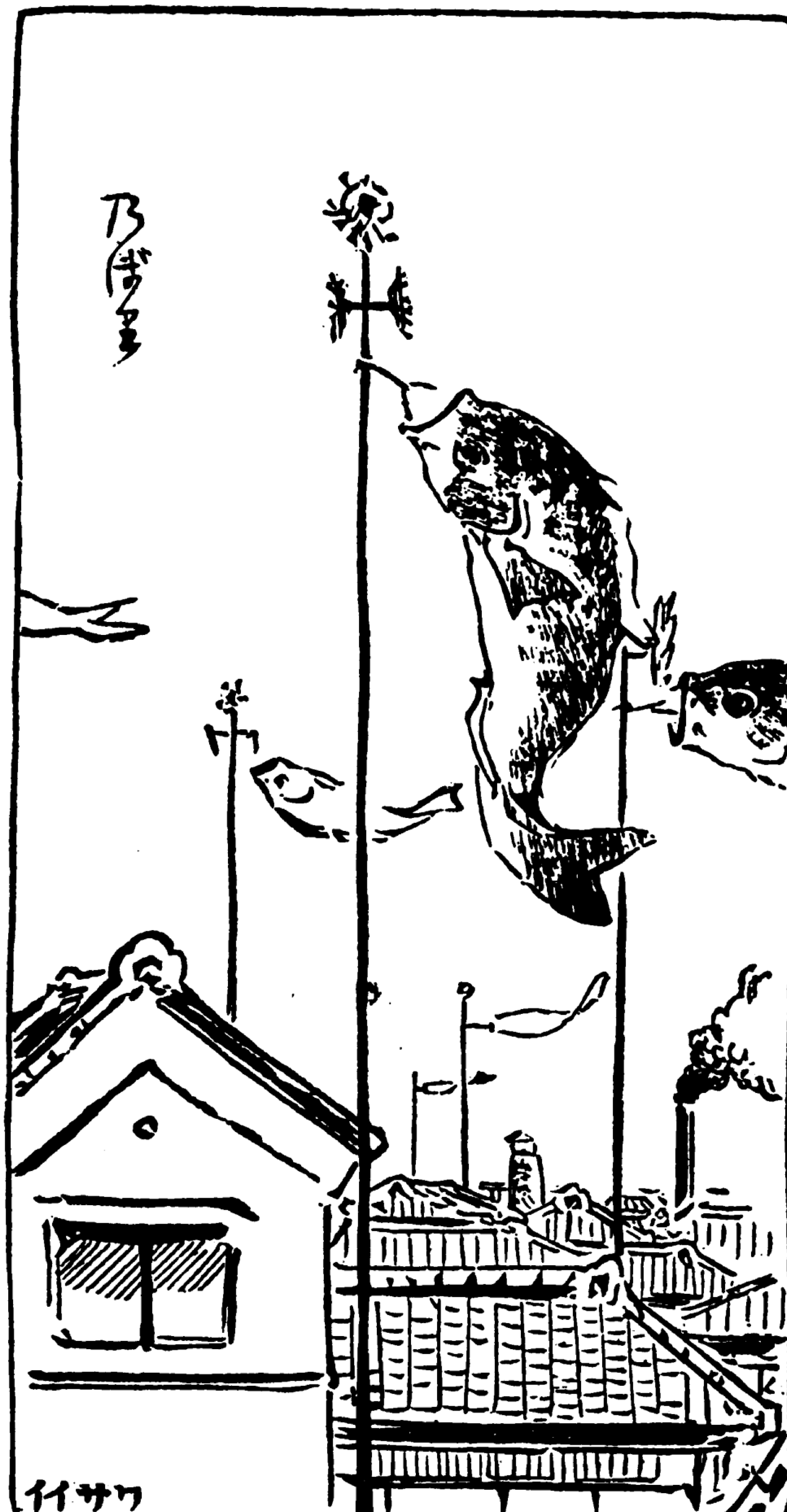
れば野口いせ（七十六）なる老婦は同縣香川郡安原上東村の農にして性來慈善を好み生活の費用を節して神佛に喜捨せし事も多かりしが過般赤十字事業の趣旨を聽き一方ならず感動し如何にもして社員の列に加はらんと思立ち農業の暇には日傭稼ぎを爲して細き烟を立る貧者なれば輙くは行はれず日傭賃の中より一日一厘二厘づゝを貯蓄し此程辛くも一圓に滿ちたれば直に同縣支部に出頭し之を寄附したりと云ふ因に本社にては支部長の通信を具し總裁の宮に言上したる由

○殊勝なる小供の遺言　日本橋區長谷川町一鈴木彦兵衞長男與一郎（九つ）は昨年四月より通り旅籠町代用日新小學校に入學せしばかりなるが學校の成績も宜しく品行も良好なるに教員も望を屬しゐたるに此程より病氣となりつひに死去するに至りしが其生前父より貰ひし小遣等も冗費せず其都度々々郵便切手貯金をなし其額一圓七十七錢五厘に上れるが死ぬる今際に父に遺言して學校にて先生に向ひて教育勅語の中に博愛衆に及ぼすの趣旨に基きこの金は半分は學校のお友達に紀念として贈り半分は青森の饑饉地に義捐して下さいとの事に父も其殊勝なる志に感じ其遺言通り一圓五錢にて墨數十挺を買ひ同級生に一挺づゝを贈り殘金は青森へ義捐したりといふ

○國光社春季運動會　去月十九日午前八時より向島八州園跡にて開會せしが同社印刷工場なる三百餘人の男女職工が旗取、提灯、球杓子、鈴割、綱曳など番組によりて各々得意の技を闘せしことなれば中々に目覺ましかりき、餘興には丸一大神樂粟餅曲搗、福引等もありて退散したるは午後三時過ぐる頃なりしといふ此日は連日の雨晴れて氣候暖和なるに遲櫻のなほ咲き殘れるもありて墨堤十

里の道は士女絡繹として引きも切らざる有樣なりしとぞ

○兜人形　六々鱗の吹流に登龍門の出世を利かせ軒端に茸ける菖蒲草のあやめの中にも惡魔を拂ふて男子が行先を祝ふ例の端午の節會も早や程近きにぞ日本橋は十軒店を始め淺草茅町の人形店にては昨今店頭に兜人形座敷幟など飾り立てゝ商ひつゝあり今其相場を聞くに神武天皇、日本武尊、神功皇后、八幡八郎義家鎭西八郎爲朝、加藤清正などの一人立にて二尺物三十圓より七十五圓、尺九は二十圓より五十圓、尺三は十五圓より四十圓、八寸物は十圓より卅五圓、六寸は五圓より二十圓、五寸は一圓より十五圓迄なるが二人立は此の價格の倍と知るべし、◎變物にては桃太郎陣立十圓、爲朝御殿三人立



雜報

十圓、飾馬一圓より十五圓、具足三圓以上五十圓にて金物仕立は五圓より八十圓、諫鼓は七八圓より二十圓まで◎木彫　は軍人馬乘四五圓より十圓鬼若丸三圓より十圓金太郎二圓五十錢より八圓、桃太郎三圓、馬乘並物二圓より二十圓まで◎吹流巾仕立の鯉は九尺物二圓、二間は三圓、二間半は四圓五十錢、三間は五圓九十錢なり

新刊雜書

愛國婦人	第二七號	愛國婦人社
婦人敎育會雜誌	第百五三號	大日本婦人敎育會
女子の友	第百三七號	東洋社
慶應義塾便覽		慶應義塾學報
六合雜誌	第二六八號	ゆにてりあん敎會
をんな	第四號	大日本女學會
新聲	第四號	新聲社
中央公論	第四號	反省社
慶應義塾學報	第六三號	慶應義塾學報
東京經濟雜誌	第一六七九號	東京經濟雜誌社
國學院雜誌	第四號	國學院
佛教文藝	第四號	佛教社
風調	第八號	風調社
青年議會	第四號	青年議會
史學界	第四號	史學界事務所
眞宗法話集	第七年第二編	眞宗會
倫理叢書節制		昌平館
婦女新聞	第百五五號	婦女新聞社
經濟新報	第二一號	經濟新報社
うらにしき	第百二六號	尚絅社
噫有情		東華堂
女子新聞	第五二號	女子新聞社
實業評論	第五二號	實業評論社



○哲學者の進境及一貫の精神……文學博士 井上哲次郎
○數學的智識の必要……島田三郎
○常道論……文學博士 元良勇次郎
○日本の人種及言語……法學博士 田口卯吉
○快樂……文學博士 加藤弘之
○學問、出身、目的、手段……島田三郎
○兩極主義……文學士 藤井健次郎
○苦學……文學博士 根本通明
○哲學……島田三郎
○無窮的進歩……海老名彈正
○讀書と修養……松村介石
○進化論と現今の日本……文學博士 元良勇次郎
○善良なる市民……安部磯雄
○吾人青年の三大急……農學士 志賀重昂
○苦學生に告ぐ……文學博士 村上專精
○言論文章に就て……島田三郎
○國民氣質と英吉利風……文學士 山田一郎
○青年を誡む……文學博士 加藤弘之
○ベーコン、ルッソー、及びバーゼドーの教育思想……ドクトル 尺秀三郎
○歷史的國民と非歷史的國民……獨逸文學博士 長瀬鳳輔
○慾望……文學博士 元良勇次郎
○苦學生に望む……片山潜
○福澤諭吉翁……島田三郎

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

水主天姥著

千古冤魂

石田三成

及其時代之形勢

勝てば即ち官軍。負くれば即ち賊のみ。理非往々にして顚倒し、曲直或は顚逆す。天道漠々、世事茫々慨嘆せざるべけんや。三成六條河畔の露と消えしより三百有餘年に及ぶもその冤枉は依然として、伸雪する能はざるなり。著者乃ち、明快痛切の筆を操て當年の形勢を描出し、東西の兩雄たる家康と三成とを較論比評するや。恰も法官の刑を斷ずるが如く、毫も假借宥恕を須ゐず、一褒一貶、一抑一揚の間、文舞ひ句踊て千古の功罪を眼前に見るの思ひあり。汽車關ヶ原を過ぎて、蔚葱たる松尾南宮の諸山を望みし者、此書を繙いて當年の事蹟を思はゞ睚裂け、腸斷たざれば已まざるべし、蓋し近來の快著なり。

再版

四六版美本

一部定價金卅錢

郵稅四錢

在法科大學 矢田七太郎著

幕末之偉人

江川坦庵

全一册

和製美本

寫眞銅版數葉

壹部定價

金參拾錢

郵稅四錢

著者は曾て「岳南の奇才」と歌はれし碕水生。主人公は「文武兼備勇略超倫」と讃へられ、「帝國文學」に「清新の文、警拔の識、」と一覧せしめし德川武士。雖然は近世史中最も興味饒き安政嘉永の幕府時代、非凡代官の傳記として讀むも可、一部の幕末史として見るも可。新文明の發達史として見るも亦た可なり、道義頽敗して士氣を揮へる今日世人若し武士道の理想的人物を知らんと欲せば、婦人若し德川武士の學生若し日本固有の摸範的武士に泰西的紳士の品格を加味したる崇拜者を求めんと欲せば、理想的家庭を知らんと欲せば此の書は決してパンを求むるものに小石を與ふるものはあらざる也

東京築地二丁目

發行所 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

著者	版	書名	定價	郵稅
塚原澁柿園著	再版	山崎合戰	定價參拾九錢	郵稅六錢
堀内新泉著	家庭小說	女樂師	定價參拾五錢	郵稅八錢
山崎忠和著	三版	文久物語	定價貳拾八錢	郵稅六錢
松川霞州著	再版	結婚と家庭	定價拾五錢	郵稅四錢
藤野天城著	再版	女子小觀	定價貳拾錢	郵稅四錢
塚原澁柿園著	新刊	小牧合戰	定價五拾五錢	郵稅十錢
堀内新泉著	再版	少女讀本	定價十八錢	郵稅四錢

全部完成
●花の卷 ●月の卷
●雪の卷

東京 株式會社 國光社 發行

（東京築地株式會社國光社印刷）